広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第115集

山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅸ）

1993

財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター

山陽自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
(Ⅸ)

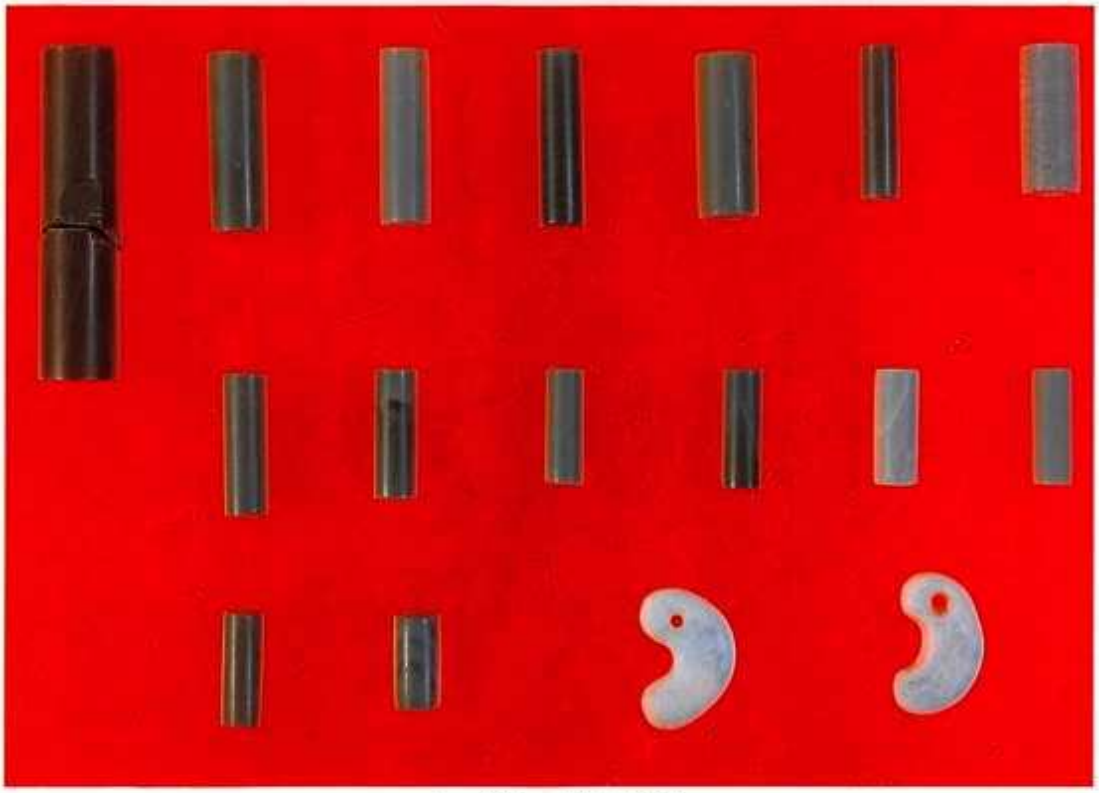
1993

財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター

a．才が迫第 1 号古墳全景

b．同上　主体部全景

a．才が迫第 1 号古墳出土土器



b．同上　出土玉類

例　　言

1. 本書は昭和63（1988）年度から平成元（1989）年度にかけて調査を実施した山陽自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財包蔵地（東広島市高屋町宮領・小谷地区）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は日本道路公団広島建設局との委託契約により財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 発掘調査は次の者が担当した。

   才が迫遺跡　　辻　満久，大上裕士

   宮領1号遺跡　尾崎光伸（現・広島県教育委員会），沢元史代，妹尾周三（現・東広島市教育委員会），藤田広幸（現・廿日市市教育委員会）

   柳原遺跡　　尾崎光伸，林　健亮（現・島根県教育委員会）
4. 出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は鍛治益生，沢元が中心となって行った。
5. 本書は鍛治（Ⅰ・Ⅲ－3），大上（Ⅱ・Ⅲ－1），沢元（Ⅲ－2）が分担して執筆し，鍛治が編集した。
6. 本書に使用した遺構の表示は，ＳＢ；竪穴住居跡・掘立柱建物跡，ＳＤ；溝状遺構，ＳＫ；墳墓・土壙等，ＳＡ；柵列，ＳＸ；性格不明遺構である。また，本書に使用した北方位は第1－1，2－1，3－1，4－1・2図，付図2・3は真北で，他はすべて磁北である。
7. 第2・3図は建設省国土地理院発行の1：50,000の地形図（竹原）を使用した。
8. 才が迫遺跡は，当初才が迫第1号古墳と呼称していたが，調査の結果，古墳以外に弥生時代の竪穴住居跡，中世の基檀などを検出したので，遺跡の名称を変更した。

目　　次

Ⅰ　はじめに……（1）

Ⅱ　位置と環境……（4）

Ⅲ　調査の遺跡

1.　才が迫遺跡……（11）
2.　宮領1号遺跡……（45）
3.　柳原遺跡……（66）

図版目次

巻頭図版1－a　才が迫第1号古墳全景
b　同　上　主体部全景
巻頭図版2－a　才が迫第1号古墳出土土器
b　同　上　出土玉類

1.才が迫遺跡

図版1－1　a　調査前全景（西から）
b　調査前近景（北から）
図版1－2　a　SB1検出状況（北から）
b　同上　掘り下げ状況（東から）
図版1－3　a　SB1掘り下げ状況（北から）
b　同上　南北土層断面（東から）
図版1－4　a　SB1遺物出土状況
b　同　上
図版1－5　a　SB1完掘状況（南から）
b　同　上（西から）
図版1－6　a　古墳墳丘検出状況（南から）
b　墳丘全景（南から）
図版1－7　a　墳丘全景（西から）

図版１－７　b　溝検出状況（西から）
図版１－８　a　溝土層断面（西から）
b　溝内遺物出土状況（南から）
図版１－９　a　第１・２主体部（東から）
b　同　上　（北から）
図版１－10　a　第１・２主体部掘り下げ状況（西から）
b　同上　棺床面検出状況（西から）
図版１－11　a　第１・２主体部基底石検出状況（西から）
b　同上　完掘状況（西から）
図版１－12　a　第１主体部検出状況（東から）
b　同上　掘方掘り下げ状況　（南から）
図版１－13　a　第１主体部遺物出土状況　（南から）
b　同上　棺床面検出状況（北から）
図版１－14　a　第１主体部東側小口石積状況（北西から）
b　同上　西側小口石積状況（南東から）
図版１－15　a　第１主体部基底石検出状況　（西から）
b　同上　東側小口基底石（北東から）
図版１－16　a　第１主体部西側小口基底石　（南西から）
b　同上　完掘状況（西から）
図版１－17　a　第２主体部検出状況（東から）
b　同上　掘方掘り下げ状況　（西から）
図版１－18　a　第２主体部東側小口状況（西から）
b　同上　西側小口状況（東から）
図版１－19　a　第２主体部遺物出土状況（西から）
b　同　上　（北から）
図版１－20　a　第２主体部遺物出土状況（北から）
b　同　上　（南から）
図版１－21　a　ＳＸ１検出状況（北から）
b　同上　完掘状況（北から）
図版１－22　a　調査風景
b　調査風景
図版１－23　出土遺物Ⅰ
図版１－24　出土遺物Ⅱ
図版１－25　出土遺物Ⅲ
図版１－26　出土遺物Ⅳ
図版１－27　出土遺物Ⅴ

2．宮領1号遺跡

図版2－1　a　宮領1号遺跡遠景（北から）
　　b　同上　調査前近景（東から）
図版2－2　a　SB1検出状況（北から）
　　b　同上　床面検出状況（北から）
図版2－3　a　SB1炉跡検出状況（東から）
　　b　同上　完掘状況（東から）
図版2－4　a　SB1遺物出土状況
　　b　同上　完掘状況（北から）
図版2－5　a　SB2検出状況（北から）
　　b　同上　床面検出状況（北から）
図版2－6　a　SB2完掘状況（北から）
　　b　同上　調査風景
図版2－7　a　SB3床面検出状況（東から）
　　b　同上　完掘状況（東から）
図版2－8　a　SB4床面検出状況（西から）
図版2－8　b　SB4・6完掘状況（西から）
図版2－9　a　SB6完掘状況（南から）
　　b　柵列完掘状況　（北から）
図版2－10　a　SD1完掘状況（西から）
　　b　SD2検出状況（南から）
図版2－11　a　SX1検出状況（西から）
　　b　同上　完掘状況（北から）
図版2－12　a　SX2完掘状況（北から）
　　b　同　上　（西から）
図版2－13　a　SX3検出状況（西から）
　　b　同上　完掘状況（西から）
図版2－14　a　SX4検出状況（東から）
　　b　同上　完掘状況（西から）
図版2－15　a　SX5検出状況（南西から）
　　b　同上　完掘状況（北から）
図版2－16　a　SX6検出状況（北から）
　　b　同上　完掘状況（東から）
図版2－17　a　SX7検出状況（南から）
　　b　同上　完掘状況（北から）
図版2－18　a　調査区東側谷部検出状況（南から）
　　b　遺跡見学会風景
図版2－19　出土遺物Ⅰ
図版2－20　出土遺物Ⅱ
図版2－21　出土遺物Ⅲ
図版2－22　出土遺物Ⅳ
図版2－23　出土遺物Ⅴ

3．柳原遺跡

図版３－１　a　柳原遺跡遠景（西から）
　　b　同上　調査前近景（東から）
図版３－２　a　ＳＢ１検出状況（南東から）
　　b　同上　東西土層断面（南西から）
図版３－３　a　ＳＢ１土層断面（北東から）
　　b　同上　完掘状況（南東から）
図版３－４　a　ＳＢ２・３検出状況（南東から）
　　b　ＳＢ２検出状況（南東から）
図版３－５　a　ＳＢ２カマド検出状況（南東から）
　　b　同上　袖部土層断面（南東から）
図版３－６　a　ＳＢ２カマド完掘状況（南東から）
　　b　同上　床面検出状況（南東から）
図版３－７　a　ＳＢ３・４検出状況（南西から）
　　b　ＳＢ３土層断面（南東から）
図版３－８　a　ＳＢ４土層断面（南東から）
　　b　ＳＢ３・４遺物出土状況（南東から）
図版３－９　a　ＳＢ３・４カマド検出状況（南東から）
　　b　同上　カマド掘り下げ状況（南東から）
図版３－10　a　ＳＢ３・４カマド完掘状況（南東から）
　　b　同上　床面検出状況（南東から）
図版３－11　a　ＳＢ３・４完掘状況（南東から）
　　b　ＳＢ１～４完掘状況（南西から）
図版３－12　a　ＳＢ５検出状況（南東から）
　　b　同上　遺物出土状況（南東から）
図版３－13　a　ＳＢ５遺物出土状況
　　b　同上完掘状況（南東から）
図版３－14　a　ＳＢ６ａ検出状況（南東から）
　　b　同上　カマド検出状況（南東から）
図版３－15　a　ＳＢ６ａ完掘状況（南東から）
　　b　ＳＢ６ｂ完掘状況

（南東から）
図版３－16　a　ＳＸ２検出状況
（南東から）
b　同上　遺物出土状況
（南東から）
図版３－17　a　ＳＸ２遺物出土状況
（南東から）
b　同　上　（南東から）
図版３－18　a　ＳＸ３検出状況
（南東から）
b　同上　完掘状況
（南西から）
図版３－19　a　ＳＸ４完掘状況
（南西から）
b　ＳＸ５完掘状況
（南東から）
図版３－20　a　ＳＸ６検出状況
（南東から）
b　同上　完掘状況
（南東から）
図版３－21　a　ＳＫ１検出状況
（南東から）
b　同上　完掘状況
（南東から）
図版３－22　a　ＳＫ２検出状況
（南東から）
b　同上　遺物出土状況
（東から）
図版３－23　a　ＳＥ１土層断面（西から）
b　同上　完掘状況（南から）
図版３－24　a　調査後近景　（東から）
b　同　上　（南東から）
図版３－25　a　調査風景
b　遺跡見学会風景
図版３－26　出土遺物Ⅰ
図版３－27　出土遺物Ⅱ
図版３－28　出土遺物Ⅲ
図版３－29　出土遺物Ⅳ
図版３－30　出土遺物Ⅴ
図版３－31　出土遺物Ⅵ
図版３－32　出土遺物Ⅶ
図版３－33　出土遺物Ⅷ
図版３－34　出土遺物Ⅸ
図版３－35　出土遺物Ⅹ
図版３－36　出土遺物Ⅺ

挿図目次

第１図　山陽自動車道路線図……（1）
第２図　山陽自動車道路線内遺跡位置図（１：50,000）……（折込）
第３図　周辺遺跡分布図（１：50,000）……（5）

1.才が迫遺跡

第1－1図　才が迫遺跡周辺地形図（1：2,000）……(11)
第1－2図　才が迫遺跡地形測量図（1：200）……(13)
第1－3図　才が迫遺跡遺構配置図（1：200）……(14)
第1－4図　ＳＢ1実測図（1：60）……(15)
第1－5図　ＳＢ1出土土器実測図（1：3）……(16)
第1－6図　ＳＢ1周辺出土土器実測図（1：3）……(18)
第1－7図　第1号古墳墳丘土層断面（1：100）……(19)
第1－8図　第1号古墳溝内遺物出土状況実測図（1：100）……(20)
第1－9図　第1号古墳溝内出土土器実測図Ⅰ（1：3）……(22)
第1－10図　第1号古墳溝内出土土器実測図Ⅱ（1：3）……(24)
第1－11図　第1号古墳第1主体部実測図（1：60）……(26)
第1－12図　第1号古墳第1主体部遺物出土状況実測図（1：30）……(27)
第1－13図　第1号古墳第1主体部出土遺物実測図（1：2・1：1）……(28)
第1－14図　第1号古墳第2主体部実測図（1：60）……(30)
第1－15図　第1号古墳第2主体部出土遺物実測図（1：2）……(33)
第1－16図　ＳＸ1実測図（1：60）……(35)
第1－17図　ＳＸ1出土遺物実測図（1：4）……(36)
第1－18図　第1号古墳第1主体部出土鉄剣Ｘ線写真……(40)

2.宮領1号遺跡

第2－1図　宮領1号遺跡周辺地形図（1：2,000）……(45)
第2－2図　宮領1号遺跡遺構配置図（1：400）……(折込)
第2－3図　ＳＢ1実測図（1：60）……(折込)
第2－4図　ＳＢ2実測図（1：60）……(48)
第2－5図　ＳＢ3実測図（1：60）……(50)
第2－6図　ＳＢ4・6，ＳＤ2実測図（1：60）……(52)
第2－7図　ＳＤ1実測図（1：60）……(53)

第２－８図　ＳＸ１～３実測図（１：60）……(55)
第２－９図　ＳＸ４～７実測図（１：60）……(57)
第２－10図　ＳＸ９実測図（１：60）……(59)
第２－11図　宮領１号遺跡出土遺物実測図Ⅰ（１：６，１：３）……(61)
第２－12図　宮領１号遺跡出土遺物実測図Ⅱ（１：３）……(62)
第２－13図　宮領１号遺跡出土遺物実測図Ⅲ（１：２）……(63)

３．柳原遺跡

第３－１図　柳原遺跡周辺地形図（１：2,000）……(66)
第３－２図　柳原遺跡遺構配置図（１：200）……(折込)
第３－３図　ＳＢ１実測図（１：60）……(68)
第３－４図　ＳＢ２～４実測図（１：60）……(折込)
第３－５図　ＳＢ２カマド実測図（１：30）……(69)
第３－６図　ＳＢ３・４カマド実測図（１：30）……(71)
第３－７図　ＳＢ５実測図（１：60）……(73)
第３－８図　ＳＢ５カマド実測図（１：30）……(74)
第３－９図　ＳＢ６ａ・６ｂ実測図（１：60）……(折込)
第３－10図　ＳＸ１・２実測図（１：60）……(折込)
第３－11図　ＳＸ３実測図（１：60）……(79)
第３－12図　ＳＸ４・５実測図（１：60）……(81)
第３－13図　ＳＸ６実測図（１：60）……(折込)
第３－14図　ＳＫ１実測図（１：30）……(84)
第３－15図　ＳＫ２実測図（１：30）……(85)
第３－16図　ＳＥ１実測図（１：30）……(85)
第３－17図　柳原遺跡出土遺物実測図Ⅰ（１：３）……(87)
第３－18図　柳原遺跡出土遺物実測図Ⅱ（１：３）……(88)
第３－19図　柳原遺跡出土遺物実測図Ⅲ（１：３）……(89)
第３－20図　柳原遺跡出土遺物実測図Ⅳ（１：３）……(90)
第３－21図　柳原遺跡出土遺物実測図Ⅴ（１：３）……(91)
第３－22図　柳原遺跡出土遺物実測図Ⅵ（１：３）……(92)

第３－23図　柳原遺跡出土遺物実測図Ⅶ（１：２）……(93)

付図　　宮領１号遺跡柵列実測図（１：60）

表目次

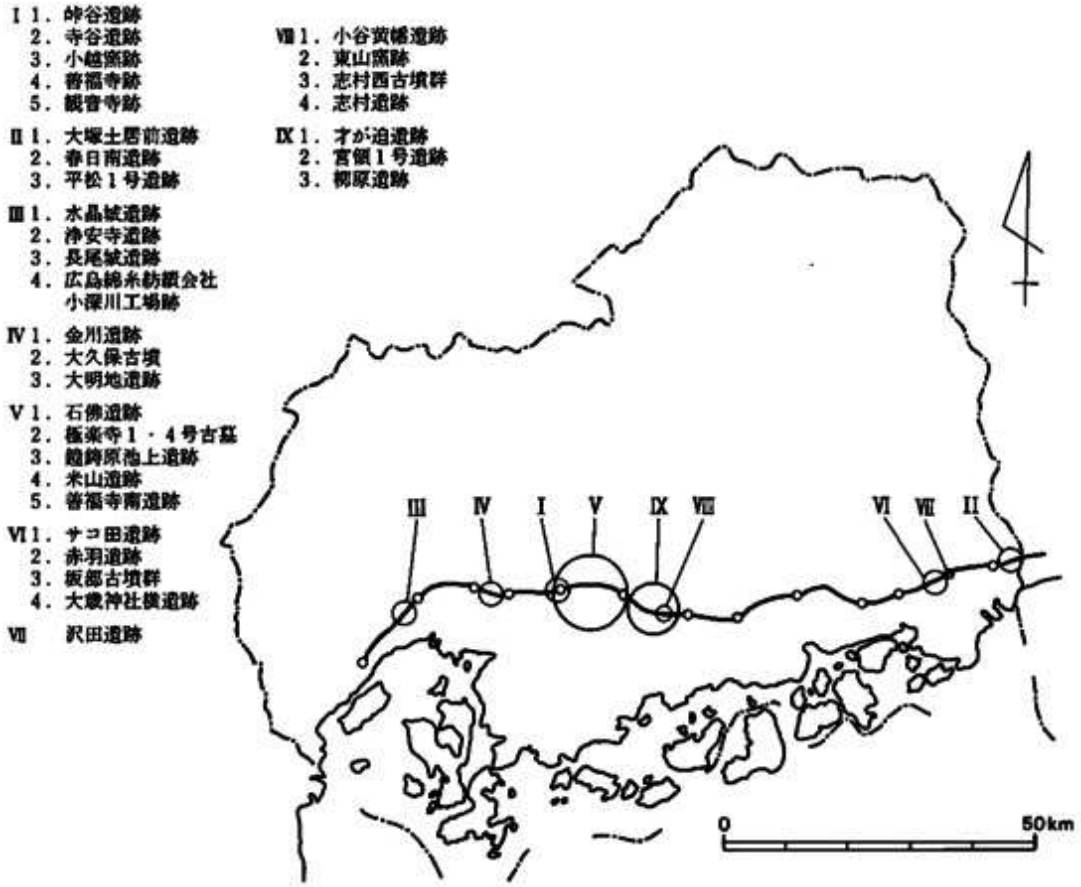
１．才が迫遺跡

第１－１表　第１号古墳第１主体部出土玉類計測表……(29)

Ⅰ・はじめに

広島県は，21世紀に向けて県土の一体化と均衡ある発展を図るため県の発展計画を策定し，諸施策を推進している。この中でも高速道路網の整備をはじめとした高速交通体系の整備を最重要課題の一つと位置付け，山陽自動車道や中国横断自動車道の整備に積極的に取り組んでいる。

このうち山陽自動車道は，大阪府吹田市を起点として瀬戸内側の主要都市間を連絡して山口県山口市に至る高速道路である。広島県内は福山市から三原市・東広島市・広島市・廿日市市などを経て山口県へと続く予定で，昭和62（1987）年3月広島東インターチェンジと志和インターチェンジ間が供用を開始して以来，順次その供用区間を延伸してきている。この山陽自動車道の沿線には本郷町の新広島空港建設事業をはじめとし，東広島市の賀茂学園都市開発整備事業，各地の工業団地造成事業など各種の開発整備事業が計画・実



第1図　山陽自動車道路線図（Ⅰ～Ⅸは報告書番号を示す）

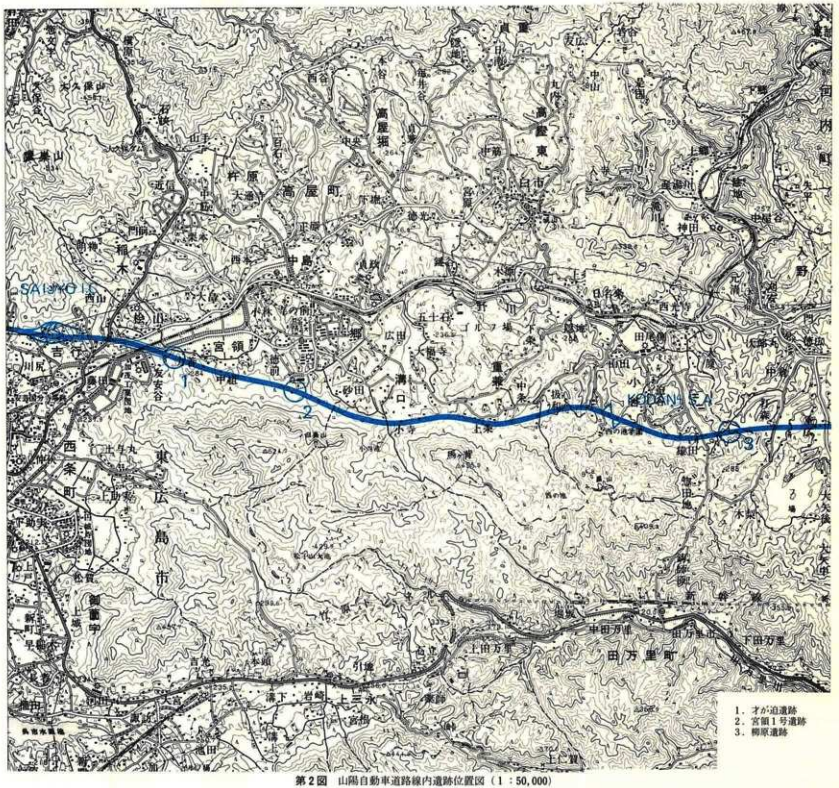
行され，高速道路を紐帯とした各地域の発展と相互間の交流が期待されている。

ところで財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）では，山陽自動車道の建設に先駆け，昭和56（1981）年度から順次埋蔵文化財の発掘調査を実施するとともに，その成果を報告書として発刊してきた。本書はその第９分冊となる報告書で，東広島市高屋町所在の３遺跡（才が迫遺跡・宮領１号遺跡・柳原遺跡）についてその成果を掲載している。

以下，この３遺跡を中心にその調査に至る経過を概略する。３遺跡が所在する区間は西条インターチェンジと河内インターチェンジの間で，この区間は昭和53年11月21日，道路整備特別措置法に基づいて建設大臣から施工命令が出された。その後，昭和58年11月24日実施計画が許可され，同年11月30日路線発表が行われた。この間の昭和58年８月10日，日本道路公団（以下「公団」という。）は広島県教育委員会（以下「県教委」という。）に対して，当区間内の文化財の有無ならびに取扱いについて照会した。これに対して県教委は昭和62年１月，当該区間に古墳９基，古墓３基，また試掘を要する箇所18か所が存在する旨を回答した。本書に掲載した３遺跡についてはこのうち要試掘箇所として回答されていたもので，県教委は昭和62年７月柳原遺跡を，昭和63年７月宮領１号遺跡を，また同年８月才が迫遺跡をそれぞれ試掘調査し，遺跡と確認して，この旨を公団に回答した。このような経過を経て公団はセンターに対して昭和63年３月柳原遺跡の，同年９月才が迫遺跡・宮領１号遺跡の発掘調査を依頼した。これを受けてセンターは公団との間で委託契約を交わし，各遺跡の発掘調査を実施した。

本報告書は，このような経過を経て発掘調査を実施した才が迫遺跡・宮領１号遺跡・柳原遺跡の３遺跡について，その調査成果をまとめたもので，この調査成果が地域の歴史研究の一助となれば幸いである。なお，昭和63年９月に柳原遺跡の遺跡見学会を，また平成元（1989）年３月には才が迫遺跡・宮領１号遺跡の遺跡報告会をそれぞれ東広島市教育委員会と共催で開催したところ多数の参加者があり，地元住民の方々の文化財に対する関心の高さが示された。

なお，発掘調査に際しては，広島県教育委員会のご指導を得るとともに，日本道路公団広島建設局及び東広島工事事務所，東広島市教育委員会および地元住民の方々には多大なご協力をいただいた。末筆ながら記して謝意を表したい。



第2図　山陽自動車道路線内遺跡位置図（1：50,000）

番号	遺　跡　名	所　在　地	調　査　期　間	備　考
1	才が迫遺跡	東広島市高屋町大字宮領	昭和63（1988）年11月28日 ～平成元（1989）年2月10日	No.1 本書掲載
2	宮領1号遺跡	東広島市高屋町大字宮領	昭和63（1988）年12月12日 ～平成元（1989）年3月10日 平成元（1989）年4月10日～5月20日	No.4 本書掲載
3	大谷古墓	東広島市高屋町大字郷	現状保存	
4	別所第1号古墓	東広島市高屋町大字郷	現状保存	
5	別所第2～5号古墓	東広島市高屋町大字郷	平成元（1989）年4月10日～6月13日	
6	原田岡山第1・3号古墳	東広島市高屋町大字溝口	平成元（1989）年4月10日～7月28日	
7	重兼岡の山古墳	東広島市高屋町大字重兼	現状保存	
8	小谷黄幡遺跡	東広島市高屋町大字小谷	昭和62（1987）年6月8日～12月4日	No.8 報告書Ⅶ
9	志村西第1号古墳	東広島市高屋町大字小谷	昭和62（1987）年12月7日 ～昭和63（1988）年2月25日	No.11 報告書Ⅶ
10	志村西第2号古墳	東広島市高屋町大字小谷	昭和63（1988）年11月14日～12月16日	報告書Ⅶ
11	志村第1・5号古墳	東広島市高屋町大字小谷	昭和62（1987）年12月7日 ～昭和63（1988）年3月18日	報告書Ⅶ
12	志村第2～4・6～8号古墳	東広島市高屋町大字小谷	昭和63（1988）年4月11日～10月7日	報告書Ⅶ
13	志村遺跡	東広島市高屋町大字小谷	昭和62（1987）年12月7日 ～昭和63（1988）年3月18日 昭和63（1988）年4月11日～10月7日	報告書Ⅶ
14	榊原遺跡	東広島市高屋町大字小谷	昭和63（1988）年5月16日～9月22日	No.15 本書掲載
15	東山窯跡	東広島市高屋町大字小谷	昭和63（1988）年4月11日～5月13日	報告書Ⅶ
16	溝口1号遺跡	東広島市高屋町大字溝口	平成元（1989）年4月10日～9月14日	No.6
17	竹下遺跡	賀茂郡河内町大字入野	平成元（1989）年4月10日～6月13日	No.17

西条～河内インターチェンジ間所在遺跡

No.は要試掘地点で，No.1～18のうち欠番は試掘調査の結果，遺跡と認められなかった。

Ⅱ　位置と環境

（1）地理的環境

東広島市は，広島県南部のほぼ中央に位置する。当市は，昭和49（1974）年，高屋，西条，志和，八本松の四町が合併して市制を施行した比較的新しい市である。古代には安芸国分寺，安芸国分尼寺が造られ，政治や文化の中心地であり，また市域を山陽道が通り交通の要衝でもあった。市内には造り酒屋が点在し，酒造業で全国的に有名である。近年，賀茂学園都市開発計画による広島大学の統合移転や，東広島ニュータウン建設などの開発事業にともない，急激に町の様相が変化している。

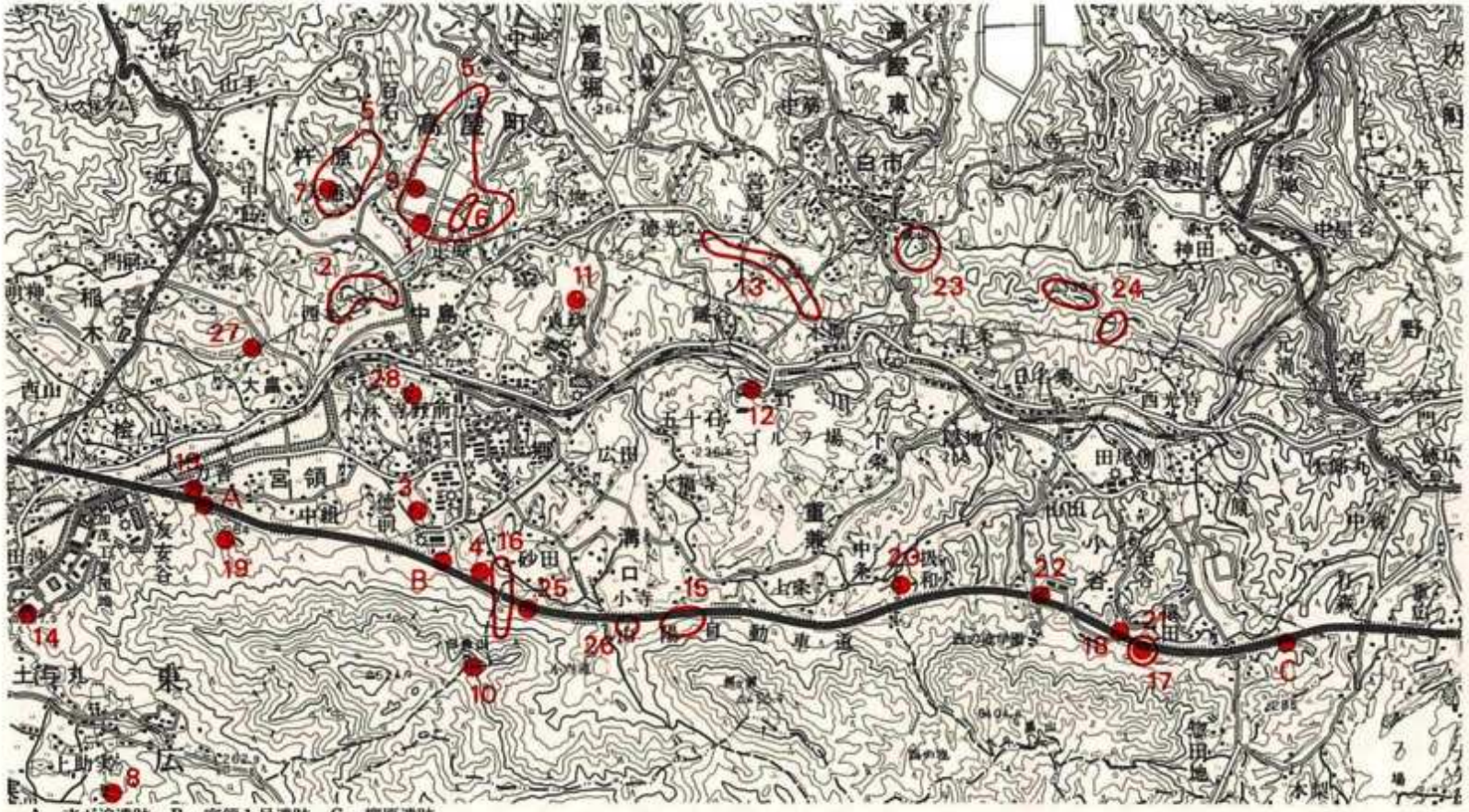
当市は，広島県の地形地域区分[1]によれば，大きくは賀茂台地に属する。市域の南半は主に西条盆地で，市の北西に当たる志和盆地とは白木山山塊で隔てられている。広義の西条盆地は細かくみると狭義の西条盆地と白市盆地に分けられ，今回調査した遺跡は，この白市盆地の南端にある白鳥山山地の北辺に連なるなだらかな山麓傾斜面に立地している。

（2）歴史的環境

東広島市では近年の開発事業の増大に伴って，発掘調査が数多く行われるようになった。ここでは，今回調査した遺跡周辺の主な遺跡を，時代を追って概観する。

旧石器・縄文時代　旧石器時代の遺跡は，西条町の広島大学統合移転地内において調査が行われている。西ガガラ遺跡[2]（西条町田口）では，昭和61・62年に発掘調査が行われ，住居跡，土壙，炉跡などの後期旧石器時代の遺構が検出され，ナイフ形石器・台形様石器などが出土している。また，鴻の巣遺跡[3]（西条町下見）では，昭和63・平成元（1988・89）年の発掘調査の結果，台形様石器，ナイフ形石器などが出土している。また，縄文時代の遺跡としては，西ガガラ遺跡で縄文時代早期の住居跡，土壙などの遺構を検出している。また，同じ広島大学統合移転地内の山中池南遺跡[4]（鏡山）は平成3年に調査が行われ，中期の住居跡，炉跡などの遺構が見つかっている。このほか，鏡西谷遺跡[5]（西条町御薗宇）では早期，槇ヶ坪3号遺跡[6]（高屋町杵原）では後期の土器片が出土している。

弥生時代　弥生時代になると遺跡の数は増加するが主には中期以降に属し，前期の遺跡は少ない。貞付谷遺跡[7]（西条町寺家）は，弥生時代後期および古墳時代後期を中心とする



A．才が迫遺跡　B．宮領1号遺跡　C．柳原遺跡
1．横ケ坪3号遺跡　2．西本遺跡　3．宮領2号遺跡　4．白鳥石棺群　5．東広島ニュータウン遺跡群　6．浄福寺2号遺跡　7．西7地点遺跡　8．丸山神社第1号古墳
9．横ケ坪第1号古墳　10．白鳥古墳　11．仙人塚古墳　12．鍵向山第2号古墳　13．森信古墳群　14．豊ケ崎古墳　15．原田岡山古墳群　16．大谷古墳群　17．志村古墳群
18．志村西古墳群　19．才が迫石棺群　20．小谷黄幡遺跡　21．志村遺跡　22．東山窯跡　23．白山城跡　24．新開城跡　25．別所古墓群　25．溝口1号遺跡　27．廃長楽寺
28．僧行賢関係遺品

第3図　周辺遺跡分布図（竹原　1：50,000）

の集落跡だが，そのほかに弥生時代前期の貯蔵穴や土壙墓を検出しており，当地域では数少ない弥生時代前期の調査例となった。また，助平1号遺跡[8]（西条町御薗字）でも，土壙から前期末の土器片が出土している。中期以降，特に後期には西条盆地の各所に集落が出現する。西本遺跡[9]（高屋町杵原）は弥生時代中期から中世までの遺跡で，昭和50（1975）年発掘調査が行われた。調査の結果，弥生時代中期から後期にかけての住居跡や，古墳時代後期の集落跡と箱形石棺・土壙墓などからなる墳墓群を検出した。東広島ニュータウン遺跡群（高屋町杵原・高屋堀）は，昭和60～平成3（1985～1991）年に発掘調査を行った。弥生時代や古墳時代の集落跡，墳墓・古墳など，また古代から中世にいたる建物跡，墳墓など多様な性格の遺跡からなる。特に，浄福寺2号遺跡[10]は，弥生時代中期から中世までの複合遺跡で，昭和61～63年にかけて発掘調査を行った。遺跡の主体は，弥生時代後期の集落跡や墳墓群である。このほか，槇ヶ坪1[11]・2号遺跡[12]や胡麻4[13]・5号遺跡[14]では，後期の墳墓群が検出されている。石仏遺跡[15]（西条町吉行）は弥生時代から近世までの複合遺跡で，昭和61・62年に発掘調査を行った。中心は弥生時代後期の集落跡で，竪穴住居跡13軒，貯蔵穴19基などを検出している。

古墳時代　古墳時代になるとさらに遺跡数が増加するが，その大半は古墳である。前半期の古墳は，開墾時などに遺物が見つかった例が多く，発掘調査を行って埋葬施設が明らかにされた古墳は数少ない。丸山神社第1号古墳（西条町助実）は，全長約47mの前方後円墳である。発掘調査は行われていないが，埋葬施設として後円部中央に竪穴式石室ないしは箱形石棺があるものと考えられている。遺物は，土師器が採集されている。古墳の築造時期は，遺物や古墳の規模などから4世紀中葉から後半と想定されている。槇ヶ坪第1号古墳[16]（高屋町杵原）は，東西約7m，南北約15mの方墳である。昭和62年に発掘調査を行った。ほぼ南北に延びる尾根に直交する溝を掘り込んでいる。埋葬施設は箱形石棺と土壙で，そのうち土壙は弥生時代の可能性が考えられている。遺物は溝から土師器甕が出土している。箱形石棺の時期は，4世紀後半頃と考えられる。白鳥古墳（第1号古墳）は，白鳥山山頂にある白鳥神社の社殿造営の際，竪穴式石室もしくは箱形石棺と思われる埋葬施設の内部から，三角縁神獣鏡2面と素環頭大刀，勾玉が出土した。古墳の築造時期は，出土遺物から4世紀末頃と考えられている。仙人塚古墳（高屋町郷）は，直径約25mの円墳である。昭和27年に発掘調査が行われ，箱形石棺から珠文鏡，石釧などが出土した。開墾時に露出した部分のみの発掘調査であったので，箱形石棺以外にも埋葬施設があると思われる。築造時期は，5世紀初め頃と考えられる。三ツ城古墳[17]（西条町御薗字）は，県内最大の前方後円墳で，規模は全長88.5mである。昭和26年，広島県教育委員会による発掘

調査が行われ，後円部の墳頂で３基の埋葬施設を確認した。その後，昭和57（1982）年に史跡に指定された。また，昭和63年から平成３（1991）年までの５次にわたって，保存整備のための部分的な発掘調査が行われた。その際，埋葬施設について詳細な調査が行われ，３基の埋葬施設のうち第１・２号埋葬施設は「外榔をもつ箱形石棺というべきもの」で，第３号埋葬施設は箱形石棺であった。古墳の築造時期は５世紀中葉頃と考えられる。鍵向山第２号古墳[18]（高屋町高屋東）は直径７～８ｍの円墳と推定され，昭和49年に発掘調査が行われた。埋葬施設は箱形石棺であるが，「小型の竪穴式石室と思われる」「特異な形態を示す」ものである。遺物は，墳丘裾部で須恵器（杯・壺）が故意に破砕されたような状態で出土している。古墳の築造時期は，５世紀中頃から６世紀中頃と推定されている。スクモ塚第１号古墳（西条町御薗字）は，円丘部径42mの帆立貝形古墳といわれている。埋葬施設は明らかではないが，墳丘上に葺石と埴輪が確認されている。古墳の築造時期は，三ツ城古墳に次ぐと考えられている。森信古墳群[19]（高屋町高屋東）は，前方後円墳，帆立貝形古墳を含む計19基で構成される古墳群である。このうち第10号古墳は，竪穴式石室を持つ円墳で平成元年に発掘調査が行われた。古墳群は５世紀後半から造られ始め，６世紀後半頃まで築造が続けられたと考えられている。第10号古墳は６世紀初頭～前半に築造され，竪穴式石室を有する第９・14号古墳も６世紀前半に造られたと推定されている。豊ケ崎古墳[20]（西条町土与丸）は，本遺跡の南西約１kmにあり，昭和46年に発掘調査が行われた。この古墳の埋葬施設は竪穴式石室で，報告書では「石室の側壁，上半部を割石の小口積で構築しており，下段部分には比較的大型の花崗岩が使用されている」としている。遺物は，鉄鏃２点が石室掘方内埋土上層から出土している。この古墳の築造時期は，「側壁構築にあたって下底面から割石の小口積が行われ」た古墳と比較して，「箱式石棺的な要素が強く，時期的には前述の石室よりも下降するものと考えられる」とし，６世紀前半頃から中葉頃と考えられている。

当地域では，横穴式石室の導入が他の地域に比べ遅いことが言われている。その最も初期の段階の古墳と考えられるのが，原田岡山古墳群[21]（高屋町溝口）である。本古墳群は４基の円墳からなり，第１号古墳は直径約11m，墳丘の高さ約2.5mの規模をもつもので，墳丘裾には外護列石を巡らしている。遺物は，石室内から轡・鏡板といった馬具と耳環などが出土した。同じく第３号古墳は，直径約９ｍ，高さ約２ｍで，遺物としては石室内から須恵器（提瓶），耳環，鉄釘などが出土した。これらの古墳の築造時期は，第１号古墳が６世紀後半で，第３号古墳が７世紀初頭と考えられる。志村古墳群[22]（高屋町小谷）は８基の横穴式石室を埋葬施設とする古墳で構成され，昭和62・63年に発掘調査を行った。古

墳群の立地する丘陵斜面上での各古墳の位置や石室の規模に一定の基準が認められ，集団内での各被葬者の位置を反映したものと考えられている。古墳群の築造は７世紀前半頃から始まり，石室には幾度かの追葬が行われ，その後11世紀後半から12世紀初頭頃まで再利用されていたと思われる。

古墳時代の集落は，古墳に比べて調査が進んでいるとは言えないが，近年調査例が増加してきている。小谷黄幡遺跡[23]（高屋町小谷）は古墳時代と中近世の集落跡で，昭和62（1987）年に発掘調査を行った。６世紀後半の住居跡を検出したが，調査区内に存在するほぼ同時期と考えられる墳墓との間に一定の距離があることから，生活空間と埋葬空間という集団内の規制の存在が推定されている。志村古墳群と同一丘陵上の近接した距離にある志村遺跡[24]（高屋町小谷）では，弥生時代後期と古墳時代後期の集落跡，箱形石棺・土壙墓を検出している。古墳時代の住居跡は６世紀末～７世紀前半に造られているが，その構築状況から２種類に分類され，同一集落の住居の中に用途の差があることが指摘されている。また箱形石棺・土壙墓は小児用であり，横穴式石室導入以後も伝統的な埋葬施設が造られていたと考えられる。また，東広島ニュータウン遺跡群内の西７地点遺跡[25]では６世紀後半頃の水田跡が検出され，木製品などが出土している。

古代　西条町に安芸国分寺・国分尼寺が建立されるなど，東広島市域は安芸国の政治・文化・経済の中心地であったと思われるが，この時期の遺跡の数は決して多くない。安芸国分尼寺跡推定地（国分寺東方遺跡群）の東方約200mにある荒田遺跡[26]（西条町土与丸）は平安時代から中世の集落跡で，多くの掘立柱建物跡などを検出した。また広島大学統合移転地内の東ガガラ窯跡[27]は須恵器の窯跡で，昭和55年に発掘調査を行った。煙出しから灰原までの窯全体が良好な状態で検出されたが，操業自体は１回だけだったと思われる。築造時期は９世紀と考えられる。

中世以降　中世には，肥沃な可耕地を抱え古代以来安芸国の政治・文化の中心地である西条盆地への進出を巡って武士団が争った結果，多くの山城が築かれるに至った。大内氏の安芸国での拠点である鏡山城（西条町御薗宇）や，平賀氏の居城である頭崎城（高屋町貞重）などである。またこれに伴って，その居住地である屋敷や墓などが盆地内の各所にある。別所古墓群[28]（高屋町郷）は石積み墓８基で構成され，発掘調査を行った７基はいずれも平面方形のもので，このうち３基からは埋葬施設を検出した。遺物は土師質土器・瓦などが出土した。古墓が営まれた時期は室町時代と考えられる。溝口１号遺跡[29]（高屋町溝口）では，掘立柱建物跡５棟，井戸，埋甕，埋鍋などの遺構を検出した。遺物は土師質土器，陶磁器，古銭などが出土した。遺跡の年代は，17世紀後半から18世紀前半頃と考えら

れる。また，西品寺（高屋町中島）や廃長楽寺（高屋町稲木）には，鎌倉時代末期から室町時代にかけてこの地で多くの石造物制作の発願者となり，その名を石造物の銘に残す僧行賢に関連した石造物がある。その石槽・石仏などは僧行賢関係遺品として県の重要文化財に指定されている。

参考文献

東広島市教育委員会『東広島市埋蔵文化財地図』Ⅰ（東広島市西条町分）　昭和63（1988）年
東広島市教育委員会『東広島市埋蔵文化財地図』Ⅱ（東広島市高屋町分）　平成元（1989）年
脇坂光彦・小都隆編『探訪・広島の古墳』　芸備友の会　平成3（1991）年
西本省三・高原克人編『日本城郭大系』第13巻広島・岡山　新人物往来社　昭和55（1980）年

（註）

（1）　広島県『広島県史』地誌編　昭和52（1977）年

（2）　広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「ガガラ山西麓地区の予備調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅲ　昭和59（1984）年
　広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「ガガラ山西南麓地区の予備調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅴ　昭和61（1986）年
　広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「西ガガラ遺跡の調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅵ　昭和63（1988）年

（3）　広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「鴻の巣遺跡の調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅶ　平成元（1989）年
　広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「鴻の巣遺跡の調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅷ　平成2（1990）年

（4）　広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「山中池南遺跡の調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅹ　平成4（1992）年

（5）　広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「鏡西谷遺跡の調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ　昭和57（1982）年

（6）　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「椛ヶ坪3号遺跡（A地区）」『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅰ　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第83集　平成2（1990）年

（7）　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「貞付谷遺跡」『金平山遺跡・貞付谷遺跡』　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第99集　平成4（1992）年

（8）　広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「助平1号遺跡」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅰ）　昭和58（1983）年

（9）　広島県教育委員会『西本遺跡群－A・B・C地点－』　昭和51（1976）年
　東広島市教育委員会『西本遺跡群－D・E・F地点－』図録篇　昭和51（1976）年

（10）　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅱ　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第97集　平成4・5（1992・1993）年

（11）　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「椛ヶ坪1号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅰ　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第83集　平成2（1990）年

（12）　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「椛ヶ坪2号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅰ　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第83集　平成2（1990）年

（13）　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「胡麻4号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅰ　広島県埋

蔵文化財調査センター調査報告書第83集　平成２（1990）年

(14)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「胡麻５号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅰ　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第83集　平成２（1990）年

(15)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「石佛遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅴ）　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第84集　平成２（1990）年

(16)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「第１号古墳」『槇ヶ坪３号遺跡（Ｂ地区）』　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第72集　昭和63（1988）年

(17)　広島県教育委員会『広島県文化財調査報告第一輯（人文編）三ツ城古墳』　昭和29（1954）年
東広島市教育委員会『史跡三ツ城古墳ー保存整備事業第１～５年次発掘調査概報ー』　東広島市教育委員会文化財調査報告書第14，16，17，19，20集　平成元～３（1989～1991）年

(18)　広島県教育委員会「鏡向山第２号古墳」『賀茂カントリークラブゴルフ場内遺跡群発掘調査報告』　昭和50（1975）年

(19)　東広島市教育委員会『森信第10号古墳発掘調査報告書』　東広島市教育委員会文化財調査報告書第15集　平成２（1990）年

(20)　広島県教育委員会「登ヶ崎古墳」『賀茂工業団地内遺跡発掘調査概報』　昭和47（1972）年

(21)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが，平成元（1989）年発掘調査を行った。

(22)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「志村遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅶ）　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第98集　平成４（1992）年

(23)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「小谷黄幡遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅶ）　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第98集　平成４（1992）年

(24)　註（22）に同じ

(25)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅴ　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第107集　平成５（1993）年

(26)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「甕田遺跡」『奥田・是石・甕田・藤田』　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第81集　平成元（1989）年

(27)　広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「東ガガラ窯跡」『広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告』　昭和57（1982）年

(28)　註（21）に同じ

(29)　註（21）に同じ

Ⅲ　調査の遺跡

1．才が迫遺跡

（1）位置と現状（第1-1図，図版1-1）

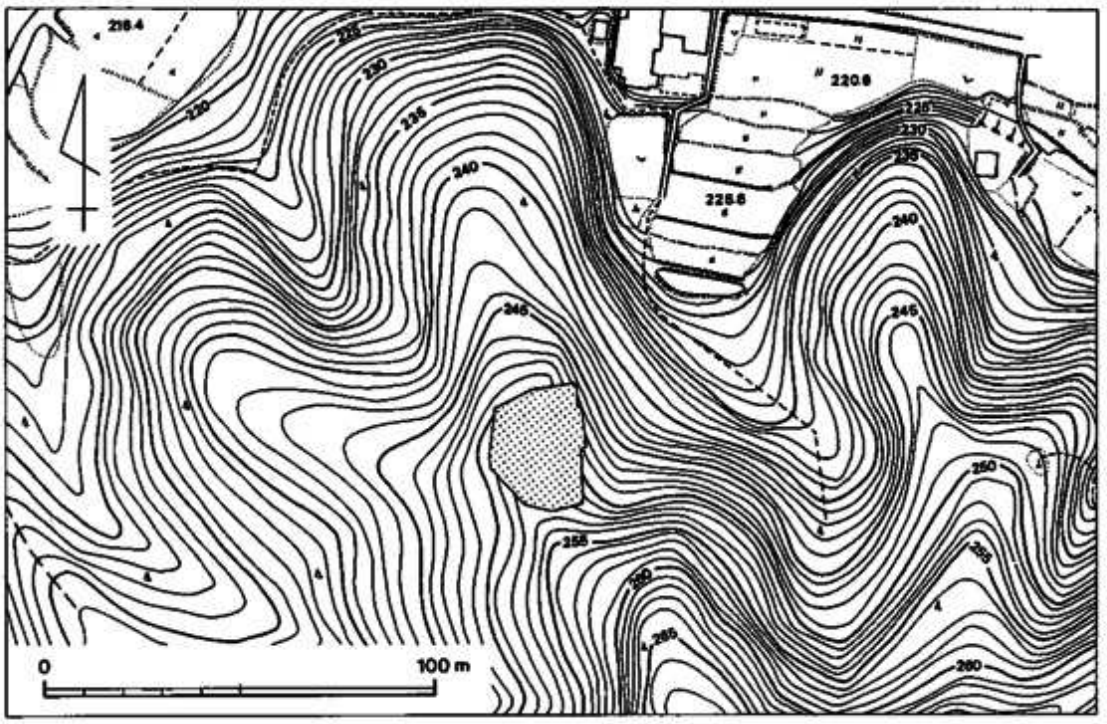
才が迫遺跡は，東広島市高屋町大字宮領1362外に所在する。

本遺跡は，標高約524mの白鳥山を中心とした東西に連なる白鳥山山地の北辺に当たる山麓傾斜面に立地する。遺跡の周囲は，細かく分岐した尾根が，入野川により形成された沖積地に向かって延びており，本遺跡もその尾根の頂部に位置する。遺跡の標高は約250mで，周囲の水田面との比高差は約20mである。

遺跡付近は黒瀬川と入野川の分水嶺となるなど，西条盆地と白市盆地の地理的な境界となっている。本遺跡はこの境界を眼下に望み，また西条町から高屋町にかけて広く一望できる好位置にある。

周辺には才が迫石棺群があり，また対峙する丘陵には，伊柳谷1号遺跡，薬師丸古墓など多くの遺跡や古墳が平地を囲むように存在している。

遺跡の現状は，山林である。



第1－1図　才が迫遺跡周辺地形図（1：2,000）（アミ目は調査区）

（２）調査の概要（第１-２・３図）

才が迫遺跡は，当初試掘調査で検出された竪穴式石室と思われる遺構を調査対象とした。南から北に延びる尾根の標高250m付近に平坦面が認められ，標高247～248m付近で傾斜が変わっていた。このため，この平坦面を中心に約20mの範囲に古墳が存在していると想定して，調査区を設定し掘り下げを進めた。

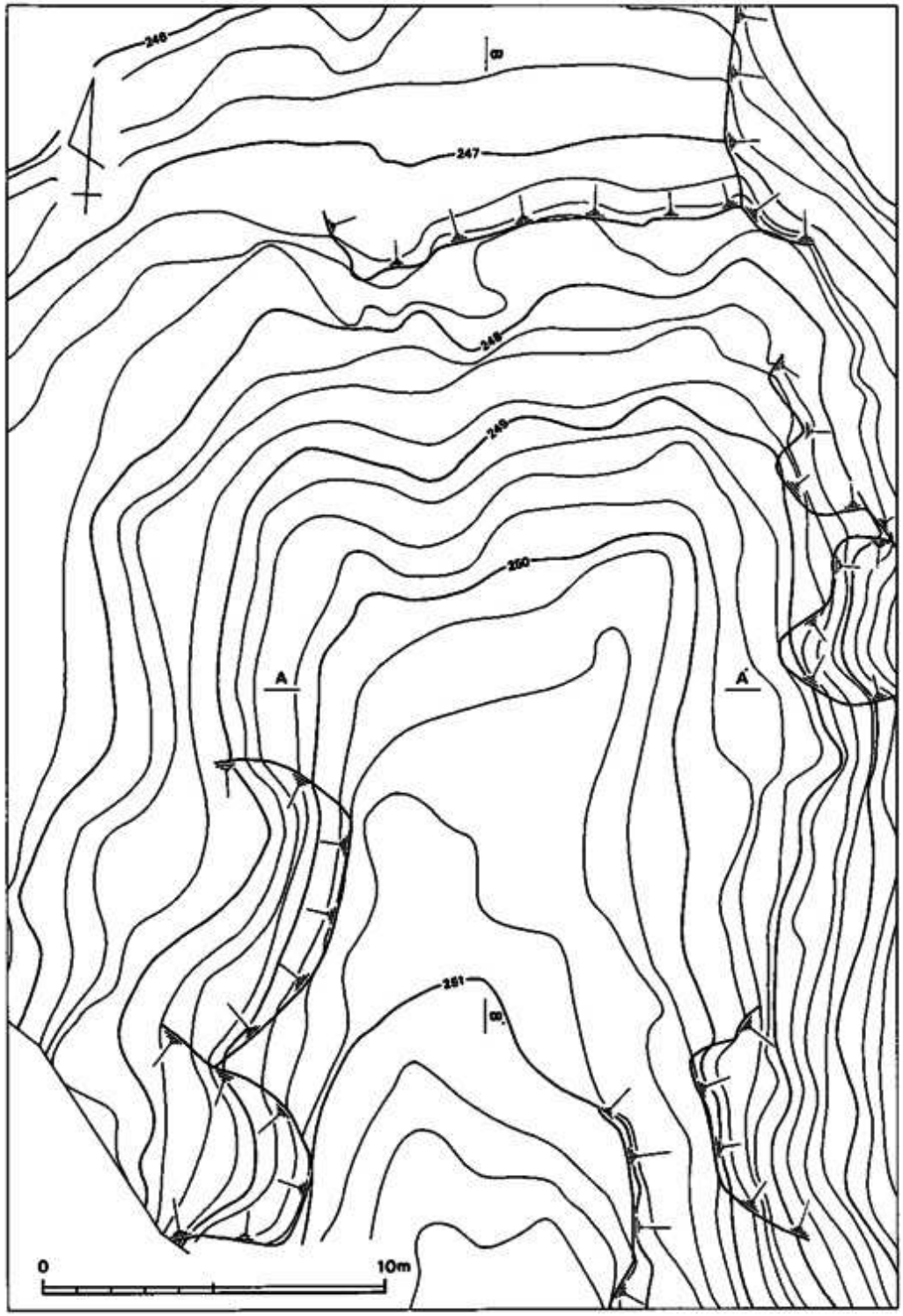
調査の結果，才が迫第１号古墳のほかに，弥生時代後期の竪穴住居跡１軒（ＳＢ１），中世と思われる石積み基壇１基（ＳＸ１）を検出した。

才が迫第１号古墳は，東西約11m，南北約10mの方墳である。墳丘南側は尾根に直交する方向で溝を掘り込み，他の３辺は地山を削りだして墳丘裾部としている。墳丘上面は削平が著しく，盛土は南東側で厚さ15cm残っているだけである。埋葬施設は２基の竪穴式石室で，墳丘上面ほぼ中央に頭位を同じくして南北に並列している。南側の石室を第１主体部，北側の石室を第２主体部とした。なお，第１主体部はすでに試掘調査時に確認されていた。調査前の現状は，天井石が全て失われており，側壁・小口壁の上端がすべて露呈していた。墳丘の掘り下げを進める段階で明らかになった第２主体部については，天井石の一部が調査前にすでに地表面に露呈していた。

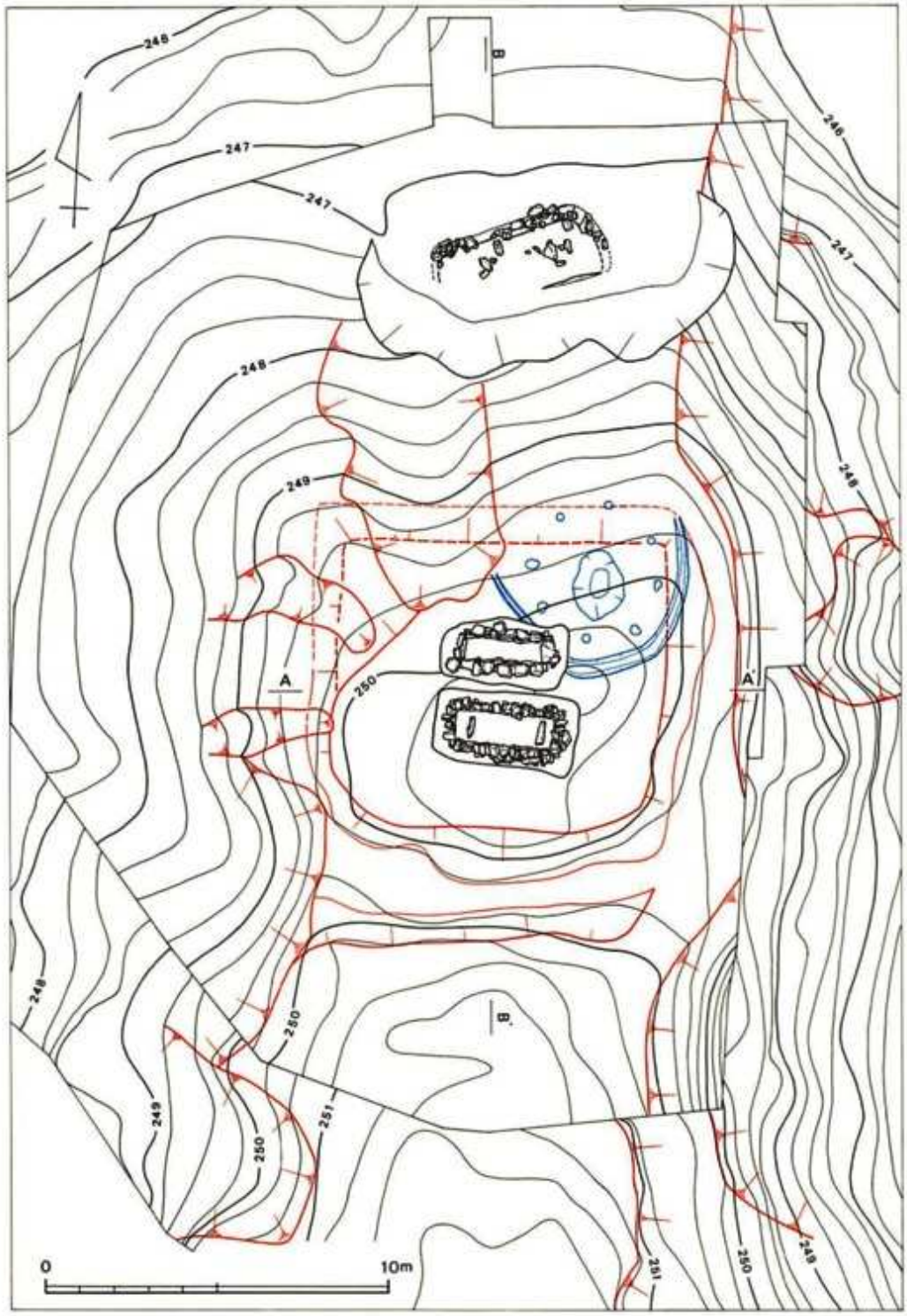
ＳＢ１は，直径約６mの円形の住居跡である。主柱穴は８個で，床面ほぼ中央に炭・灰の堆積した土壙がある。才が迫第１号古墳を築造する際に，埋められたと思われる。

ＳＸ１は，東西約５m，南北約２mの不整長方形の石積み基壇である。土壙などの埋葬施設と思われる掘り込みは認められなかった。

遺物は，才が迫第１号古墳第１主体部から銅鏃，鉄剣，玉類が，第２主体部から鉄斧，鉄槍，鉄剣，鉄鑿が出土した。第１号古墳溝埋土から，弥生土器（甕），土師器（壺・壺蓋・鉢・高杯）が出土した。また，ＳＢ１からは弥生土器（甕・椀）が，ＳＸ１からは石造物（石仏）が１体出土した。



第1－2図　オが迫遺跡地形測量図（1：200）



第1－3図　才が迫遺跡遺構配置図（1：200）

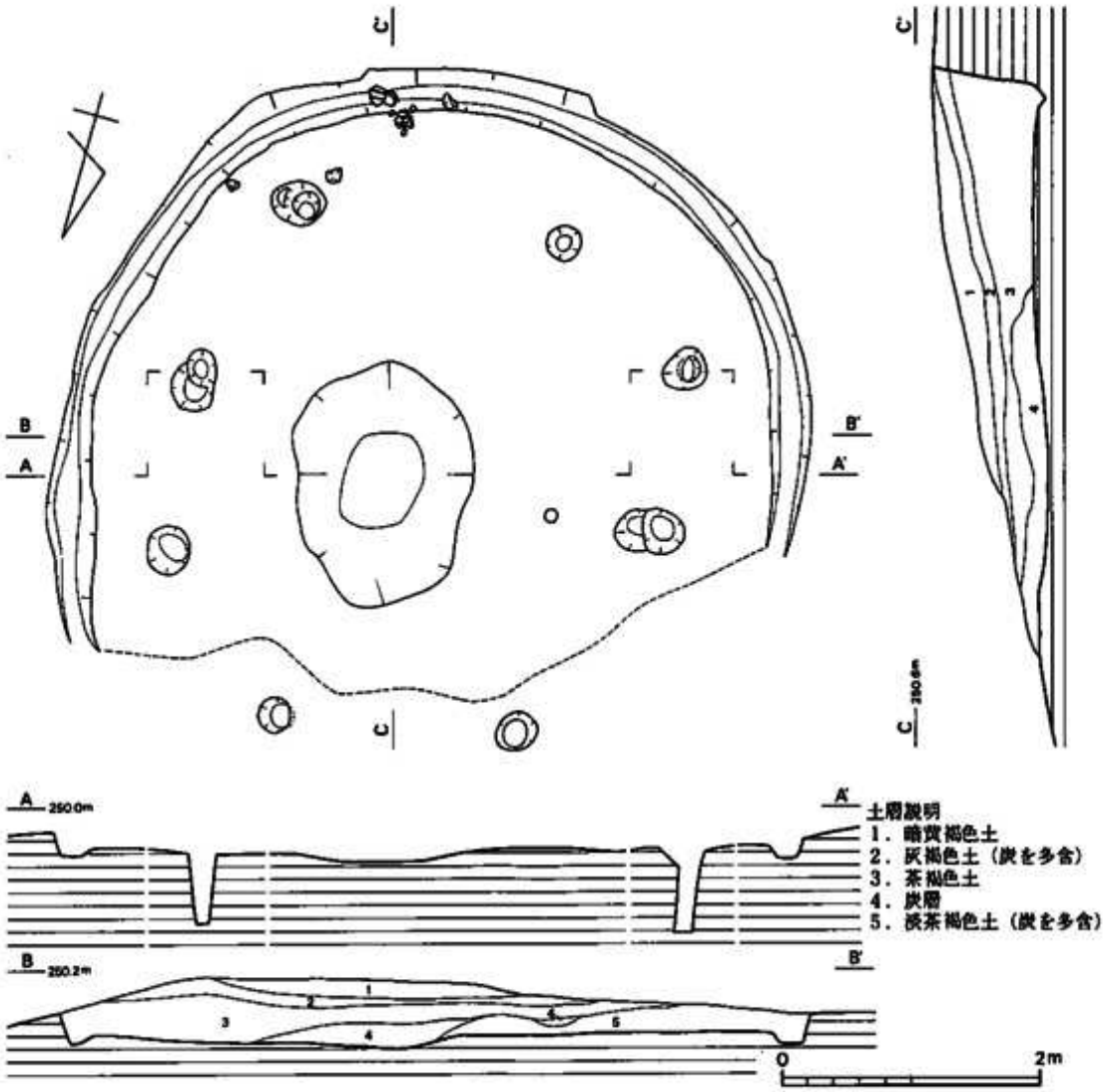
（3）遺構と遺物

1）弥生時代の遺構と遺物

竪穴住居跡

ＳＢ１（第1-4図，図版1-2～5）

ＳＢ1は，丘陵尾根の頂部やや東寄りにあり，才が迫第１号古墳第２主体部と重複している。平面形は円形で，東西5.8m，南北方向は住居跡の北側約1/3が削平されており，4.8m



第1－4図　ＳＢ１実測図（1：60）

が残っている。壁高は最も残りの良い南側で95cmである。壁面下には壁溝がめぐっており，幅20～40cm，深さ10cmである。主柱穴は８個で，径23～34cm，深さ45～80cm，柱間は1.25～2.0mである。床面ほぼ中央に1.4×1.9m，深さ20cmの土壙があり，土壙内部には炭・灰が堆積していた。

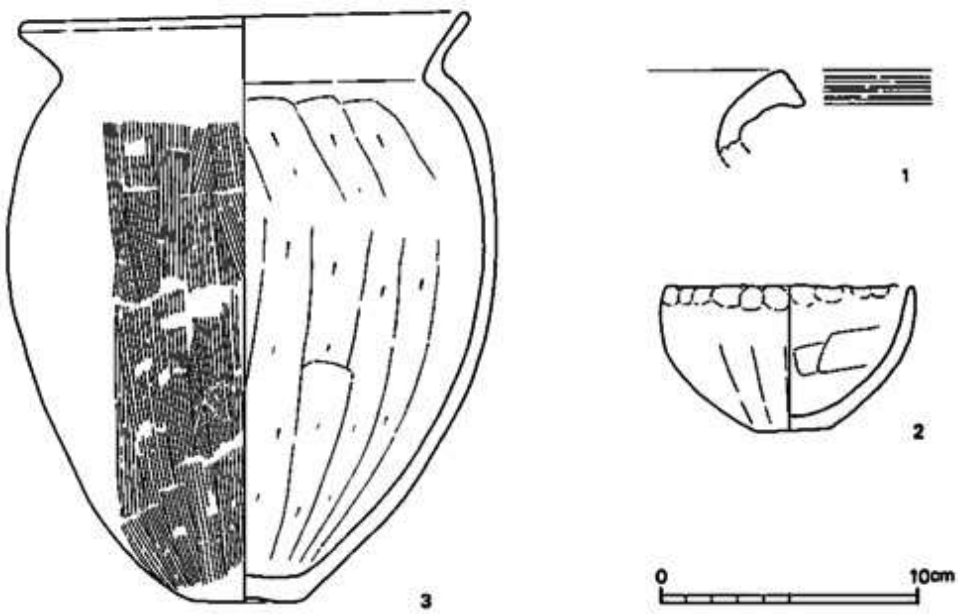
遺物は，弥生土器（甕・椀）が出土した。１・３は壁溝内埋土から，２は住居跡床面で出土した。

第２主体部との新旧関係は，ＳＢ１（古）→第２主体部（新）である。

出土遺物

弥生土器（第１-５図，図版１-23）

甕（１・３）１は口縁部～頸部の破片で，口縁部が頸部から外上方に外反してのび，口縁端部に面をつくる。調整は，内外面とも横ナデを施し口縁端部の面に３条の浅い凹線をめぐらす。色調は淡黄褐色で，胎土に0.5cm大の砂粒を少量含む。焼成は良好である。３は口縁部～胴部上半を約1/2欠失するが，胴部下半以下は完形である。復元口径17.0cm，器高22.6cm，胴部最大径19.0cm，底径4.4cmである。口縁部は頸部から外上方にまっすぐのび，口縁端部に面をつくる。胴部は底部から外上方に内湾気味にのびる。底部は平底であ



第１－５図　ＳＢ１出土土器実測図（１：３）

るが，底部中央がややくぼむ。調整は，口縁部内外面に横ナデ，胴部内面の頸部から５cmの範囲が左上がり，それ以下が右上がりのヘラケズリ，胴部外面に縦方向のハケ目を施す。色調は黄褐色で，胴部外面にススが付着している。胎土は，１cm大の砂粒を多く含み，焼成は良好である。

椀（２）　口縁部の一部を欠くがほぼ完形で，口径9.6cm，器高5.6cmである。口縁部はやや内湾し，底部は平底である。調整は，口縁部内外面に指頭痕が残り，体部内面が横方向の板ナデ，外面が縦方向の板ナデ，底部外面は板で平坦にしている。色調は，内面が橙褐色，外面が淡褐色である。胎土は微砂粒を少量含む。焼成は良好である。

ＳＢ１周辺出土の遺物

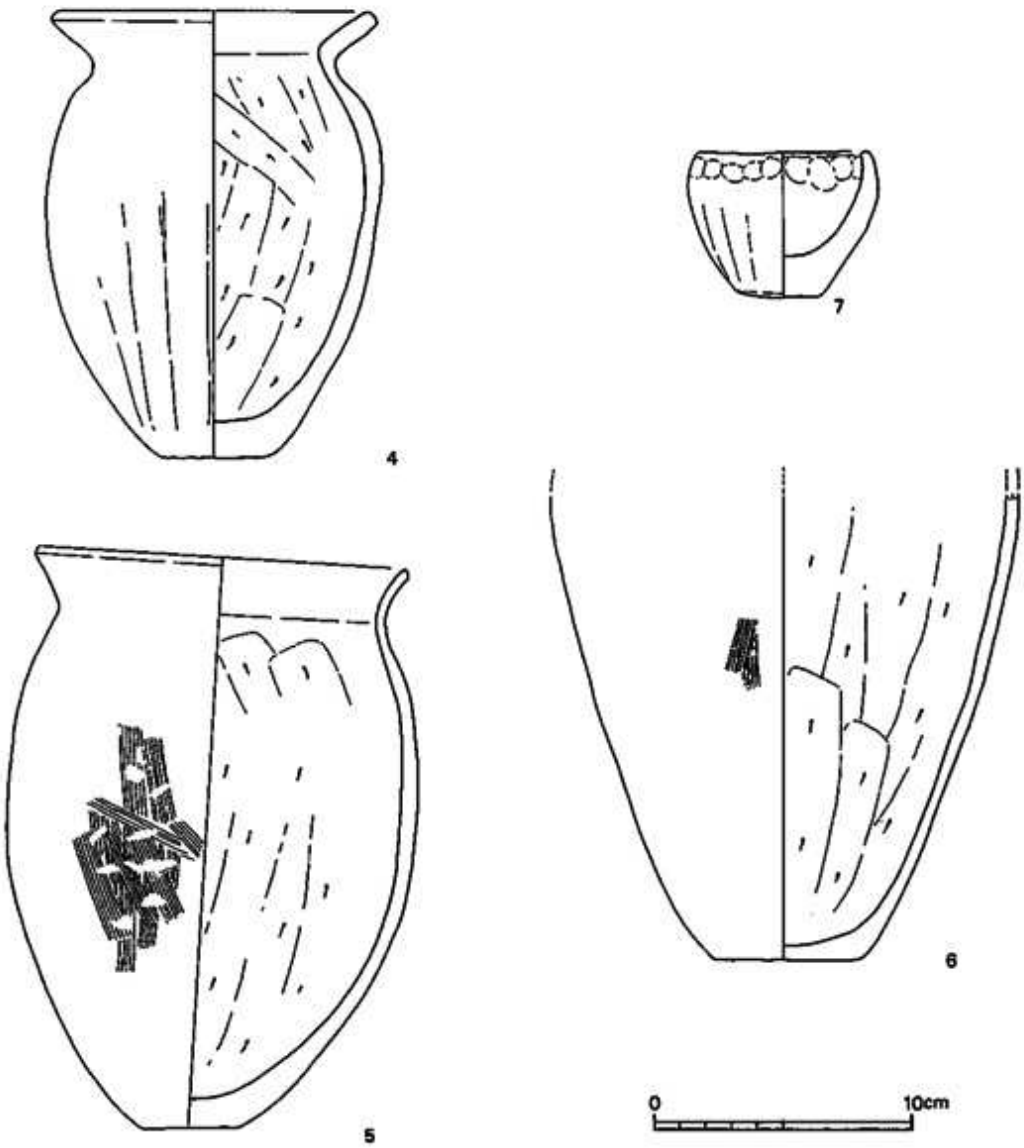
ＳＢ１の北西約４ｍの調査区内の斜面で弥生土器数点がまとまって出土した。これらの土器は，ＳＢ１から流出したと思われる。

弥生土器（第１-６図，図版１-23）

甕（４～６）　４は，口縁部の大半を欠くものの頸部以下がほぼ完形で，復元口径11.9cm，胴部最大径12.8cm，底径4.0cm，器高17.2cmである。口縁部は，頸部から外上方にまっすぐのび口縁端部に面をつくる。胴部は底部からやや内湾気味に外上方にのび，上半の丸みを持つ肩から頸部に続く。底部は平底である。調整は，胴部内面の頸部から５cmの範囲が左上がり，それ以下が右上がりの縦方向のヘラケズリで，胴部外面下半には縦方向の板ナデを施す。他の部分は不明である。色調は内面橙褐色，外面黄褐色で，胎土に0.5mm大の砂粒を多く含む。５は，口縁部の約1/2を欠くが頸部以下は完形で，復元口径14.2cm，胴部最大径15.8cm，底径3.6cm，器高22.1cmである。口縁部は，頸部から外上方にやや外湾気味にのび口縁端部に面をつくる。胴部は緩く内湾し，底部は平底である。調整は，口縁部内外面に横ナデ，胴部内面の頸部から５cmの範囲が左上がり，それ以下が右上がりの縦方向のヘラケズリ，胴部外面に縦～斜め方向のハケ目を施す。色調は茶褐色で，胴部外面下半にススが付着している。胎土は１～２mm大の砂粒を多く含む。焼成は良好である。６は，胴部下半が残っており，底径5.6cmである。胴部は緩く内湾し，底部は平底である。調整は，胴部内面に縦方向のヘラケズリを施す。胴部外面の一部にはハケ目・板ナデが残るが，範囲や方向は不明である。色調は内面橙褐色，外面黄褐色で，胎土は１～２mm大の砂粒を多く含む。焼成は良好であるが，器表面が磨滅し，一部に剥離した部分もある。

椀（７）　完形で，口径6.6cm，底径3.4cm，器高5.6cmである。底部から外上方にまっすぐのびるが，口縁部は内湾し，口縁端部は丸くおさめる。調整は，口縁部内外面に指頭痕

が残り，体部内面に指ナデ，体部外面に縦方向の板ナデ，底部外面に指ナデを施す。色調は内面が赤褐色～暗褐色，外面が赤褐色である。胎土は微砂粒を少量含み，焼成は良好である。



第1－6図　SB1周辺出土土器実測図（1：3）

2）古墳時代の遺構と遺物

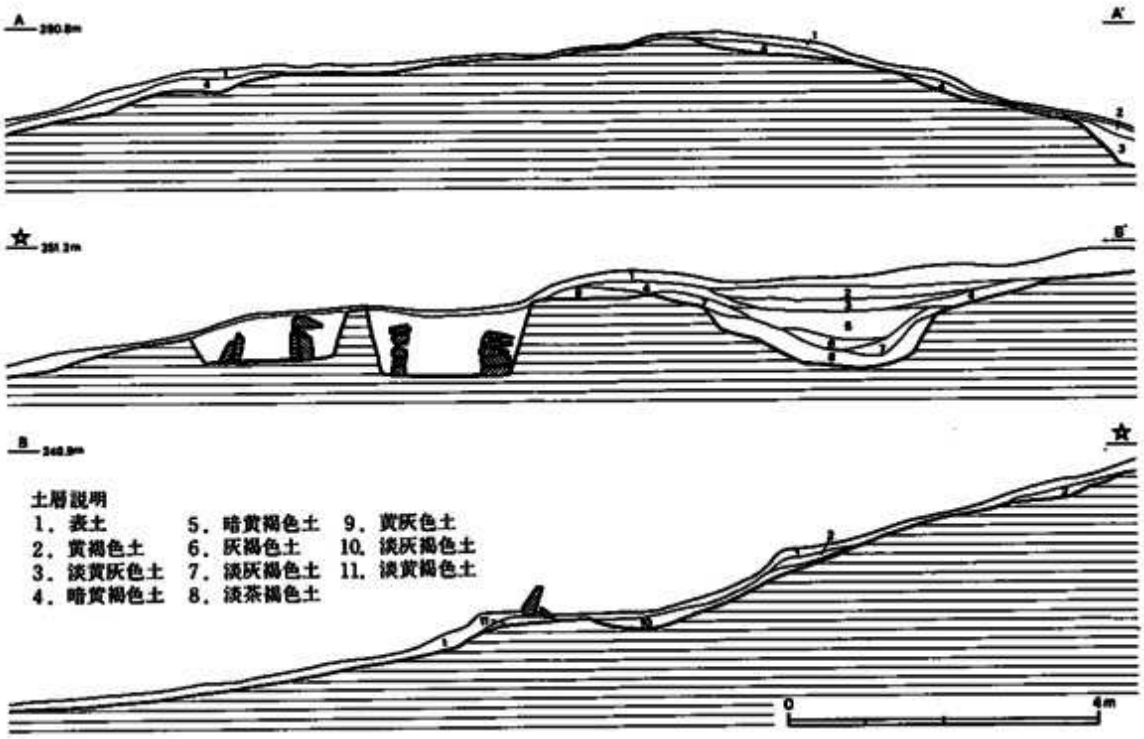
才が迫第１号古墳

才が迫第１号古墳は，調査区中央やや南寄りにある。墳丘頂部の標高は250mで，丘陵尾根に立地している。周辺の水田からの比高は24mである。

墳丘（第1-3・7図，図版1-6・7）

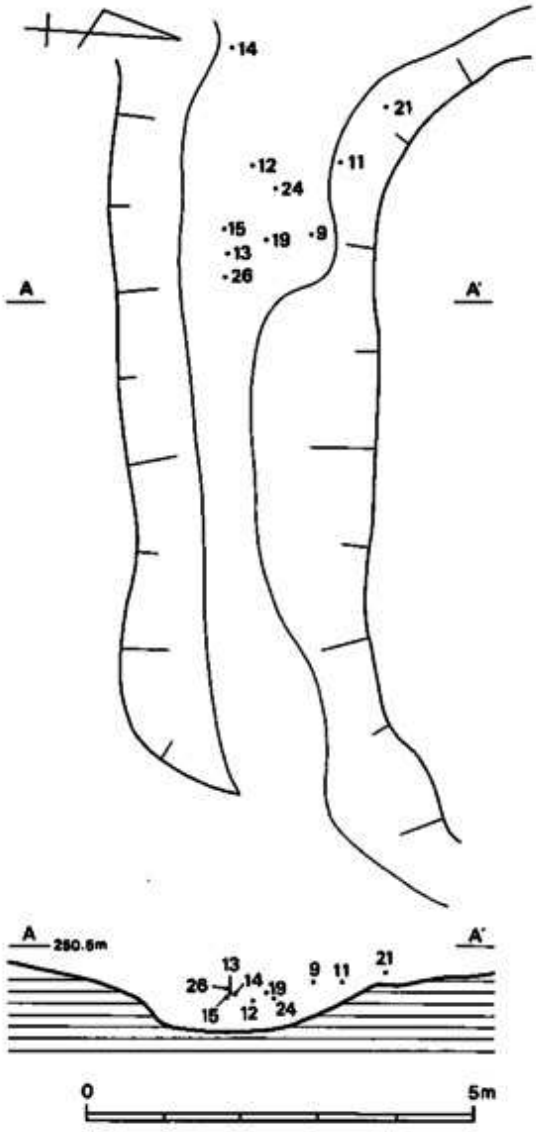
墳丘は，緩やかに北へ下る丘陵尾根上の平坦面を利用している。丘陵基部側には，尾根線に直交して溝を掘り込み，他の３方向は地山を削って平坦面を造り出し墳丘裾部としている。墳丘は全体に後世の削平を受けており，特に北西側は大きく崩落しているものの，平面形はほぼ方形である。盛土は墳丘南東側の最も厚いところで，約15cm残っている。墳丘の規模は，上面で東西9.5m，南北7.5m，裾部で東西11.2m，南北9.5mである。墳丘の高さは，墳丘南側の下端から75cmである。

溝は，南北両上端が流失し低くなっているが，現状で長さ10.0m，幅3.0mで，深さは墳丘側の上端から80cmである。底面はほぼ平坦である。



第１－７図　第１号古墳墳丘土層断面（１：100）

遺物は，盛土内からは出土しなかった。溝内埋土からは，弥生土器（甕），土師器（壺蓋・脚付壺・壺・鉢・高杯）が出土した。8は埋土最上層から，9～28は埋土中層～下層からまとまって出土した。8は，他の遺物に比べて大きく時期が異なることから，調査区外にこの時期の遺構があると思われる。9～28は，溝底面から10～50cm高い位置から出土しているため，墳丘の削平などに伴って溝内に流入したものと思われる。



第1－8図　第1号古墳溝内遺物出土状況実測図（1：100）

溝内出土遺物

弥生土器（第1－9図，図版1－24）

甕（8）口縁部～胴部上端の破片で，復元口径は29.0cmである。口縁部は，頸部が「く」字状に屈曲して外上方にまっすぐのび，口縁端部は丸くおさめる。頸部の内面は鋭角な稜をなし，外面には断面三角形の貼付け突帯が一条めぐる。調整は，外面の口縁部～頸部が横ナデで，内面は不明である。外面の突帯下には板状工具による2条の調整痕がみられる。突帯の頂部にはヘラ状工具による浅い刺突が施されている。色調は，淡黄褐色である。胎土は0.5mm大の砂粒を多く含み，焼成は良好である。

土師器（第1－9・10図，図版第1－24・25）

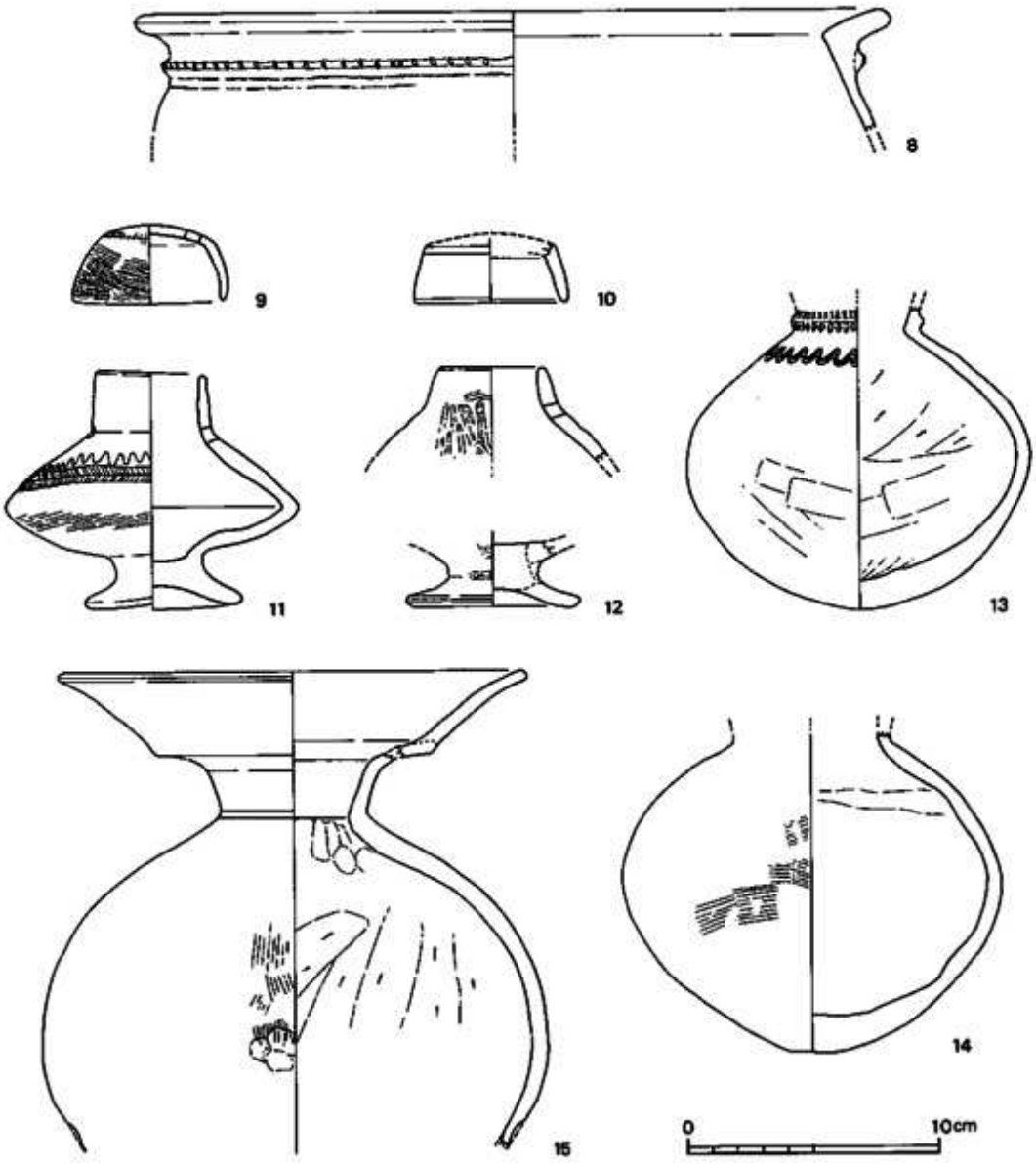
壺蓋（9・10）　9は，天井部と口縁部の一部を欠失するがほぼ完形で，口径5.9cm，器高3.1cmである。口縁部と天井部の境が明瞭で，口縁部は内湾気味に外下方にのび，天井部は丸みを持つ。天井部には2か所に穿孔がなされており，孔径は5mmである。調整は，内面に板状工具によるナデを施す。外面には，口縁部

に横方向の丁寧なハケ目，口縁部と天井部の境に刻み目，天井部に細かな板ナデを施す。色調は茶褐色で，胎土は1～3㎜大の砂粒を少量含む。焼成は良好である。10は，口縁部～天井部の破片で，復元口径5.9cmである。口縁部と天井部の境が明瞭で，口縁部は外下方にまっすぐのびる。調整は，内外面とも丁寧なナデである。色調は淡灰褐色で，胎土は0.5㎜大の砂粒を少量含む。焼成は良好である。

脚付壺（11・12）　11は，体部と脚部の一部を欠くがほぼ完形で，口径4.1cm，体部最大径11.7cm，脚径5.5cm，器高9.3cmである。口縁部は頸部からほぼ垂直にのび，口縁端部に面をつくる。体部は，中央が大きく横に張る「ソロバン玉」状である。脚部は外下方にまっすぐのび，脚端部は丸くおさめる。調整は，口縁部内外面と脚部内面が丁寧な指ナデ，体部内面の最大径部分付近には指オサエを施している。体部外面の上半には，丁寧な指ナデ後，1条の波状文と3条のヘラ描き沈線の間に斜め方向のヘラ描き刺突文を施している。下半は，斜め方向のハケ目後指ナデである。また頸部には，2か所に穿孔がなされており，孔径は5㎜である。色調は淡茶褐色で，外面に赤色顔料を塗布している。胎土は0.5㎜大の砂粒を少量含む。焼成は良好である。11は壺蓋（9）とセットになると考えられる。12は，口縁部～体部上半の破片と完形の脚部で，接合しないが同一個体と思われる。復元口径4.0cm，脚径6.3cmである。口縁部は頸部からやや内傾気味に立ち上がり，口縁端部に面を持つ。体部は内湾気味で，脚部は「ハ」字状に開き，脚端部には面をつくる。脚部の断面には，円柱状の粘土に体部と脚裾部を接合したと思われる痕跡が観察できる。調整は，口縁部～体部内面が横ナデ，口縁部外面が横方向のヘラミガキ，体部外面は縦方向のヘラミガキを施す。体部外面には波状文が残る。脚部内面は，横方向の板ナデ，脚柱部には横方向のヘラミガキ，脚裾部外面は丁寧な指ナデ，脚部内面はヘラオサエで，一部に横方向のハケ目が残る。また頸部には，穿孔が1か所あり，孔径は5㎜である。色調は体部内面が暗黄褐色で，他の部分が茶褐色である。胎土は0.5～2㎜大の砂粒を小量含む。焼成は良好である。12は壺蓋（10）とセットになると考えられる。

壺（13～15）　13は頸部～底部の破片で，頸部復元径5.0cm，体部最大径13.5cm，底径1.0cmである。頸部下端に突帯を1条持ち，口縁部が外上方にのびる。体部は楕円形で，底部が僅かに残る。調整は，頸部内面が指ナデ，頸部外面の突帯にはヘラ状工具による刺突を施す。体部内面は，上半が斜め方向のヘラケズリ，下半が斜め方向の板ナデである。体部外面は，上端付近に4条以上の櫛描波状文を施し，下半の一部に横方向の板ナデの痕跡が残る。色調は黄褐色で，胎土は1～2㎜大の砂粒を多く含み，焼成は良好である。14は頸部以下がほぼ完形で，頸部径6.2cm，体部最大径15.2cm，底径2.0cmである。体部が楕円形

で，底部が僅かに残る。調整は，体部内面に板ナデが一部残り，体部外面下半が横方向のハケ目後，指ナデを施す。色調は淡黄褐色で，胎土は１～２㎜大の砂粒を多く含み，焼成は良好である。15は口縁部～体部下半の破片で，口縁部は破片であったため図面上で復元した。復元口径18.1cm，体部最大径20.0cmである。口縁部は二重口縁で，頸部からほぼ水平にのびたのち大きく屈曲し，上方に外反気味にのびる。口縁端部は丸くおさめる。体部は最大径部分がやや横に張り出した球形である。調整は，口縁部内面上半が横方向の板ナ



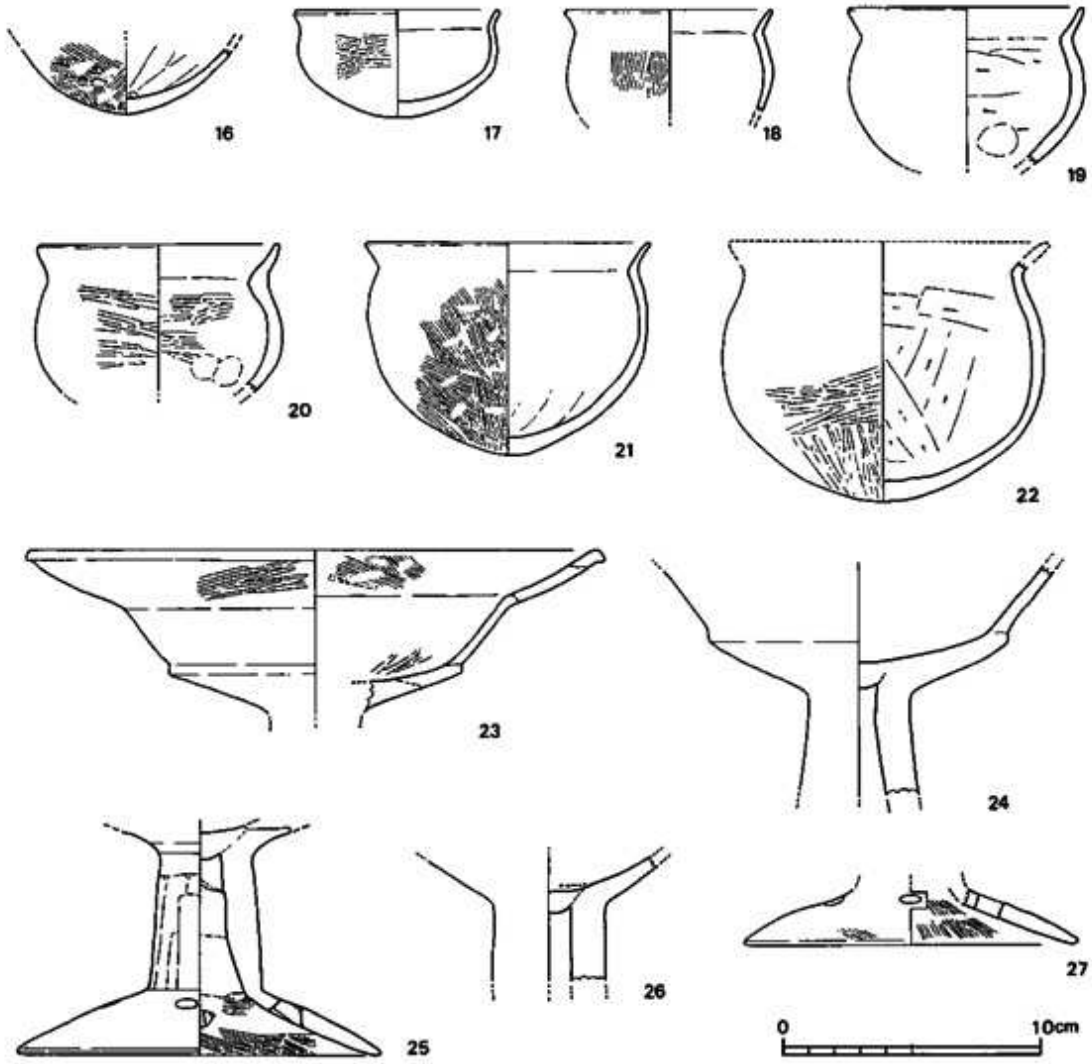
第１－９図　第１号古墳溝内出土土器実測図１（１：３）

デ，口縁部外面の一部に縦方向のヘラミガキが残る。胴部内面上端にはしぼり込みの痕跡が残る。体部内面下半は，縦方向のヘラケズリで，外面下半は，縦・斜め方向のハケ目後一部にヘラナデを施している。色調は淡黄褐色で，胎土は1～2㎜大の砂粒を多く含み，焼成は良好である。

鉢（16～22）　16は底部の破片で，底径0.8cmである。体部が底部から外上方に内湾気味に立ち上がる。底部中央は僅かに平坦になる。調整は，内面が縦方向の板ナデ，外面が不定方向の細かいハケ目である。色調は内面黄褐色～暗灰色，外面淡茶褐色で，胎土は1㎜大の砂粒を少量含む。焼成は良好である。17は口縁部～底部の破片で，復元口径・体部最大径とも7.8cm，底径1.3cm，器高4.2cmである。口縁部は頸部から外上方にのび，体部最大径部分は頸部の直下にある。体部は内湾し，底部が僅かに平坦になる。調整は，口縁部内外面が横ナデ，体部内面上半が指ナデ，体部外面上半が横方向の粗いハケ目，体部外面下半と底部がハケ目後指ナデで，底部は調整を施した後下方に押しつけて平坦にする。色調は淡茶褐色で，胎土は1～2㎜大の砂粒を多く含む。焼成は良好である。18は口縁部～体部下半の破片で，復元口径7.8cm，体部最大径8.0cmである。口縁部は頸部から外上方にまっすぐのび，口縁端部を丸くおさめる。体部は内湾する。調整は，口縁部内外面と体部内面・外面上端付近が横ナデ，体部外面上半が縦方向の細かいハケ目である。色調は淡茶褐色で，胎土は1㎜大の砂粒を少量含む。焼成は良好である。19は口縁部～体部下半の破片で，復元口径9.0cm，体部最大径9.2cmである。口縁部は頸部から内湾気味に外上方にのび，口縁端部は細く引き出す。体部は内湾する。調整は，口縁部内外面が横ナデ，体部内面が横方向のヘラケズリである。色調は内面淡黄褐色～暗褐色，外面赤褐色で，体部内面に赤色顔料が付着している。胎土は1㎜大の砂粒を少量含み，焼成は良好である。20は口縁部～体部下半の破片で，復元口径9.3cm，体部最大径9.6cmである。口縁部は頸部から内湾気味に外上方にのび，頸部内面に稜を持つ。体部は内湾する。調整は，口縁部が横ナデ，体部内外面が横方向のヘラミガキである。また体部内面には指頭痕が残る。色調は明茶褐色で，胎土は1～2㎜大の砂粒を多く含む。焼成は良好である。21は口縁部～底部の破片で，復元口径10.9cm，体部最大径10.8cm，底径1.5cm，器高8.2cmである。口縁部は頸部から外上方にまっすぐのび，口縁端部を細く引き出す。体部は内湾し，底部が僅かに肥厚する。調整は，口縁部内外面と体部内面上半・体部外面上端付近が横ナデ，体部内面下半が丁寧な指ナデ，体部外面には縦～斜め方向の丁寧なハケ目を施す。色調は淡茶褐色で，胎土は1㎜大の砂粒を少量含む。焼成は良好である。22は頸部～底部の破片で，体部最大径12.4cmである。体部が内湾し，底部は丸底である。調整は，体部内面の頸部から下へ2cm

の範囲が横方向のヘラケズリ，それ以下が斜め方向のヘラケズリ，体部外面中位が横方向のヘラミガキ，外面下半が縦方向のヘラミガキである。色調は淡黄褐色で，胎土は0.5mm大の砂粒を多く含む。焼成は良好である。

高杯（23～27）　23は口縁部～杯部下端の破片で，復元口径22.0cm，脚柱部上端の径3.6cmである。杯部は脚柱部上端からほぼ水平気味に広がる。口縁部は外上方にまっすぐのびたのち，外側に屈曲し内湾気味に外上方にのびる。口縁端部はわずかに下方に拡張し，面をつくる。調整は，内面の口縁部下半～体部に横方向の丁寧な板ナデ，口縁部内面上半に斜め方向の丁寧なハケ目後，横方向の板ナデを施す。口縁端部に横ナデ，口縁部外面上半に横方向のヘラミガキを施す。口縁部外面下半は不明である。杯部外面は横方向のヘラナ



第1－10図　第1号古墳溝内出土土器実測図Ⅱ（1：3）

デである。色調は橙褐色で，胎土は0.5㎜大の砂粒を多く含む。焼成は良好である。24は口縁部～脚柱部が残っており，脚柱部上端の径は3.9㎝である。杯部は脚柱部上端から水平気味にのび，口縁部は外上方にまっすぐのびる。脚柱部はやや広がりながら下方にのびる。調整は，脚柱部内面上端から約1㎝の範囲が棒状工具による成形後未調整で，それ以下が同じ工具による横方向のナデである。脚柱部外面は横ナデで，他の部分は不明である。色調は淡黄褐色で，内外面の一部には赤色顔料が残る。胎土は1～2㎜大の砂粒を少量含む。焼成は良好である。25は杯部下半～脚端部の破片で，復元脚径13.8㎝である。杯部は外上方にのび，脚柱部はほぼ垂直で，脚裾部は脚柱部下端で大きく屈曲し外下方にまっすぐのびる。脚端部は丸くおさめる。調整は，杯部内面がヘラミガキ，脚柱部内面上半は，棒状工具による成形を行い，横ナデを施す。脚柱部内面下半は横ナデ，脚柱部外面は縦方向のヘラミガキ，脚裾部内面が斜め方向のハケ目である。また脚裾部の4か所には穿孔がみられる。色調は淡黄褐色～淡茶褐色で，外面の一部に赤色顔料が残る。胎土は0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。焼成は良好である。26は杯部下半～脚柱部上半の破片で，脚柱部上端の径は4.3㎝である。杯部は脚柱部から外上方にまっすぐのびる。器壁の褐離により杯部内面中央には脚柱部の上端が露出している。調整は，脚柱部内面が棒状工具による成形後未調整で，杯部と脚柱部外面が横ナデである。色調は淡黄褐色で，胎土は1㎜大の砂粒を多く含む。焼成は良好である。27は脚裾部が残っており，復元脚径12.8㎝である。脚柱部から外側に大きく屈曲し，「ハ」字状にまっすぐ広がる。脚端部は丸くおさめる。裾部上半の4か所には円孔をあけている。調整は，裾部内面が斜め方向のハケ目，外面が斜め方向のハケ目後ナデを施している。色調は橙褐色で，胎土は0.5㎜大の砂粒を多く含む。焼成は良好である。なお，23と27は同一個体の可能性がある。

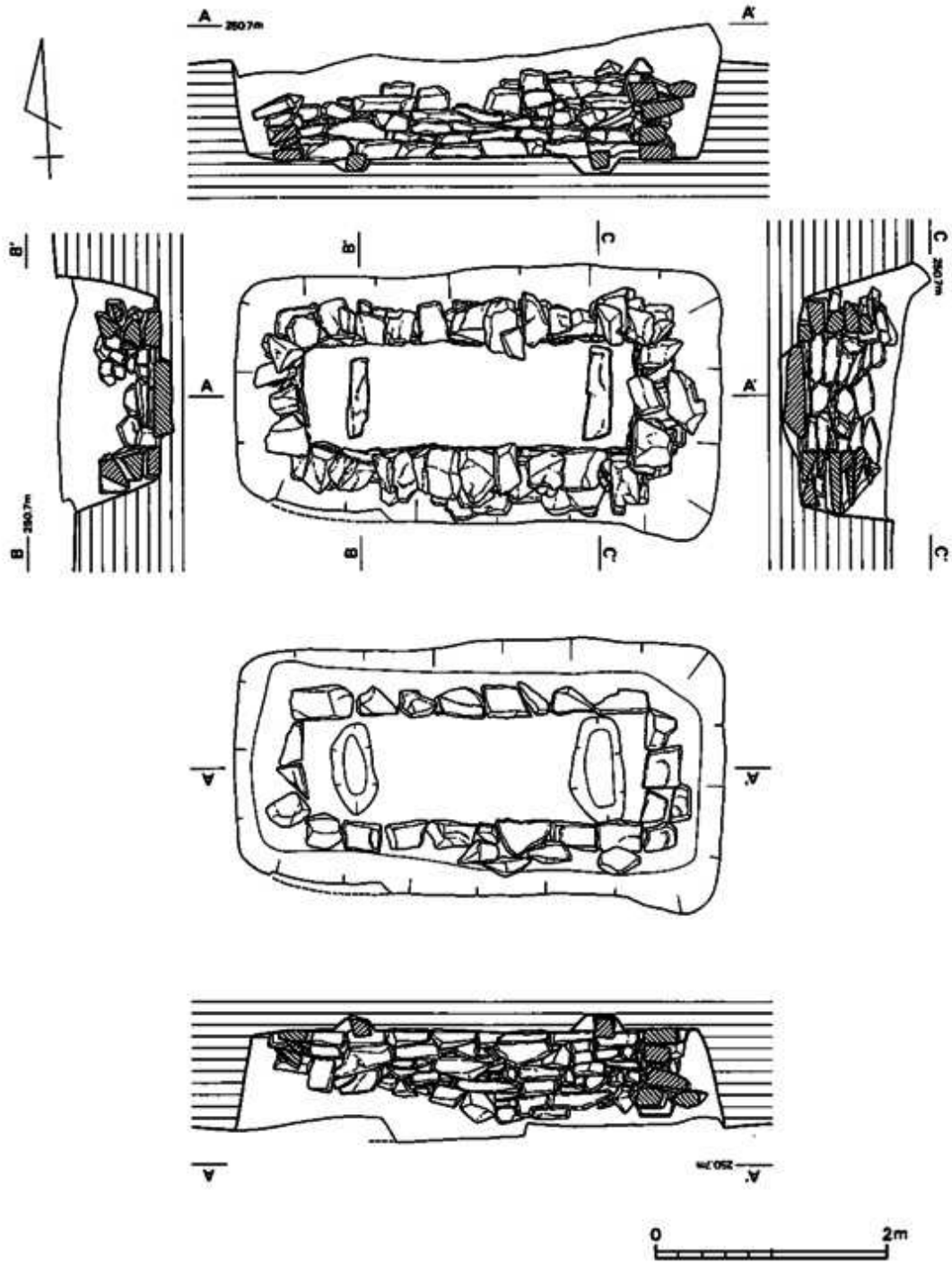
埋葬施設

第1主体部（第1-11・12図，図版1-9～16）

第1主体部は，墳丘頂部平坦面の中央よりやや南側に位置する竪穴式石室である。墳丘南側の溝とほぼ平行しており，長軸方向はN87°Wである。

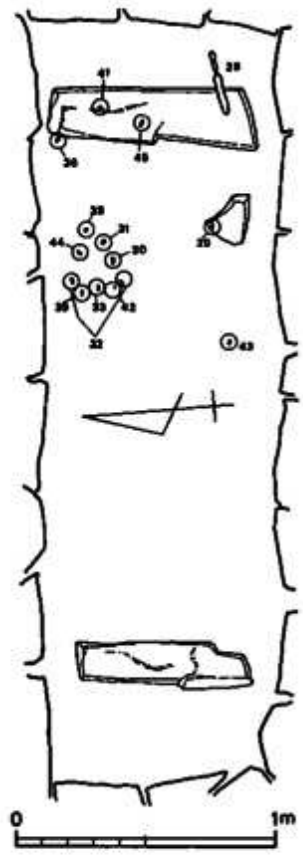
石室掘方は，墳丘盛土が殆ど残っていないため明確ではないが，おそらく地山面から掘り込まれたと思われる。平面形は隅丸長方形で，上端での規模は東西4.2m，南北2.2m，底面では東西3.9m，南北1.7m，深さは最も残りの良い北東隅部分で1.15mである。掘方底面は，ほぼ平坦である。

石室は，一辺15～50㎝，厚さ10～20㎝の板状の石を用いて築かれている。石室の規模（内



第1－11図　第1号古墳第1主体部実測図（1：60）

法）は床面で，長さ2.93m，東側の幅96cm，西側の幅84cmである。東側の幅が広いため，頭位は東であったと考えられる。石室の構築に際しては，まず石室掘方底面の東西２か所を石室の長軸に直交する方向で掘り込み，各々に棺台石と考えられる長方形の石を据えている。棺台石の掘方は，石室掘方の東西方向の下端からそれぞれ約90cm内側にあり，規模は長さ75～90cm，幅35～50cm，深さ10～14cmである。これらの棺台石の上面はやや内傾しているものの，その高さはほぼ同じで，南北方向も水平である。棺台石と石室東西壁の距離は，東壁までが25cm，西壁までが40cmで，棺台石相互の間隔は1.89mである。東側棺台石の掘方が石室南壁最下段の石の下にまで及ぶことから，棺台石を石室掘方床面に据えることで，石室掘方の中での石室自体の位置の決定がなされたものと思われる。次に各壁の基礎となる石を掘方底面に並べるが，個々の基底石の掘方はない。各壁とも積み上げる際には，１段ずつ高さを揃えようとした傾向が窺える。北壁と東壁は石の大きさも概ね揃っているが，南壁は板状の大きな石を使ってはいるものの，隙間に小礫を入れて高さを合わせている。西壁は四壁の中でも特に残存状態が悪いが，石の積み方については南壁と同じ状況である。石室各壁の傾きに注目すると，東壁と北壁中央付近が最上部でやや内側に迫り出している他は，垂直からやや上開き気味になっている。石室の各壁と掘方との間はほぼ土砂だけで埋められており，裏込めの石は殆どみられない。このことは，石室の各壁が上開き気味になっていることと関連があると思われる。また，四壁ともその上部は崩落あるいは抜き取りにあっていると思われ，特に中央から西側が残りが悪い。このため天井石は１枚も残っておらず，周囲にそれと思える石もなかった。これは，石室が攪乱を受けた際に持ち去られたと思われるが，石室の天井が木製であった可能性もあろう。



第１－12図　第１号古墳第１主体部遺物出土状況実測図（１：30）

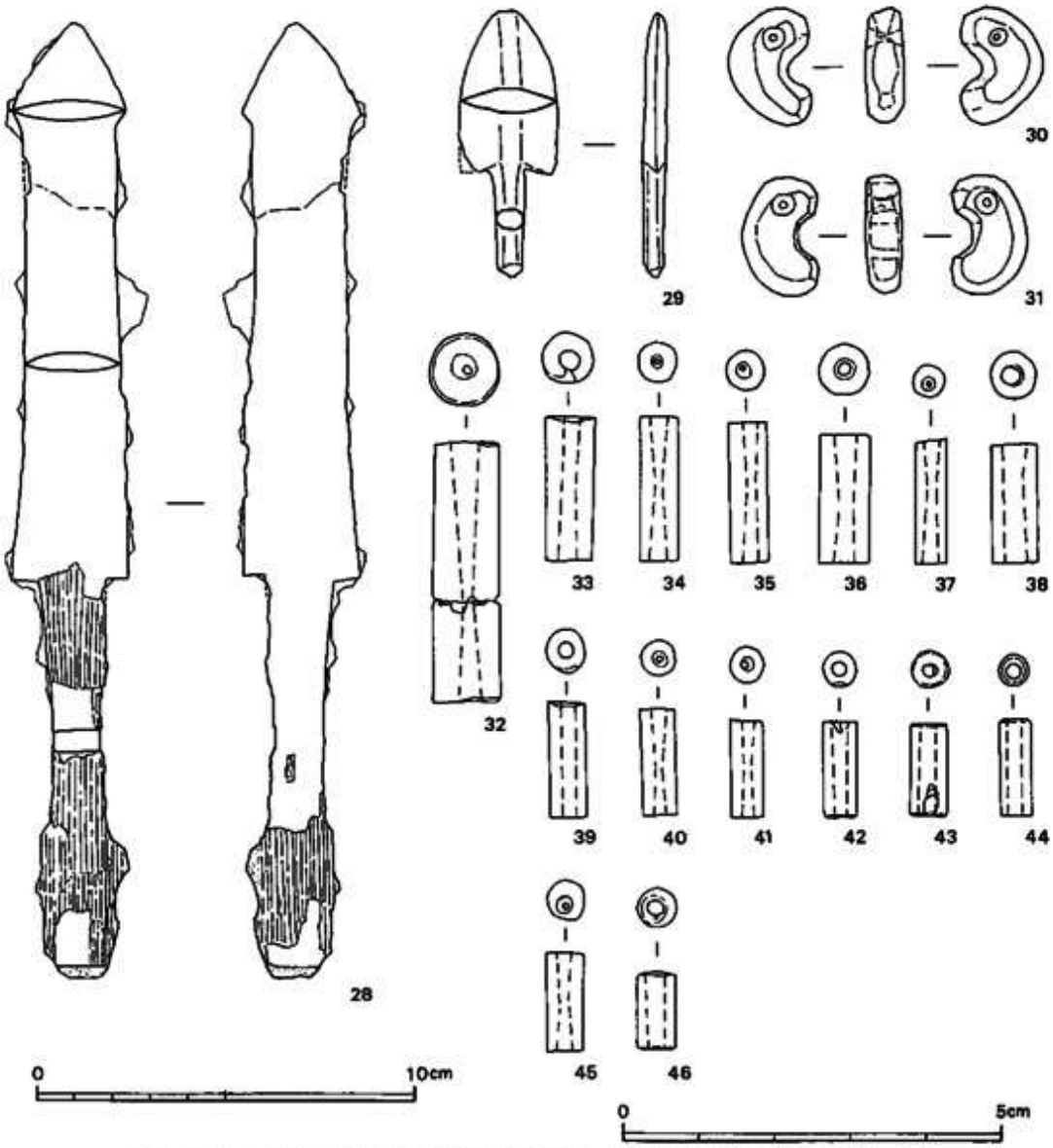
遺物は，鉄剣１点，鋼鏃１点，勾玉２点，管玉15点が出土した。鉄剣は東側棺台石の上面から，鋼鏃は東側棺台石から約20cm石室の内側にある亜角礫の上から出土した。玉類は東側棺台石周辺と石室中央やや南寄りからも出土したが，主には東側棺台石から約50cm，石室北壁か

ら約20cm内側の，径約30cmの範囲に集中していた。ただ，鉄剣は切先が石室内側を向いており，また銅鏃の載っていた石は転落したものと思われることから，これらの遺物は原位置を保っていないのではないかと考えられる。また，唯一原位置を保っていると思われる玉類にしても，その出土位置は石室中心線よりも北にずれている。

出土遺物（第1-13図，図版1-26）

鉄製品

鉄剣（28）　一部に欠損や錆化が進んでいるもののほぼ完形で，全長25.0cm，刃部長14.7



第1－13図　第1号古墳第1主体部出土遺物実測図（28は1：2，その他は1：1）

cm，茎部長10.3cmである。幅は，切先から2.3cmの部分で3.0cm，切先から2.7cmの部分で2.5cm，刃部下端で3.3cm，茎部上端で1.7cm，茎部中央付近で1.3cm，茎部下端では1.5cmである。平面の形状は，切先から外方にまっすぐ延びたのち一旦くびれ，再び直線的に刃部下端に向かって延び，切先から11.5cm付近で幅を広げ関はやや鋭角に開く。茎部は中央付近がやや細くなっているものの，直線的である。断面の形状は，刃部はレンズ状で，茎部は長方形である。茎部には，木質が良く残っており，木目が茎部に対して平行に走っている。把部の柄縁部分は，残存する木質や刃部の錆から直線的と思われる。目釘穴はない。

銅製品

銅鏃（29）　茎部先端と片方の刃部下端を欠損している。残存長3.6cm，刃部長2.2cm，刃部最大幅1.8cmである。刃部は全体的に内湾気味で，関は鋭角に開いている。

玉類

勾玉（30・31）　2点とも完形で，30は長さ1.55cm，頭部の厚さ5㎜，孔径2㎜，31は長さ1.6cm，頭部の厚さ5㎜，孔径3㎜である。どちらも紐孔を両方向から穿孔し，中央部分は径1㎜と狭くなっている。側面には平坦面を残している。色調は淡白緑色で，材質はメノウである。重さは30が1.56g，31が1.44gである。

管玉（32～46）　32は割れていたが，他は完形である。紐孔はいずれも上下両方向から穿孔する。各個体の計測値・色調・材質は，第1-1表に示す。

第2主体部（第1-14図，図版1-9～11・17～20）

第2主体部は，墳丘頂部平坦面の中央のやや北側に位置する竪穴式石室である。長軸方向はN88°Eである。第1主体部の長軸方向と5°ずれるだけで，ほぼ平行している。石室

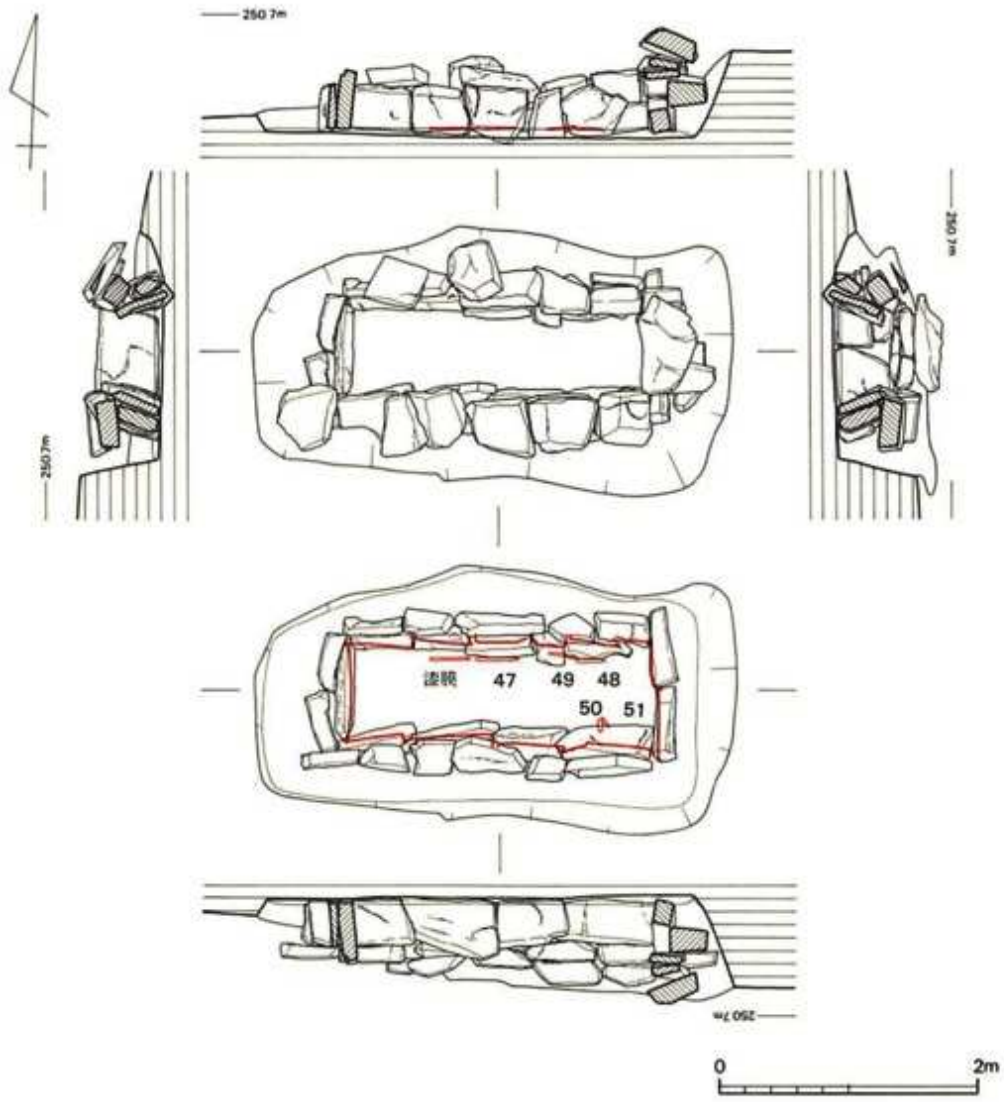
No.	長さ (cm)	径 (㎜)	孔径 (㎜)	色調	重さ (g)	材質	No.	長さ (cm)	径 (㎜)	孔径 (㎜)	色調	重さ (g)	材質
32	3.55	9	3	濃緑色	5.41	碧玉	40	1.45	4.5	1.5	灰緑色	0.81	碧玉
33	1.95	6	2	灰緑色	1.42	〃	41	1.30	4.5	1.5	灰緑色	0.39	〃
34	1.95	5	2	淡灰緑色	1.30	〃	42	1.30	4.5	2	灰緑色	0.47	〃
35	1.90	5	2	濃緑色	1.00	〃	43	1.25	5	2	乳緑色	0.48	珪質凝灰岩
36	1.75	7	3	灰緑色	1.44	〃	44	1.30	4	2	淡灰緑色	0.42	〃
37	1.70	4	2	濃緑色	0.75	〃	45	1.30	5	2	灰緑色	0.46	碧玉
38	1.60	6	3	淡灰緑色	1.34	珪質凝灰岩	46	1.05	5	2	灰緑色	0.72	〃
39	1.55	6	1.5	灰緑色	0.68	碧玉							

第1－1表　第1号古墳第1主体部出土玉類計測表

の北東隅が，ＳＢ１と重複している。

石室掘方は，地山面から掘り込まれたと思われるが全体的に削平が著しく，南東隅から北西隅に向かって大きく削られている。このため平面形はいびつであるが，ほぼ隅丸長方形と考えられる。上端での規模は東西3.7m，南北1.95m，底面では東西3.35m，南北1.75m，深さは最も残りの良い北東隅部分で，0.75mである。掘方底面は，ほぼ平坦である。

石室の規模（内法）は床面で，長さ2.35m，東側の幅0.84m，西側の幅0.74mである。



第１－14図　第１号古墳第２主体部実測図（１：60）

床面での石室の形状は，長方形である。東側の幅が広いため，頭位は東であったと考えられる。石室の構築は，まず石室床面に大きさ40～75cm，厚さ５～20cmの板状の石を広口積みに立て並べている。この基底石は，北壁中央の２個が僅かに地山を掘り込んで据えられている他は掘方がなく，地山上あるいは床面を形成するために入れた厚さ５cmほどの暗赤褐色粘質土の上に据えている。各壁は北が５枚，南が４枚，東が２枚，西が１枚で構成されている。南北壁と西壁の後ろ側には，同じく広口積みで更に１列立て並べているが，内側に立てた石の隙間を塞ぐように配置したことが窺える。北が５枚，南が６枚，西が２枚の石を使っている。四壁の位置関係をみると，西壁は南北壁に挟まれる形となり，東壁は南北壁の東端小口部分を覆うように配している。この際，北壁の長さを南壁と同じになるように外側の石で調整している。南北壁を比較すると，南壁は内側に４枚の大きな石を使っているのに対して北壁は東側の石が特に小さくなっており，内側の石では南北壁の長さが合わず，北壁外側東端の石の小口部分で長さが合っている。このことから，石室は西壁の石を最初に置き南壁から北壁の順でそれぞれ西側から並べる。更に，南北壁と西壁の裏側の石を内側と同じ順序で置き，最後に東壁を据えたと考えられる。２段目以上は，一辺25～75cm，厚さ５～20cmの偏平な角礫を小口積みあるいは長手積みにしている。１段積むごとに，高さを揃えようとしたことが窺える。石室の高さは，最も残りの良い東壁で５段残っており，75cmを測る。

石室各壁の傾きは，南北壁が内側に大きく傾いているのに対して，東西壁はほぼ垂直で若干内傾する程度である。内部の木棺が腐食・倒壊するとともに，元来個別の掘方を持たず不安定であった基底石が土圧に押されて大きく内傾したと思われる。石室の裏込めには，前述の通り基底石の後ろに更に１列板石を立て並べただけで，それらの石を押さえる石は見あたらず土砂だけで埋めており，版築などの作業は行っていない。

なお，東壁最上段の石はその下の段の石よりも大きく，南北壁にも掛かっているため天井石である可能性がある。床面からこの石の下端までの高さは65cmである。

遺物は，石室床面から鉄製品（剣・槍・斧・鑿・用途不明鉄製品）各１点が出土した。そのうち剣・槍・鑿は石室北壁から約10cm内側で，石室の長軸に平行してほぼ直線的に並んでいた。斧・用途不明鉄製品は石室南壁から約10cm内側に入った，頭位と思われる位置のすぐ西側で，固まって出土した。また，石室北側から出土した遺物は，東から槍，鑿，剣の順に並んでおり，剣・槍は切先を東に向けていた。剣の西側には長さ約30cm，幅２～３cmの赤と黒の漆膜の痕跡が残っており，槍の柄と思われる。槍の切先から漆膜西端までの距離は，1.35mである。しかし漆膜の痕跡は，床面の土砂に染み込んだ状態であり，更

に長かった可能性もある。

遺物と石室の壁との間が約10cmの幅で開いており，これらの遺物をその内部に納めた木棺の棺材の厚さがほぼこの値を示すものと思われる。このことから，木棺の規模は内法で長さ約2.1m，幅約0.6mと推定される。

出土遺物

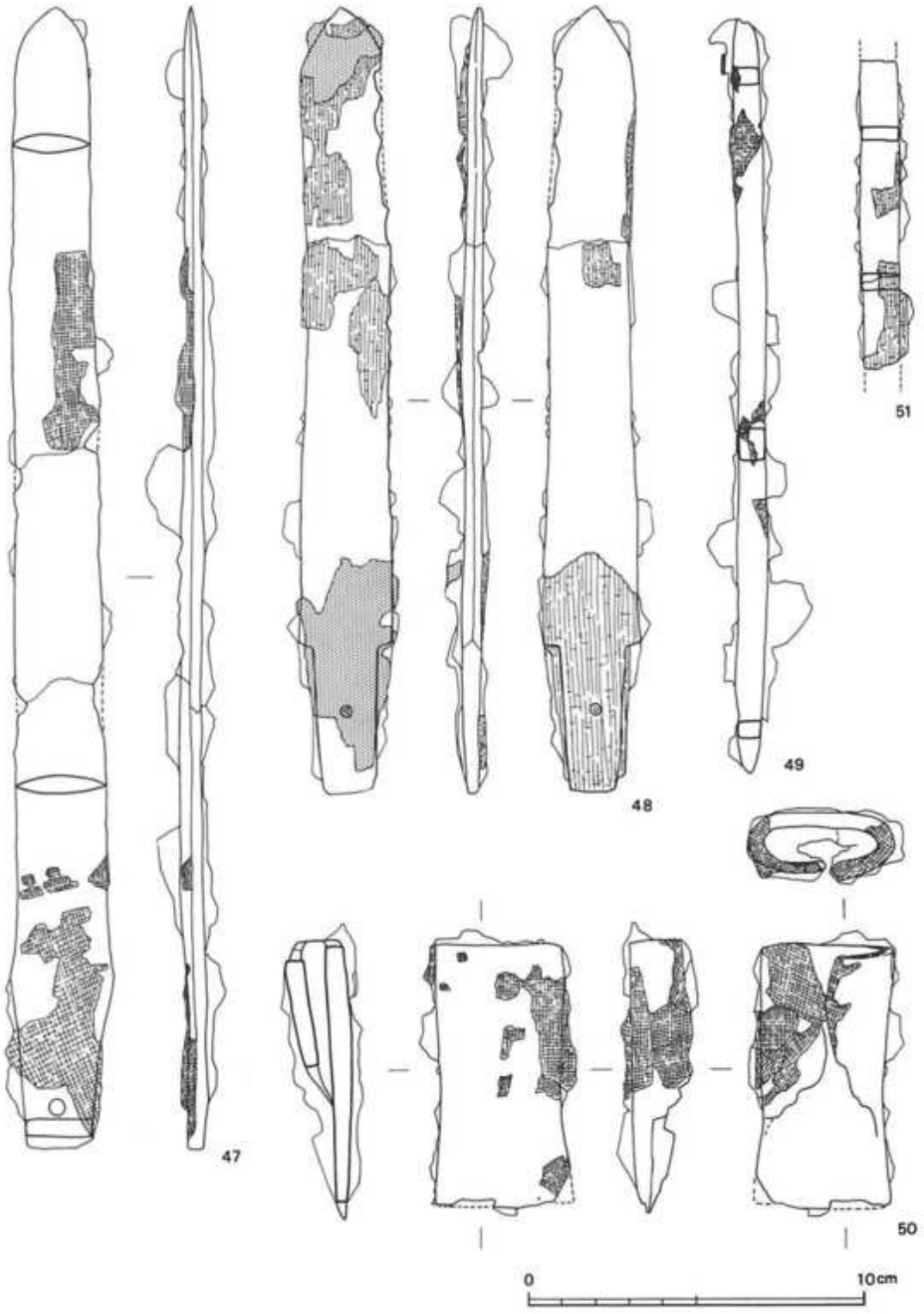
鉄製品（第1-15図，図版1-27）

剣（47）　一部欠損するがほぼ完形である。錆化が進み，全体的に表面が剝離している。全長33.8cm，刃部の長さ28.7cm，茎部の長さ5.1cmである。刃部の幅は，切先から4cmの位置で2.3cm，同じく23cmの位置で2.8cm，茎部の幅は2.0cmである。切先は鈍く丸みをおびる。刃部は直線的で，切先から26.5cmの部分から関に向かってやや外反気味に幅を広げる。関部は，直角ではなく緩く内湾気味に茎部に続く。断面形は刃部がレンズ状，茎部が長方形である。厚さは刃部で0.6cm，茎部で0.5cmである。茎部には，下端から1.3cmのところに径0.5cmの目釘穴がある。刃部と茎部の一部に平織りの布片が付着しており，茎部の布片の下には木質が僅かに残っている。また刃部には赤と黒の漆が所々に残っており，漆塗りの鞘に入っていた可能性もある。

槍（48）　完形であるが，全体的に錆化が進みかなり表面が剝離している。全長23.5cm，刃部の長さ19.1cm，茎部の長さ4.3cmである。刃部の幅は，切先から10.5cmの位置で2.4cm，茎部の幅は，上端で1.8cm，下端付近で1.3cmである。切先は鋭く，刃部は切先から2.5cmの位置から直線的に伸びる。関はやや鈍角に開く。断面形は，刃部がレンズ状，茎部が長方形である。厚さは，刃部，茎部とも0.5cmである。茎部には，下端から2.4cmのところに，径0.3cmの目釘穴があり，柄は呑口式である。柄と刃部に木質が残っており，その一部に黒漆が付着している。漆塗の木製の鞘に入り，前述の通り漆塗の柄を装着した状態で副葬されたと考えられる。

鑿（49）　ほぼ完形であるが，全体的に錆化が進んでいる。全長22.5cm，刃部の長さ3.2cm，首の長さ14.4cm，茎部の長さ4.9cmである。断面形は，刃部と茎部が長方形で，首中央部が正方形である。厚さは，首中央部が0.9cm，茎部が0.5cmである。刃部は片刃で，刃部の幅は0.9cmである。茎部側の先端から4.9cmまで木質が付着しており，刃部から首にかけて平織りの布片が付着している。

斧（50）　刃部の一部を欠失した有袋鉄斧である。全長8.2cm，刃部の残存幅3.5cmである。刃部の幅を復元すると4cmである。袋部の内法は長径3.4cm，短径1.1cm，袋部上端での幅は3.8cmで，断面形は楕円形である。刃部先端から2.8cm付近が最も幅が狭く，そこから刃



第1－15図　第1号古墳第2主体部出土遺物実測図（1：2）（アミ目は漆膜）

部先端にむけて「ハ」字状に広がる。肩部はない。全体に平織りの布片が付着し，袋部を覆うようにも残存するため，斧に柄を付けず布でくるんで副葬したと考えられる。

用途不明鉄製品（51）　両端を欠失しており，残存長9.3cm，幅1cmである。断面形は長方形で，厚さ0.5cmである。一部に木質が付着している。用途は不明であるが，鑿の可能性もある。

3）中世の遺構と遺物

石積み基壇

ＳＸ１（第１-16図，図版１-21）

ＳＸ１は，第１号古墳の北側約８ｍにある石積み基壇である。北向きの緩斜面を東西11.3m，南北4.7mの範囲で掘り込んで不整長方形の平坦面を造る。平坦面の規模は，東西9.7m，南北2.9mで，深さは南側で75cmである。

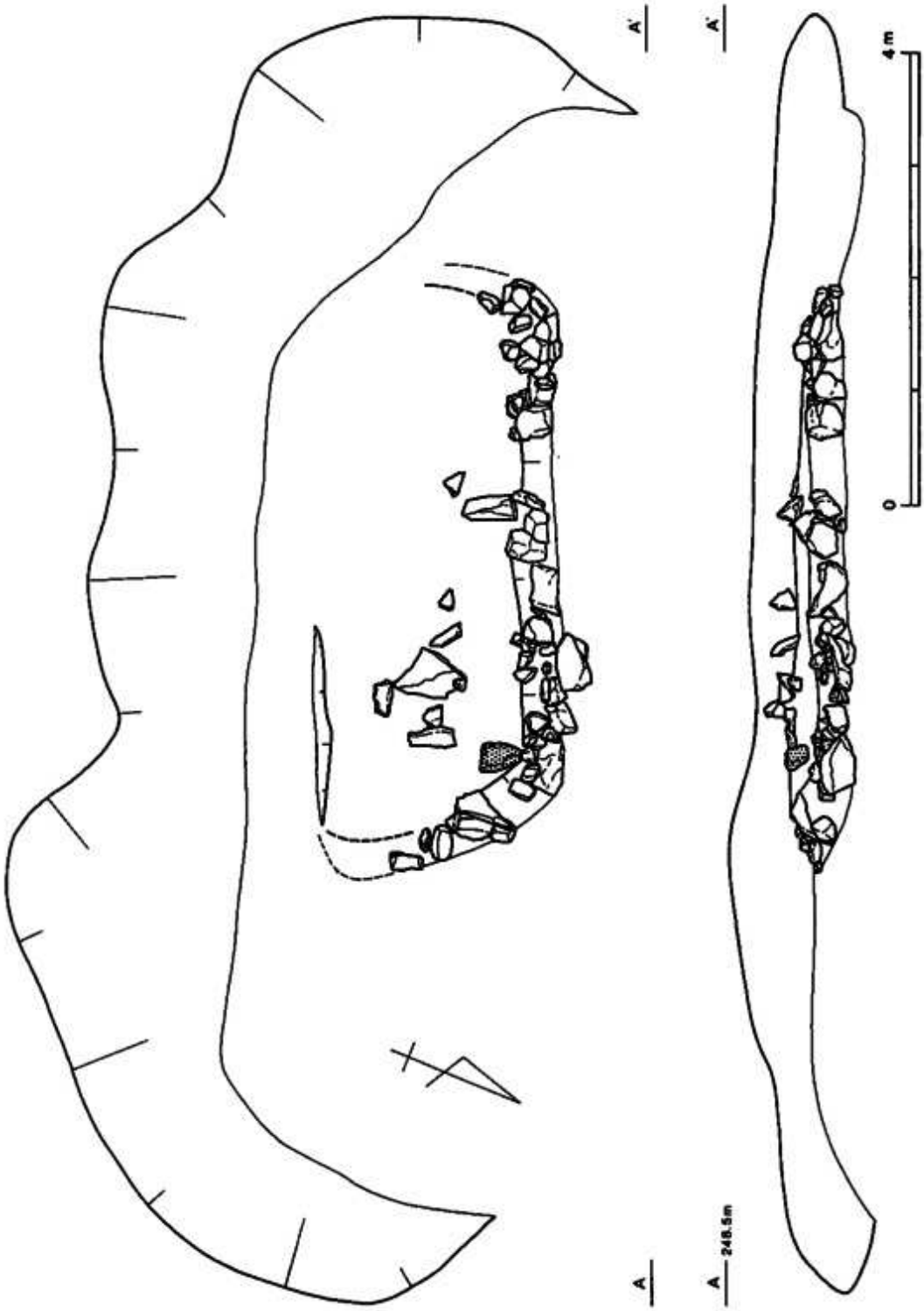
この平坦面上に，10～50cm大の亜角礫を２～３段積み，直線的に並べながらその内側に淡黄褐色土を入れて基壇を築いている。基壇の平面形は不整長方形で，規模は南西側を削平されているが，東西5.2m，南北2.2m，高さは北東隅で40cmである。石積みは，北面と東面が残っており，北面の長さ約4.5m，東面の長さ約1.6mである。基壇北辺の東側隅から約１ｍ付近には，50cm大の板状の石を置いた階段状の施設がある。基壇上面には角礫が散在しており，墓標石に用いられた可能性が考えられるが，埋葬施設などの掘り込みは検出できなかった。

遺物として，基壇上面の北東隅で前に倒れた状態で出土した石造物（石仏）１体がある。

出土遺物（第１－17図）

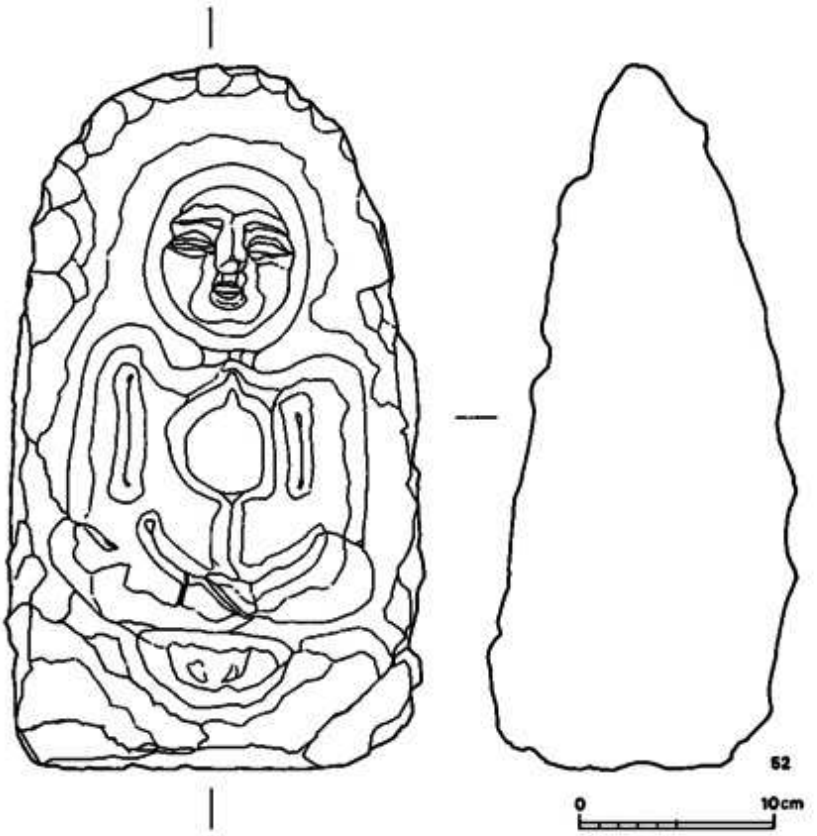
石造物

石仏（52）　高さ36.1cm，最大幅21.2cm，厚さ14.8cmで蓮座から基部のあたりを僅かに欠失している。座像で，像高24.0cm，像の幅16.6cm，蓮座の高さ4.0cmである。像・蓮座とも浮彫りである。光背は舟形光背を意図していると思われるが，光背頂部は丸くおさめる。石仏全体を光背頂部を中心とした縦断面三角形状に仕上げている。石仏の基部は粗く切断している。調整は、表面の像の周囲をわずかに彫り下げ，厚みを強調している。光背の縁辺部分は粗いケズリを施している。中間部分は丁寧なタタキである。裏面には一部に自然面を残すなど全体的に幅３cmの粗いケズリである。手・足の組み方は明らかではない。蓮座部分も表面が欠失しており，蓮弁の数は不明である。像の胸部中央を彫りくぼめているが，宝珠を表したとも考えられる。表面の風化が進んでいる。材質は花崗岩である。宝町



第1－16図　ＳＸ１実測図（1：60）（アミ目は，石造物）

時代頃に造られたと思われる。



第1－17図　SX1出土遺物実測図（1：4）

（4）小結

才が迫遺跡の調査では，当初確認されていた才が迫第1号古墳のほか，弥生時代後期の竪穴住居跡1軒（SB1），中世の石積み基壇1基（SX1）を検出した。ここでは，SB1と特に才が迫第1号古墳を中心に，その特徴などを述べ，まとめにかえたい。

弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構はSB1である。本遺跡の住居を造った人々は，水田耕作を生活基盤にしていたと考えられる。遺跡北側の平野部は，かなり多くの人口を支えられるだけの広さがあるものの，本遺跡はそれに見合う規模の集落ではない。尾根の幅が狭いという立地上の制約があるにもかかわらず，この地に住居を営んだのは，弥生時代後期を中心とした東広島ニュータウン遺跡群[1]などから推察できるように，人口の増加に伴って新たな耕作地を開拓する必要に迫られ，本遺跡北側の平野部や，周辺の尾根の間の僅かな土地を耕作地と

したためであろう。次にＳＢ１は，埋土の断面観察から第１号古墳よりも古いことが明らかであるが，埋土に一度に埋まったような状況が見られることから，第１号古墳築造時に住居跡が完全に埋まらず残っており，墳丘盛土を行う際に埋められた可能性もある。

弥生時代の遺物は，ＳＢ１内出土土器（１～３）と，ＳＢ１周辺出土土器（４～７），第１号古墳溝出土土器（８）がある。１は，口縁端部に凹線を残すことから後期前葉，２・３は底部が小さく，やや体部が張ることから後期後葉と考えられる。４～７は，甕の体部が張らず寸胴気味であることから後期中葉と考えられ，その出土位置からみると，ＳＢ１から転落したものと思われる。８は，刻み目を施した貼り付け突帯を１条巡らしている。口縁部の破片であるが，弥生時代中期に属すると考えられる。

従って，ＳＢ１は後期中葉頃建てられた後，後葉まで存続していたと考えられる。また溝出土土器は，端部が磨滅していないため，本遺跡が立地する尾根にこの時期の住居跡などの遺構があると思われる。広義の西条盆地では弥生時代中期に属する遺跡が確認された例は少なく，特に白市盆地南側丘陵では，宮領１号遺跡で住居跡などの遺構が検出されているだけである。この点で，本遺跡における弥生時代中期の土器片の出土は，西条盆地での当該期の集落の広がりを推測するうえで重要と思われる。

古墳時代の遺構と遺物（才が迫第１号古墳）

立地について　才が迫第１号古墳が，狭義の西条盆地の北端から白市盆地ほぼ全体を見渡すことができる好位置にあることは，より広い地域に古墳の存在を知らしめ誇示しようとした現れであり，古墳築造に際してより広い範囲にその新進の墓制を示すことによる政治的な意図が強く働いていたと思われる。西条盆地で本古墳に後出する首長墓と考えられている古墳でも同じことが言えるが，古墳から見える範囲についていえば本古墳の方が広い。

墳丘・溝について　本古墳の墳丘は，東西にやや長い方形である。墳丘南東側に厚さ約15cmの盛土が残っていたが，大部分の盛土は流出したと思われる。墳丘南側には直線的な溝を掘り込み，北側と東西両側は丘陵斜面を削って平坦面を造り出すことによって墳丘裾部としている。

ここでは，墓域を区画する溝のあり方について，本古墳に先行する周辺の弥生墳墓と比較してみたい。

西本遺跡Ａ地点[2]の「周溝墓状遺構」では，斜面上側にのみ「Ｌ」字状の溝を掘り込んでいる。槇ヶ坪２号遺跡[3]では，円弧状の溝で区画した墓域をもつ墳墓群があるが，その区画内の中心には，墓群中，規模や構造で優越性の際立った埋葬施設があり，この円形区画が

特定個人のための墓域区画として成立したことが推定される。浄福寺２号遺跡[4]第３墳墓群は，「L」字状や弧状の溝を斜面上方に掘り込んでいる。この墳墓群は，箱形石棺など合計52基の埋葬施設からなるが，溝は墳墓群の中の小単位を区画するためのものと考えられている。これらの弥生時代の例は，いずれも墓域を区画するという点においては本古墳の溝と何ら変わりはないが，完全に墓域を取り囲むような形にはなっておらず，墓域の内外を隔離し墓域としての範囲を外界から遮断するという意味において，古墳の溝とは異なる。

本古墳では地山整形と盛土を行うことにより，墳丘をより高く見せる視覚的な効果を考えて築造され，築造当時には尾根上に台形の墳丘が屹立しているように見えたと思われる。即ち，墳丘を方形に整形し，高く盛り上げるといったことが意識的に行われ，明確に墓域を設定していることから，すでに古墳の墳丘という概念が定着していることが窺える。

埋葬施設について　本古墳では，異なった構造の２基の竪穴式石室を検出した。それぞれの石室の詳細についてはすでに述べたが，第１主体部の石室は，板状の亜角礫を垂直からやや上開きに積み上げて四壁とし，石室床面に棺台石を配している。第２主体部の石室は，板状の石を広口積みで内外２列に立て並べた後，側壁の２段目以上は角礫を小口積みあるいは長手積みで積んでいる。この２基の竪穴式石室は，石室の規模から，「竪穴式石室A群[5]」あるいは「短小型[6]」とも呼称される石室の範疇でとらえられる。

このうち第２主体部は，当地域における弥生時代以来の埋葬施設である箱形石棺と竪穴式石室の要素を併せ持ったものと言うことができよう。第２主体部に類する石室は，以前からその特徴的な石室構造が注目されており，「全体的に箱形石棺の構築方法と共通性があり，その系統上にあるものと思われる[7]」とか，「箱形石棺的な要素が強い[8]」などの分析が行われている。第２主体部に類似する石室を有する古墳を西条盆地内で挙げると，三ツ城第２号古墳[9]，森信第10号古墳[10]がある。三ツ城第２号古墳の埋葬施設は，石材のほとんどが失われているが，板状の石を広口積みにした側壁の一部が残っており，内外二重になっている。森信第10号古墳は，四壁とも最下段の石は板石を広口積みにしている。豊ヶ崎古墳[11]でも小規模ではあるが同様の石室が確認されている。

三ツ城古墳群の第１号古墳第１号埋葬施設は，「箱形石棺を内包する割り石の小口積みないし横積みの竪穴式石槨」，あるいは「一見竪穴式石室状の形態」で，第２号埋葬施設は「２重の箱形石棺とでも言うような竪穴式石槨」と観察されており，第３号埋葬施設も第２号埋葬施設の「２重の箱形石棺」の内側だけ造ったような構造である[12]。近年行われた発掘調査で，第２号古墳が第１号古墳に先行して築造されたことが確認された[13]が，これら第１号古墳の３基の埋葬施設は，先に築造された第２号古墳の埋葬施設から発展した形態

と見ることが可能である。以上のような構造上の観察からみると，第２主体部のような埋葬施設は，才が迫第１号古墳第２主体部→三ツ城第２号古墳→三ツ城第１号古墳→森信第10号古墳→豊ヶ崎古墳のような変遷で把握できそうである。

次に，埋葬施設の築造順について考えてみると，２基の石室掘方がほぼ墳丘頂部中央に並列していることから，古墳築造当初から２基の埋葬施設を設けることが想定されていたと考えられる。また２基の埋葬施設の，掘方西側の上端が直線的に並ぶことから，墓壙が並列するよう意図したのではないかと思われる。掘方の切り合いがなく，墓壙を掘りこんだ高さも明らかでないため，２基の築造順は石室の構造や遺物などから推定するほかないが，石室でみると，規模は明らかに第１主体部が大きく，掘方も深い。また，第１主体部が尾根の上方側に位置することから，第１主体部の構築に主眼を置いていたと思われる。このことから，第１主体部が第２主体部より先行して構築されたと判断できるが，両者の時期差は極めて小さいと考えられる。

遺物について　埋葬施設内出土の遺物は，第１主体部が武器と装身具，第２主体部が武器と農工具で構成されている。このうち第１主体部では玉類が，第２主体部では５点の鉄製品が原状を保っていると思われる。２基の埋葬施設とも被葬者の頭位は東であったと考えられる。第１主体部では，玉類はほぼ被葬者の右腕あたりに位置すると思われる。径約30cmの円周上に点在することから，埋葬時には腕飾り状であったのであろうか。第２主体部の鉄製品は，被葬者の頭部のすぐ左側に斧と不明鉄製品がある。このうち斧は，袋部が布で覆われていたと考えられるので，柄を装着せず全体を布でくるんでおさめたと思われる。ついで，頭部のすぐ右側に槍の切先があり，右手のすぐ横あたりには剣が切先を頭部側に向けて置かれていたと想定される。また槍の柄も，長さが約1.1m以上あったと思われるので，柄の中ほどからやや下にかけての部位が右手横あたりに位置することとなろう。このように，武器は生前の使用状態を復元する位置にあると思われるのに比べて，農工具のなかでも斧は柄がなく，特別に副葬された感があるが，いずれも頭部に近い位置にあるということが言える。このように武力の象徴である武器と，日常生活に密着した農工具とでは，埋葬時における扱いが異なっているということがわかる。

また，２基の埋葬施設の副葬品の構成の違いは，埋葬施設の築造が極めて近接した時期に築造されたと考えられることから，時期的な要因よりも各被葬者の社会的地位やその置かれた政治的状況をより大きく反映していると思われる。

出土遺物の中で特記すべきは，第１主体部出土の鉄剣である。その刃部先端が「剣菱形」となった特異な形状をとり，X線透過撮影[14]による観察においても表面観察と同様の結果と

なったのであえて「剣菱形」とし報告する。この形状では，実用には不向きであると思われるため，武力を権威づける象徴としての役割を持っていたと考えられる。

なお，剣と槍の識別は，拵と柄の漆膜の有無によって区別される[15]。本古墳の場合，第1主体部出土の28は，目釘穴がないため柄を装着した際に不安定になることを，刃部の2/3におよぶ長さの茎部で補っていたと考え剣とした。第2主体部出土の47・48は，48が呑口式の拵を持ち，漆塗りの柄が着いていたことから槍とし，47が刃部が長いことと目釘穴があることから剣とした。しかし47の場合，拵の部分に布片が付着しておりまた一部表面の剥落も著しいことから，槍の可能性もある。

土器については，墳丘南側の溝出土土器群（9～28）がある。この土器群の中で，9・11・23・27は特に精選された胎土を用いており，調整も丁寧であるため，他地域から搬入された土器と思われる。この土器群の時期は，布留式期I[16]に相当すると考えられる。また，この中には甕が含まれないが，甕を日常的に使用する器種で祭器としての性格がないと考え，供献土器から除外したと思われる。

土器群の中に含まれる脚付壺は類例が少ないが，兵庫県多紀郡西紀町の内場山城跡[17]で検出された墳丘墓から出土した土器の中に「台付壺」がある。本古墳出土のものに比べて体部がやや丸いものの，口縁部に円孔を開けるなどほぼ類似していると言える。また，鳥取県米子市の青木遺跡[18]のＨＳＸ01周溝内から出土した壺は，体部が楕円形を呈し，低脚坏に近い脚台が付いている。時期は青木Ⅶ期古を下限と考えられており，本古墳と時期的に近いと思われる。これらの例と，本古墳出土の土器との関連は不明であるが，いずれの場合も供献土器と考えられ，日常的に使用する器種ではないようである。また，本古墳出土の脚付壺は搬入されたと考えられるため，その産地を考える上でも重要である。

ところで，西本遺跡A地点の「周溝墓状遺構」出土の脚付長頸壺は，体部が「ソロバン玉」状に大きく横に張る点で，本古墳出土の脚付壺と類似する。時期は，弥生時代中期に属すると考えられているが，本古墳出土の脚付壺は，このような形を祖形にして生まれた可能性もあろう。

第1－18図
第1号古墳第1主体部出土鉄剣X線写真

被葬者について　本古墳の被葬者間の関係は，当初から2基の埋

葬施設を設けることを想定しているなど，非常に密接であると言える。

2基の石室内に副葬された遺物は，内容的にやや異なるものであった。これは時期差というよりも被葬者の社会的地位やその置かれた政治的状況の差によるものが大きいと考えた。西条盆地で本古墳と同時期と思われる古墳は現在までのところ知られていないため比較できないが，第1主体部には異形の剣，第2主体部には剣，槍を納めていた。古墳出現期には，「ヤリ」は棺内に副葬され，被葬者自らの「武力」を象徴しうるものであり，ヤマト政権により政治的に整備された古墳祭式の中で重要な役割を担っていたと考えられており，「ヤリ」の出現をもって，明瞭に前時代と隔絶すると考えられている[19]。第2主体部でも，遺物は棺内に副葬されていたと考えたが，このことから，本古墳の被葬者も畿内の政権と密接な関係を持つとともに，当地域の首長権を有した人物でそのことを畿内の政権から認められた結果，剣，槍を持つに至ったと言うことができよう。

まとめ

才が迫遺跡の調査では，特に才が迫第1号古墳が注目される。本古墳は，当該地域にとどまらず広く出現期の古墳や，さらには古墳時代のはじまり及びその社会などを考えるうえで重要な位置を占めると思われる。

本古墳の築造時期は，溝出土の土器群から4世紀初め頃と推定されるが，庄内式期Ⅳ[20]で消滅すると考えられている「庄内系有段高杯」を含むことからさらに遡る可能性もある。溝出土の土器群は，元々墳丘上に置かれていたものが墳丘の崩落に伴って溝内に転落したと推定される。しかし，溝の南西隅でまとまって出土したことから，溝がある程度埋まった段階で意図的に置かれたようにも見える。このように考えると，溝出土の土器群は二人目の被葬者である第2主体部の人物に対して供献されたことにもなり，第1主体部の被葬者の埋葬された年代，すなわち古墳築造年代はさらに遡ることとなろう。

他地域からの搬入品と考えた脚付壺や高杯も，その生産地を限定するには至らなかったが，類似する土器が出土した内場山城跡や青木遺跡の例などは，その搬入元を考える上で示唆的であろう。第2主体部の石室についても，第1主体部の構築以後，箱形石棺との折衷形として生まれたものか，あるいは，土器の例の如く他地域から導入されたものかについても明確にはできなかった。本古墳の被葬者は，剣，槍など畿内の政権との密接な関係を窺わせる遺物を副葬しており，これらは畿内の政権から被葬者に対して地域支配のための権威付けの意味で与えられたものと考えられるが，このことは言い替えれば，4世紀頃に当地域に畿内の政権の影響力が及んだということを示すものであろう。

ところで，本古墳から約25km西側の太田川下流域には，弥生時代末からの首長墓の系譜

がみられるが，本古墳築造時期に前後するこれらの墳墓や古墳との関係も今後明らかにしていかなければならない。例えば，西願寺北遺跡では石室構築の際，壁の裏の控え積みがほとんどなく，壁が垂直からやや上開きになる点[21]で，本古墳第1主体部と共通点がある。また，西願寺遺跡群C地点第1号竪穴式石室では，側壁の最下段と小口壁の2段目までの石材を広口積みにし，その上に河原石を積み上げているが，石積みの手法が箱形石棺に類似していることが指摘されている[22]。この点は，本古墳第2主体部の石室構築方法と同じである。これらのことから，この地域が竪穴式石室構築方法の導入元である可能性もあろう。

これらも含めて，今後調査が進む中で本古墳の新たな位置付けが行われることもあろうが，当地域で最も古い時期の古墳であり，その後の首長墓も含めた古墳の築造に大きな影響を与えたと言っても過言ではあるまい。

最後に，本古墳の築造をもって西条盆地に取り入れられた竪穴式石室は，その後どのような変遷をたどるのか概観してみたい。

4，5世紀の例は少ないが，6世紀代になって各所に竪穴式石室の影響を受けた石室が出現する。槇ヶ坪3号遺跡（A地区）SK1[23]，蔵田3号遺跡SK2[24]，槇ヶ坪第4号古墳[25]の埋葬施設は，その報告書では「箱形石棺」と呼び，その規模から石棺と考え，箱形石棺の一類型とした[26]。しかし，その壁の構築方法は本古墳と共通する。「箱形石棺」が，箱形石棺から直接的に発生したというより，竪穴式石室の石室構造があったことから出現したと考え，本古墳から続く系譜の一端に載ると考えられる。

これとは別に，主に6世紀後半に出現する「横穴式石室のような石積みの竪穴式石室[27]」，あるいは「横穴式石室と竪穴式石室の折衷様式とも考えられる[28]」竪穴式石室がある。横穴式石室の石組みに似るが，石を小口積みする点は竪穴式石室の石組みと変わらず，このことから横穴式石室の影響を受けているものの基本的には竪穴式石室の系譜に載ると考える。このタイプの石室を有する古墳は，鏡千人塚遺跡[29]ST01，宗近柳国第1号古墳[30]（賀茂郡黒瀬町宗近柳国），古市古墳[31]，狐が城古墳[32]である。前述の箱形石棺折衷形の石室は主に白市盆地にあり，横穴式石室の影響を受けた石室は，狭義の西条盆地に分布するという地域差があることがわかる。しかし最近の調査で，志村西第1号古墳[33]や志村第8号古墳[34]のような小型の横穴式石室の存在も確認されている。このような小型の石室が，規模の大きな石室から続いて出現してくるとするならば，系譜的には横穴式石室の延長であり竪穴式石室とは一線を画して考えなければならない。これまで竪穴式石室とされてきたこれらの例についても再考の余地があると思われる。またこの他に，第2主体部に類似したと思われ

る石室構造をとる鍵向山第2号古墳[35]や三ツ城第3号古墳[36]などは，規模の点から石室とは言い難く，竪穴式石室の構造を基本とした箱形石棺と考えられる。

参考文献

脇坂光彦・小都隆『探訪・広島の古墳』　芸備友の会　平成3（1991）年

藤野次史・道上康仁「安芸南部地域（西条盆地周辺）」『広島県の弥生土器』　広島県立歴史民俗資料館　昭和60（1985）年

（註）

（1）　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅰ　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第83集　平成2（1990）年

（2）　広島県教育委員会『西本遺跡群－A・B・C地点－』　昭和51（1976）年

（3）　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「槇ヶ坪2号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅰ　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第83集　平成2（1990）年

（4）　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅱ　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第97集　平成4・5（1992・1993）年

（5）　小林行雄「竪穴式石室構造考」『紀元二千六百年記念史学論文集』　京都帝国大学文学部　昭和16（1941）年

（6）　都出比呂志『竪穴式石室の地域性の研究』　大阪大学文学部国史研究室　昭和61（1986）年

（7）　東広島市教育委員会『森借第10号古墳発掘調査報告書』　東広島市教育委員会文化財調査報告第15集　平成2（1990）年

（8）　広島県教育委員会「豊ヶ崎古墳」『賀茂工業団地内遺跡発掘調査概報』　昭和47（1972）年

（9）　広島県教育委員会『広島県文化財調査報告第一輯（人文編）三ツ城古墳』　昭和29（1954）年
　東広島市教育委員会『史跡三ツ城古墳保存整備事業第1～5年次発掘調査概報』　東広島市教育委員会文化財調査報告書第14, 16, 17, 19, 20集　平成元～3（1989～1991）年

（10）　註（7）に同じ

（11）　註（8）に同じ

（12）　註（9）に同じ

（13）　石井隆博「三ツ城古墳」『第13期みよし風土記の丘文化財講座⑧速報展記念調査報告会資料』　広島県立歴史民俗資料館・みよし風土記の丘友の会　平成5（1993）年

（14）　奈良国立文化財研究所において撮影した（撮影条件 40 kv, 3 mA, 2.0分, 距離不明, #80）。

（15）　寺沢知子「鉄製ヤリ」『園部垣内古墳』　同志社大学文学部考古学調査報告第6冊　同志社大学文学部文化学科内考古学研究室　平成2（1990）年

（16）　米田敏幸「土師器の編年　1.近畿」『古墳時代の研究』第6巻　土師器と須恵器　雄山閣出版　平成3（1991）年

（17）　中川渉「内場山城跡（下層台状墓）」『第24回埋蔵文化財研究集会　定型化する古墳以前の墓制』第Ⅱ分冊　近畿，中部以東篇　埋蔵文化財研究会第24回研究集会世話人　昭和63（1988）年
　兵庫県教育委員会「内場山城跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和60年度　昭和63（1988）年
　兵庫県教育委員会中川渉氏からご教示をいただいた。

（18）　青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅲ　A・B・E・H地区　鳥取県教育委員会　昭和53（1978）年

（19）　註（15）に同じ

（20）　註（16）に同じ

(21)　妹尾周三「広島県太田川下流域の竪穴式石室」『古文化談叢』第23集　九州古文化研究会　平成２（1990）年

(22)　広島県教育委員会「Ｃ地点第１号竪穴式石室」『西願寺遺跡群』　昭和49（1974）年

(23)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「椋ヶ坪３号遺跡（Ａ地区）」『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅰ　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第83集　平成２（1990）年

(24)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「蔵田３号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅰ　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第83集　平成２（1990）年

(25)　註（23）に同じ

(26)　註（24）に同じ

(27)　東広島市教育委員会「助平古墳」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ　東広島市教育委員会文化財調査報告書第21集　平成４（1992）年

(28)　広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「総括」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅰ）　昭和58（1983）年

(29)　広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「銚千人塚遺跡の調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ　昭和57（1982）年

(30)　広島県教育委員会「宗近柳国古墳」『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』　昭和48（1973）年

(31)　広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「古市古墳」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅰ）　昭和58（1983）年

(32)　広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「狐が城跡」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅰ）　昭和58（1983）年

(33)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「志村西古墳群」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅷ）　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第98集　平成４（1992）年

(34)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「志村遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅷ）　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第98集　平成４（1992）年

(35)　広島県教育委員会「鏡向山第２号古墳」『賀茂カントリークラブゴルフ場内遺跡群発掘調査報告』　昭和50（1975）年

(36)　註（９）に同じ

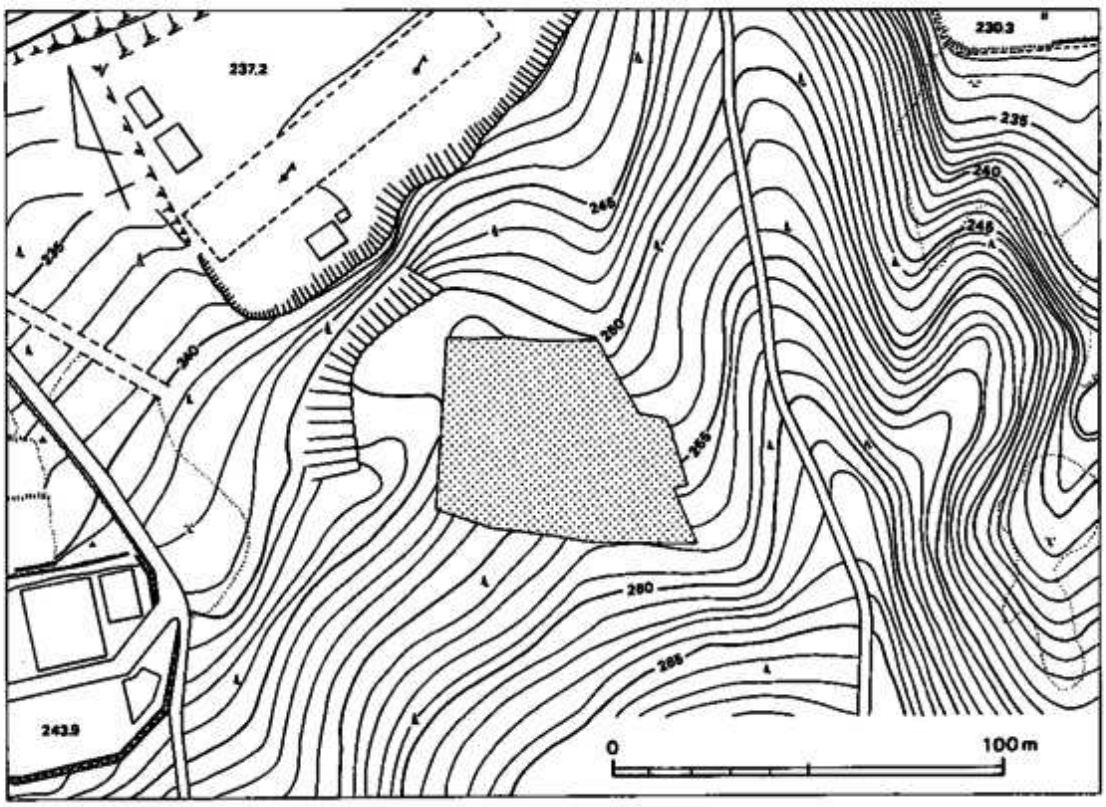
2．宮領1号遺跡

（1）位置と現状（第2－1図，図版2－1）

宮領1号遺跡は，東広島市高屋町大字宮領1053－1外に所在する。

本遺跡の南側には，東西に連なる標高約524mの白鳥山山地が存在している。この白鳥山の北側や西側には山麓緩斜面が広がっているが，本遺跡はこのなだらかな北向き斜面（標高250m付近）に位置している。この山麓緩斜面には数多くの遺跡が分布しており，本遺跡の周辺では宮領2号遺跡，白鳥石棺群，大谷古墳群，別所古墓群等が存在している。

本遺跡の北側には沼田川の支流である入野川が東流している。この周囲には谷底平野がよく発達しており，本遺跡の北東側や北西側には，谷が入り込んでいる。これらの谷の水田との比高差は約30mである。遺跡の現状は山林である。



第2－1図　宮領1号遺跡周辺地形図（1：2,000）（アミ目は調査区）

（２）調査の概要（第２－２図）

調査はまず表土を重機で排除し，その後，人力で遺構の検出を行なった。

調査区の設定は丘陵の尾根線上に基準線を設け，これを10mごとに直交する線で区切って南東端から北西端に向かってＡ－１区～Ｇ－６区とし，調査を行なった。本遺跡の基本層序は上から表土・黄褐色砂質土・暗茶褐色砂質土・淡黄褐色砂質土（地山）で，遺構はこの地山面で確認した。調査区の東側には溝状の細い谷筋が存在し，礫の落ち込みが認められた。また，調査区の西側や，ＳＢ２の北東側の地山層には，多くの礫が混在していた。

調査の結果，検出した遺構は，弥生時代の竪穴住居跡５軒（ＳＢ１～５），掘立柱建物跡１棟（ＳＢ６），溝状遺構２条（ＳＤ１・２），柵列４条（ＳＡ１～４），性格不明遺構９基（ＳＸ１～９）である。遺構は調査区のほぼ中央部の尾根線上に存在し，調査区の北側や南側にも延びている。竪穴住居跡は２本柱のものや８本柱のものがあり，付属施設にベッド状遺構を伴うもの（ＳＢ１）や，建て替えを行なっているもの（ＳＢ２）がある。掘立柱建物跡（ＳＢ６）は１間×２間で，竪穴住居跡（ＳＢ４）と重複している。このほか，調査区の北側では等高線に沿って，柵列４条を確認した。遺物は各遺構から土器（壺・甕・鉢・高杯），石器（石鏃・スクレイパー・敲石）が出土したほか，調査区内から磨製石斧が出土している。

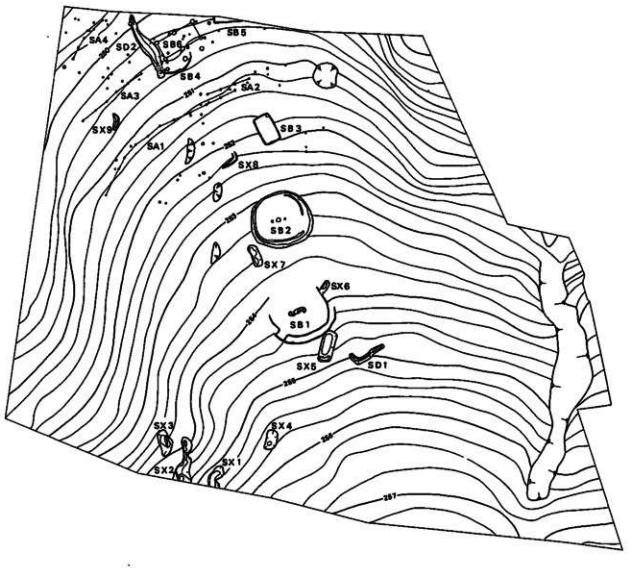
（３）遺構と遺物

（Ａ）竪穴住居跡・掘立柱建物跡

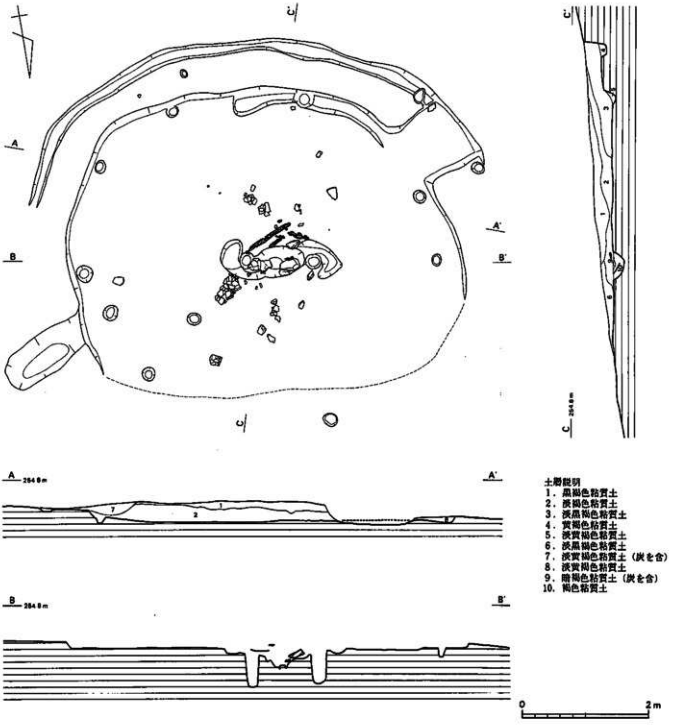
ＳＢ１（第２－３図，図版２－２～４）

調査区のほぼ中央に位置し，ＳＸ５・６と重複している。

住居跡の北側は流失している。また，西側の壁と床面の一部は試掘のトレンチによって削平を受けている。平面形は円形と思われ，規模は径約7.5mである。壁は南側の最も高い所で30cmあり，壁面下には壁溝がめぐる。壁溝の規模は幅15～20cm，深さ５～10cmである。主柱穴は２個で，２本柱構造となる。柱穴の規模は径20～30cm，深さ50～55cmで，柱穴間の距離は1.1mである。また，住居跡の南壁ではベッド状の段を確認した。これは南西側で一端途切れ，さらに西側に続いている。規模は幅80cm，高さ25～30cmである。ベッド状の段には，径15～25cm，深さ10～15cmの柱穴が３個存在する。また，ベッド状の段の内側には幅30cm，深さ約10cmの壁溝が長さ2.5mほどめぐる。また，これに沿って径15～30cm，深さ12～50cmの，９個の支柱穴が存在する。床面のほぼ中央には，長さ75cm，幅50cm，深さ20cmの炉跡と考えられる楕円形の掘り込みが存在する。この炉跡底面は地山の礫



第２－２図　宮領１号遺跡遺構配置図（１：400）



第２－３図　ＳＢ１実測図（１：60）

層で，上面には炭化物を含む暗褐色粘質土の堆積が認められた。炉跡の周辺には，深さ約５cmの不整形な落ち込みが認められるが，この性格については不明である。なお，炉跡周辺の床面から，炭化材が出土している。

遺物は少量で，床面から弥生土器壺・甕（１～３）が出土している。

ＳＸ５・６との新旧関係は，本遺構がＳＸ５・６に後出する。

出土遺物（第２－11図，図版２－19～21）

弥生土器

壺形土器（１）　体部片である。頸部には７条のヘラ描き沈線文がめぐり，その下部には６条の櫛歯状工具による直線文と波状文が交互に３段めぐる。調整は，外面は縦位のヘラ磨き，内面は縦～横位のハケ目である。焼成は良好で，胎土には１mm以下の砂粒を多く含んでいる。

甕形土器（２・３）　２は体部下半を欠失する。口径32cm，体部最大径37.6cmである。頸部は「く」字状に屈曲し，口縁部は強く外反する。口縁端部には３条の凹線文がめぐる。頸部にはヘラ状工具による刺突を施した貼付凸帯が，体部には二枚貝の腹縁による刺突文が３段認められる。調整は，口縁部は内外面とも横ナデ，体部外面は上半が縦位のハケ目，下半が縦位のヘラ磨きである。体部内面は，頸部付近が板状工具によるナデで，それ以下は横位のヘラ磨きである。外面に煤が付着している。焼成は良好で，胎土には１mm大の砂粒を多く含んでいる。３は口縁部片で，口径28cmである。頸部は「く」字状に屈曲し，口縁端部には２条の凹線文がめぐる。頸部にはヘラ状工具による刺突を施した貼付凸帯が認められる。調整は，口縁部は内外面とも横ナデ，体部は摩滅のため不明である。焼成は良好で，胎土には１mm以下の砂粒を多く含んでいる。

ＳＢ２ａ・２ｂ（第２－４図，図版２－５・６）

調査区のほぼ中央に位置し，ＳＢ１の約１m北側に存在する。

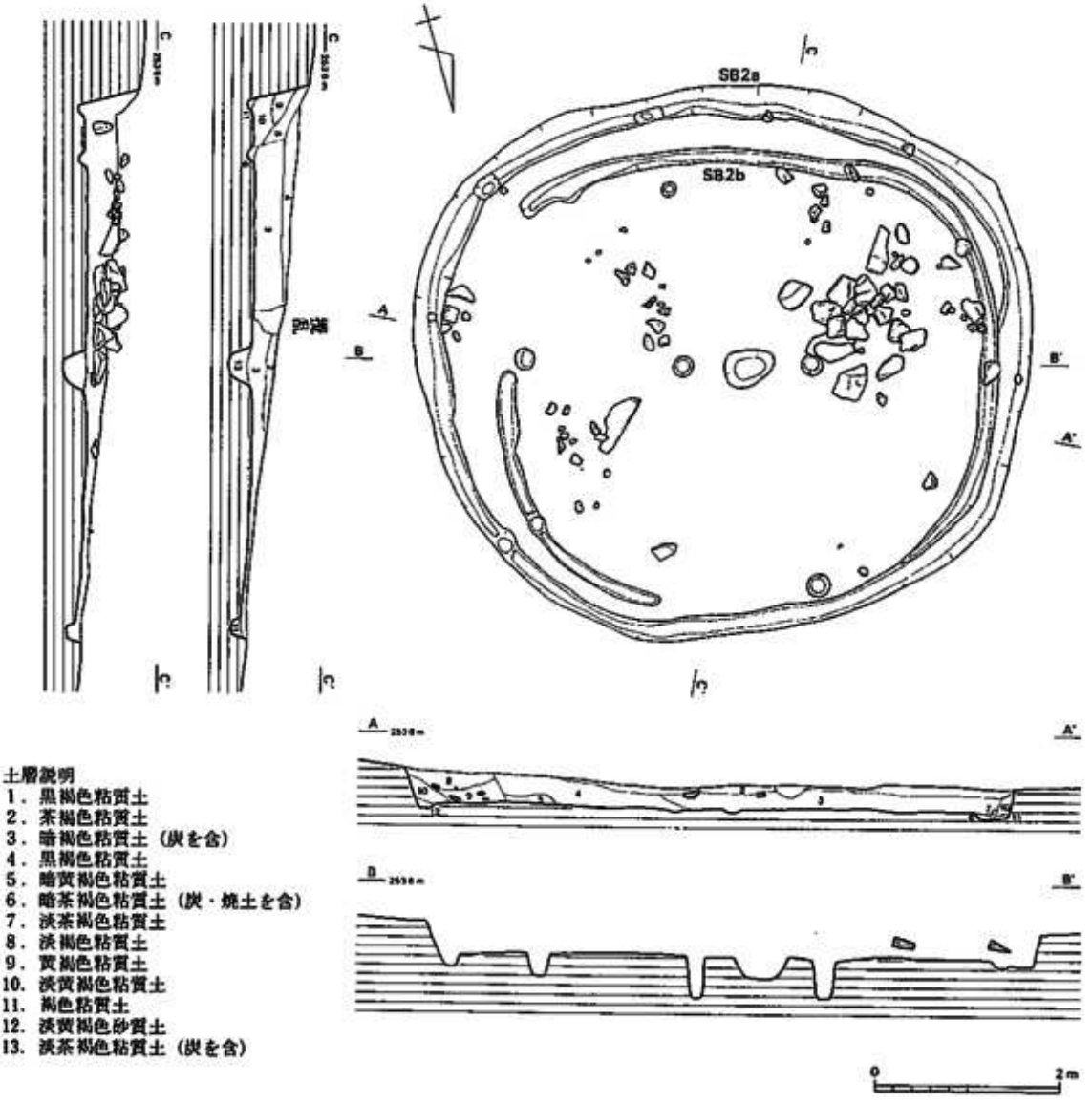
２軒の住居跡が重複しており，埋土の状況から大型の住居（ＳＢ２ａ）から小型の住居（ＳＢ２ｂ）に建替えたことが確認でき，この２軒は床面と主柱穴を共有している。

ＳＢ２ａの平面形は東西に長い楕円形で，規模は長軸6.6m，短軸６mである。壁は南側の最も高い所で70cmあり，壁面下には幅15～25cm，深さ５～10cmの壁溝がめぐる。主柱穴は２個で，２本柱構造となる。主柱穴の規模は，径20～25cm，深さ40～45cmで，柱穴間の距離は1.4mである。床面のほぼ中央には長さ50cm，幅40cm，深さ25cmの炉跡と考えられる楕円形の掘り込みが存在する。

遺物は極僅かで，弥生土器片が数点出土している。

ＳＢ２ｂの平面形も東西に長い楕円形で，規模は長軸5.5m，短軸５ｍである。壁は南側の最も高い所で40cmで，壁面下には幅20～25cm，深さ５～10cmの壁溝がめぐるが，南東側と北側では途切れている。主柱穴と炉跡はＳＢ２ａと共有している。壁際や壁溝内には径15～20cm，深さ20～40cmの支柱穴が存在する。

遺物は少なく，床面から弥生土器の甕（６），敲石（35）が出土しているほか，覆土中から弥生土器（４・５・７～10），石器（石鏃・スクレイパー），剥片が出土している。こ



第２－４図　ＳＢ２実測図（１：60）

のほか，住居跡の中央から南西側にかけて，30～50cm大の角礫が固まって出土しているが，その出土状況からすると住居廃棄後に投げ込まれたものと思われる。

出土遺物（第２－11・13図，図版２－21・23）

弥生土器

壺形土器（４・５）　４・５はいずれも口縁部片である。口縁端部は拡張し，外面には４は３条の，５は６条の凹線文がめぐる。調整は，内外面とも横ナデである。焼成は良好で，胎土には細砂を若干含んでいる。

甕形土器（６～８）　６は口縁部～頸部片で，口径は19.6cmである。頸部は「く」の字状に屈曲し，口縁部は水平に外反する。口縁端部には２条の凹線文がめぐる。調整は，口縁部は内外面とも横ナデ，それ以下は摩滅のため不明である。焼成は良好で，胎土には１mm以下の砂粒を多く含んでいる。７は口縁部～体部上半の破片で，口径は18.4cmである。頸部は「く」字状に屈曲し，口縁部は斜上方に立ち上がる。調整は，口縁部は内外面とも横ナデ，端部は摩滅が著しく不明である。体部内面は上半は横位の板状工具によるナデ，下半及び外面は縦位のハケ目である。焼成は良好で，胎土には１mm以下の砂粒を多く含んでいる。８は口縁部片で，斜上方に立ち上がる。調整は内外面とも横ナデである。焼成は良好で，胎土には１mm以下の砂粒を多く含んでいる。

底部（９・10）　９・10とも平底である。９は底径５cmで，調整は内面はヘラ削り，外面は摩滅のため不明である。焼成は良好で，胎土には１mm以下の砂粒を多く含んでいる。10は底径6.6cmで，調整は内面は縦位のヘラ削り，外面は摩滅のため不明である。焼成は良好で，胎土には１mm以下の砂粒を多く含んでいる。

石器

石鏃（33）　凹基無茎式の石鏃で，長さ2.4cm，幅1.4cm，重さ1.06ｇである。石質はホルンフェルスである。

スクレイパー（34）　長さ2.3cm，幅2.7cm，重さ2.7ｇで，石質は石英である。

敲石（35）　円形の自然礫を素材とする。側面に敲打痕が認められる。長さ8.2cm，幅8.5cm，厚さ6.5cm，重さは665ｇである。石質は石英斑岩である。

ＳＢ３（第２－５図，図版２－７）

調査区の北側，ＳＢ２の２m北側に存在する。

平面形は長方形で，規模は長軸3.2m，短軸２mである。壁は南側の最も高い所で48cmである。壁からの距離はＰ１が40cm，Ｐ２が1.1m，Ｐ３が50cmで，Ｐ２が若干離れてい

るが，規模等から主柱穴はＰ１，Ｐ２の２個と思われる。柱穴の規模は径15～25cm，深さ15cmで，柱穴間の距離は1.4mである。壁溝，炉跡等は認められない。壁の40～60cm外側の南北両側に，径15～20cm，深さ15～30cmの柱穴を１個ずつ確認した。その配列からすると本遺構に伴う可能性もある。なお，住居跡の中央部の床面からは炭化材が出土している。

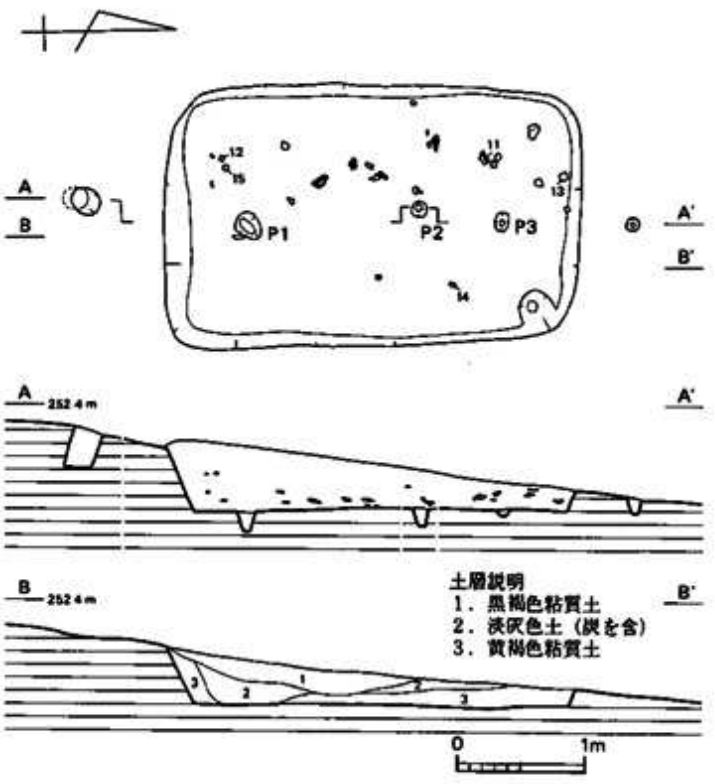
遺物は少量で，覆土中から弥生土器片（11～15）や剥片（36）が出土している。

出土遺物（第２－11～13図，図版２－21・23）

弥生土器

甕形土器（11・12）　いずれも口縁部片である。11は口径24cmで，頸部は「く」字状に屈曲し，口縁部は斜上方に立ち上がる。端部には２条の凹線文が巡り，その上からヘラ状工具による刺突文を施している。頸部には，ヘラ状工具による刺突文を施した貼付凸帯が認められる。調整は，口縁部は内外面とも横ナデ，体部内面はナデである。焼成は良好で，胎土には１mm以下の砂粒を少し含む。12は口縁部はほぼ水平にのび，端部には２条の凹線文がめぐる。調整は内外面とも横ナデである。焼成は良好で胎土には細砂粒を含む。

鉢形土器（13）　口径は，13.8cmである。体部は直線的に開き，口縁部はやや内傾する。調整は摩滅のため不明である。焼成は良好で，胎土には１mm以下の砂粒を多く含んでいる。



第２－５図　ＳＢ３実測図（１：60）

高杯形土器（14）　脚部片で，脚径は13cmである。脚柱部から緩やかに広がり，端部には１条の凹線文がめぐる。調整は，端部は内外面とも横ナデである。脚部外面は縦位のヘラ磨き，内面はナデである。焼成は良好で，胎土には細砂を若干含んでいる。

底部（15）　平底で，底径6.6cmである。調整は摩滅のため不明である。焼成は

良好で，胎土には1㎜以下の砂粒を多く含んでいる。

石器

剝片（36）　現存の長さ2.9cm，幅1.2cmの縦長剝片で，石質は黒曜石である。

ＳＢ４（第２－６図，図版２－８）

調査区の北側に位置し，ＳＢ６・ＳＤ２と重複している。

住居跡の北側は流失しているため不明瞭だが，平面形は隅丸長方形と思われる。壁は南側の最も高い所で10cmで，壁面下には一部幅約10cm，深さ７～10cmの壁溝が巡る。主柱穴はＰ１～Ｐ８の８個で，８本柱構造と思われる。柱穴の規模は径15～30cm，深さ15～33cmで，柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２－Ｐ３－Ｐ４－Ｐ５とＰ８－Ｐ１間は各1.5m前後でほぼ同じであるが，西側はＰ５－Ｐ６間が1.7m，Ｐ６－Ｐ７間が2.5m，Ｐ７－Ｐ８間が1.2mとばらつきが見られる。住居跡のほぼ中央には焼土面が存在する。床面は1/3程度が残存しており，復元すると一辺4.5～５m程度の住居跡と考えられる。

遺物は極僅かで，覆土中から弥生土器片や剝片が出土している。

ＳＢ６・ＳＤ２との新旧関係は，本遺構がＳＤ２に後出するが，ＳＢ６との新旧関係は不明である。

ＳＢ５（付図）

調査区の北端に位置し，ＳＢ６の２m北東に存在する。

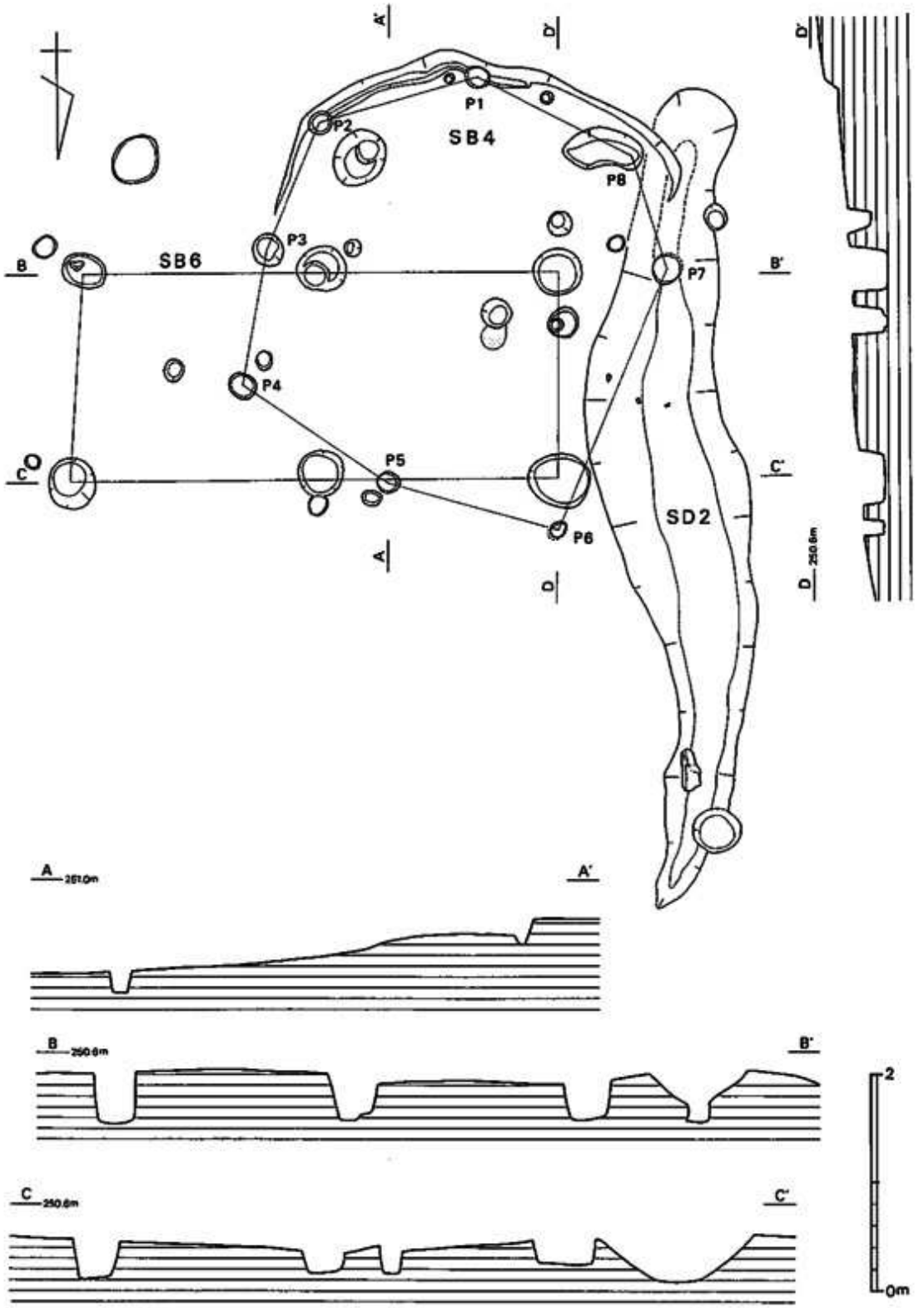
大部分が調査区外に延びているため，全容は不明である。平面形は長方形と思われるが，規模は不明である。壁高は南側で約10cmで，壁溝は存在しない。柱穴は不明である。

遺物は出土していない。

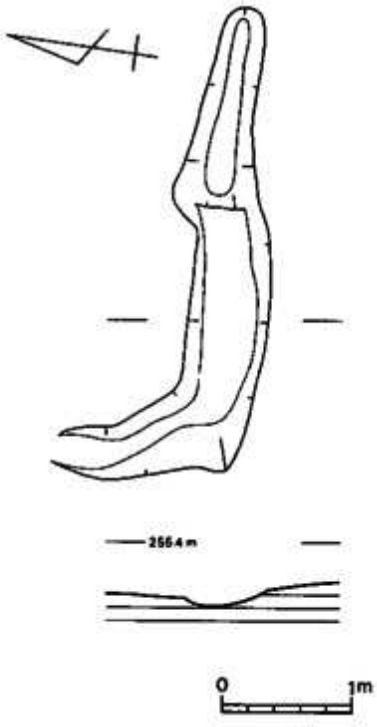
ＳＢ６（第２－６図，図版２－８ｂ，９ａ）

調査区の北端に位置し，ＳＢ４と重複する掘立柱建物跡である。桁行き方向はN88°Eである。規模は桁行２間（4.5m），梁行１間（２m）で，柱間は２～2.3mである。柱穴掘方の規模は径40～55cm，深さ23～42cmで，埋土は黒褐色粘質土で炭や焼土を含んでいる。柱痕の規模は径25cmである。遺物は柱穴から弥生土器片が出土している。

ＳＢ４との新旧関係は不明である。



第2－6図　SB4・6，SD2実測図（1：60）アミ目は焼土



第2－7図　SD1実測図（1：60）

（B）溝

SD1（第2－7図，図版2－10a）

調査区の南側に位置し，SB1の3.5m南東に存在する。長さ3.5mのところでほぼ直角に曲がり，平面形は逆「L」字状である。規模は幅40～60cm，深さ5～10cmである。溝の横断面は「U」字状で，底面はほぼ平坦である。溝の覆土は黄褐色粘質土の単一層で，遺物は出土していない。

SD2（第2－6図，図版2－10b）

調査区の北西端に位置し，SB4と重複している。規模は長さ7.5m，幅は最大で1.5m，深さ30～50cmである。溝の横断面は逆台形で，底面はほぼ平坦である。溝の覆土は暗褐色土の単一層である。出土遺物は僅かで，覆土中から弥生土器片（17）が若干出土しているほか，溝の底面付近で底部片（16）が出土している。SB4との新旧関係は，本遺構がSB4に較べて古い。

出土遺物（第2－12図，図版2－21）

弥生土器

底部（16・17）　いずれも平底である。16は底径6cmで，調整は摩滅のため不明である。焼成は良好で，胎土には砂粒を多く含んでいる。17は底径4.4cmである。調整は，内面が縦位のヘラ削り，外面は摩滅のため不明である。焼成は良好で，胎土には砂粒を多く含んでいる。

（C）柵列（付図，図版2－9b）

調査区の北から北西側にかけて多数の柱穴を確認した。これらは等高線に沿うように配列しているものがあり，南から北にSA1～4とした。各柵列の柱穴の掘方の埋土は褐色土で，柱痕には焼土・炭化物を含む暗褐色土が認められた。また，覆土中に弥生土器片を含むものもいくつか存在している。

SA1（付図）

調査区の北側に位置し，SB3の3.5m北西側，SB4の4.5m南側に存在する。長さは

約19mで，東端から９m付近までは直線的に，そこから西側は等高線に沿うように弧状にめぐる。柱穴の規模は径15～25cm，深さ10～35cmで，柱間距離は1.5～２mである。遺物は出土していない。

ＳＡ２（付図）

調査区の北側に位置し，ＳＡ１の0.5m北側にほぼ平行して存在する。長さは5.1mで，柱穴は直線的に並んでいる。柱穴の規模は径20～30cm，深さ15～30cmで，柱間距離は1.7mで等間隔である。遺物は出土していない。

ＳＡ３（付図）

調査区の北西に位置し，ＳＤ２の1.5m南西側に存在する。長さは８mで，柱穴は直線的に並んでいる。柱穴の規模は，径10～20cm，深さ10～15cmで，柱間距離は両端が1.8m，中央部が1.5mである。遺物は出土していない。

ＳＡ４（付図）

調査区の北西端に位置し，ＳＤ２の2.5m北西側，ＳＡ３の6.5m北側に存在している。長さは５mで，さらに北東側の調査区外に延びるものと思われる。柱穴の規模は，径10～20cm，深さ９～32cmで，柱間距離は1.3～1.4mである。遺物は西端の柱穴の覆土中から，弥生土器片（18）が出土している。

出土遺物（第２－12図，図版２－21）

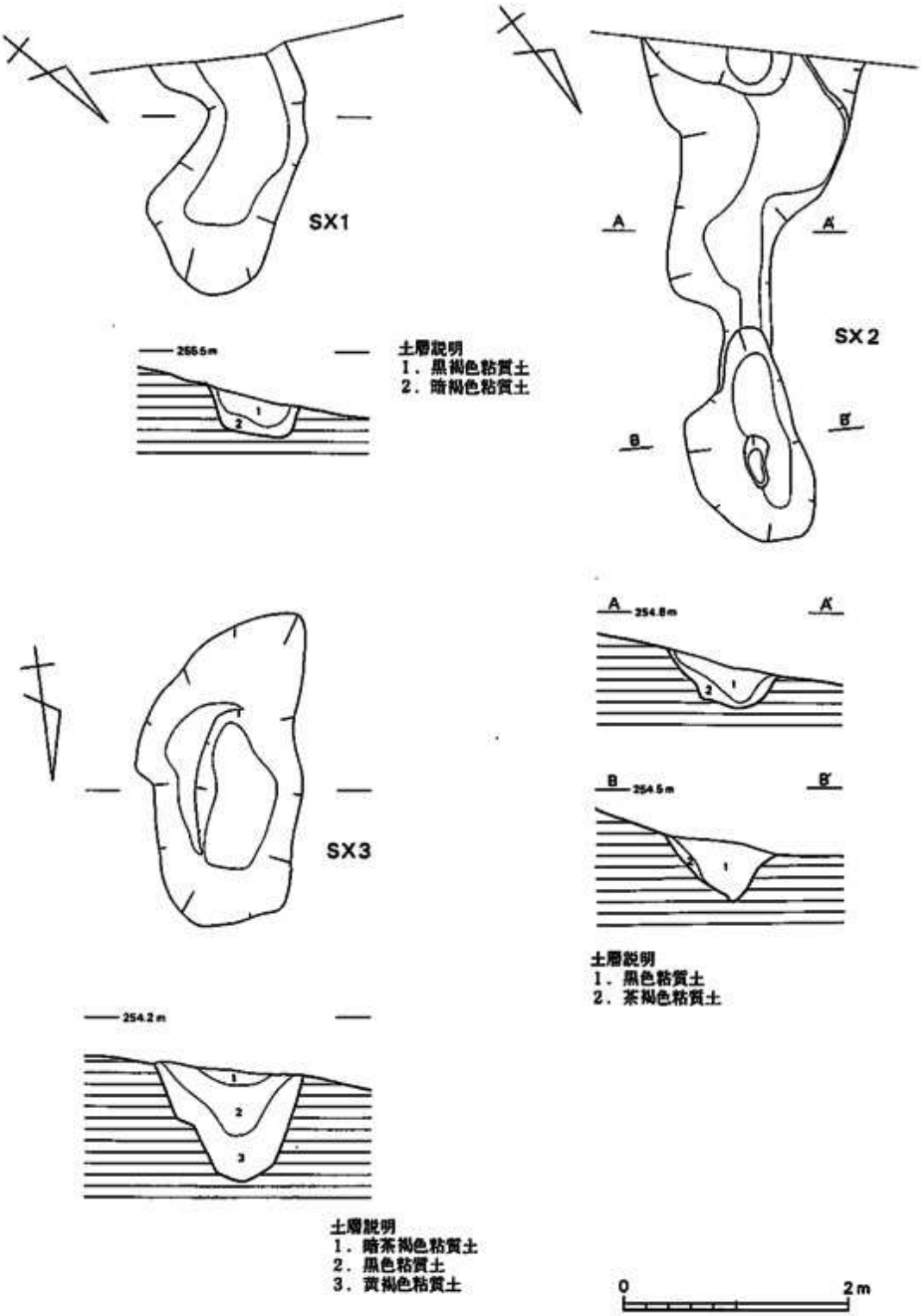
弥生土器

甕形土器（18）頸部は「く」字状に屈曲し，口縁部は斜上方に立ち上がる。調整は外面は横ナデ，内面は摩滅のため不明である。焼成は良好で，胎土には砂粒を多く含んでいる。

（D）性格不明遺構

ＳＸ１（第２－８図，図版２－11）

調査区の南端に位置し，ＳＸ２の１m東側に存在している。南側は調査区外に延びるため，全容は明らかでない。現状では長さ２m，幅0.8～1.1m，深さ20～50cmである。横断面は逆台形で，底面は北側に向かって下っている。内部に黒褐色粘質土と暗褐色粘質土の堆積が認められた。遺物は出土していない。



第2－8図　ＳＸ１～３実測図（１：60）

ＳＸ２（第２－８図，図版２－12）

調査区の南端に位置し，ＳＸ１の１m西側，ＳＸ３の１m東側に存在している。南側は調査区外に延びるため全容は明らかでない。現状では長さ4.5m，幅0.5～2.1m，深さ45～50cmである。横断面は逆台形で，底面はほぼ平坦である。黒色粘質土と茶褐色粘質土の堆積が認められた。遺物は出土していない。

ＳＸ３（第２－８図，図版２－13）

調査区の南端に位置し，ＳＸ２の１m西側に存在している。平面形は不整楕円形で，規模は長軸2.9m，短軸1.5m，深さ１mである。短軸の断面は「U」字形で，東側には幅約10cmの平坦面がみられる。内部には暗茶褐色粘質土・黒色粘質土・黄褐色粘質土の堆積が認められ，遺物は覆土中から弥生土器片が若干出土している。

ＳＸ４（第２－９図，図版２－14）

調査区の南端に位置し，ＳＸ１の５m北東に存在している。平面形は不整楕円形で，規模は長軸2.2m，短軸1.1m，深さ0.4～0.5mである。短軸の断面形は逆台形で，底面は西側に向かって下っている。黒褐色砂質土と黄褐色砂質土の堆積が認められた。遺物は出土していない。

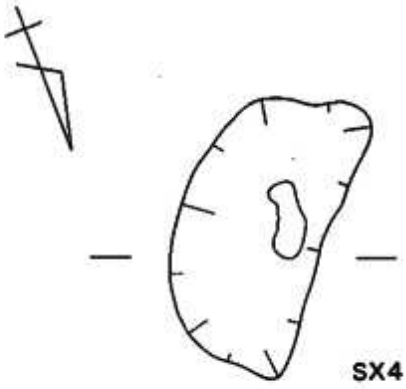
ＳＸ５（第２－９図，図版２－15）

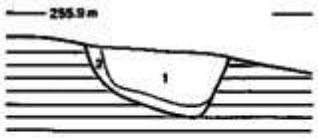
調査区のほぼ中央に位置し，ＳＢ１と重複している。平面形は隅丸長方形で，規模は長さ3.5m，幅1.5m，深さ0.3～0.6mである。横断面形は逆台形で，底面はほぼ平坦である。南壁では幅約30cmの平坦面がみられる。遺物は出土していない。ＳＢ１との新旧関係は，本遺構がＳＢ１に較べて古い。

ＳＸ６（第２－９図，図版２－16）

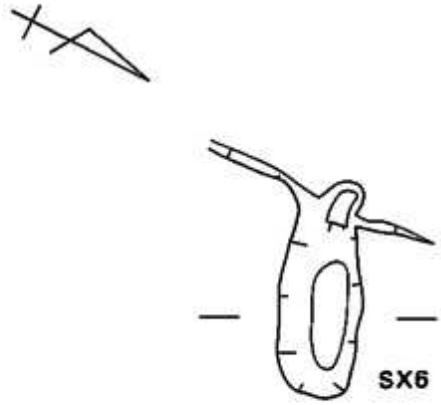
調査区のほぼ中央に位置し，ＳＢ１と重複する。平面形は楕円形で，規模は長軸1.7m，短軸0.6m，深さ0.5mである。短軸の断面は逆台形で，底面はほぼ平坦である。西側には幅15cmの平坦面がみられる。遺物は出土していない。ＳＢ１との新旧関係は，本遺構がＳＢ１に較べて古い。

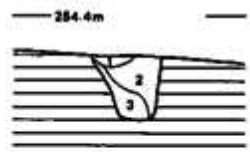
ＳＸ７（第２－９図，図版２－17）



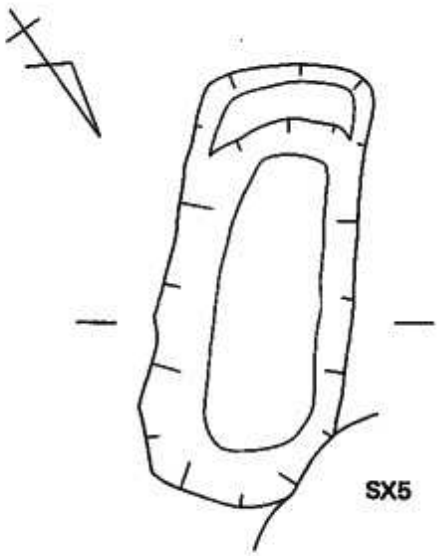


土層説明
1．黒褐色砂質土
2．黄褐色砂質土

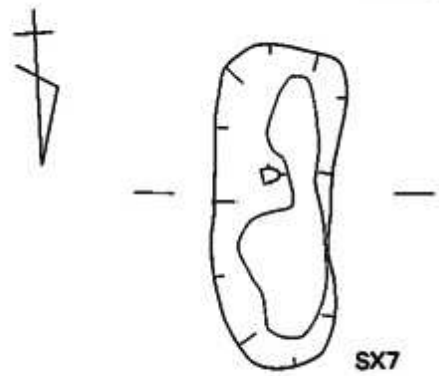




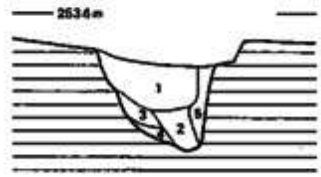
土層説明
1．暗褐色粘質土
2．黒色粘質土
3．黄褐色粘質土

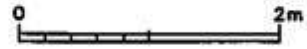


土層説明
1．黒色粘質土
2．淡黒褐色砂質土
3．黄褐色粘質土
4．淡黄褐色砂質土
5．黄褐色砂質土



土層説明
1．黒褐色砂質土
2．淡黒褐色砂質土
3．黄褐色粘質土
4．淡黄色砂
5．暗茶褐色粘質土





第2－9図　ＳＸ４～７実測図（１：60）

調査区のほぼ中央に位置し，ＳＢ２の0.5m南東に存在している。平面形は楕円形で，規模は長軸2.5m，短軸0.9m，深さ0.6mである。底面は不整形な形状を示している。短軸の断面形は逆台形で，底面は西側に向かって低くなっている。遺物は上層から弥生土器（19～21）が出土している。

出土遺物（第２－12図，図版２－22）

弥生土器

甕形土器（19・20）　19は口縁部片で，頸部は「く」字状に屈曲し，口縁部はほぼ水平にのびる。端部には４条の凹線文がめぐり，凹線文間にはヘラ状工具による刺突文が施されている。頸部の下方には２条の貼付凸帯が剝れた痕跡が残る。調整は，口縁部は内外面とも横ナデ，体部は内外面ともナデである。焼成は良好で，胎土には細砂を少し含んでいる。20は口縁部～体部上半の破片で，口径は12.6cmである。頸部は「く」字状に屈曲し，口縁部はやや上方に立ち上がる。口縁端部には２条の凹線文が，体部外面には貝殻の腹縁による刺突文がめぐる。調整は，口縁部は内外面とも横ナデ，体部外面は縦位のハケ目，体部内面はナデである。焼成は良好で，胎土には砂粒を若干含んでいる。

高杯形土器（21）杯部片で，口径は14.4cmである。杯部は椀状で，口縁端部は「T」字形に内外に短く拡張している。口縁端部外面にはヘラ状工具による刺突文，その下方には４条の凹線文がめぐる。調整は，口縁部及び体部上半は内外面とも横ナデ，体部下半は縦位のヘラ磨きである。焼成は良好で，胎土には１㎜以下の砂粒を多く含んでいる。

ＳＸ８（付図）

調査区のほぼ中央に位置し，ＳＢ３の３m西側に存在している。

長さ２mのところでほぼ直角に折れ曲がり，平面形「L」字形の溝状である。規模は長さ２m，幅0.3～0.4m，深さ５cmである。底面はほぼ平坦である。覆土は暗褐色土の単一層で，遺物は覆土中から弥生土器片（22）が出土している。

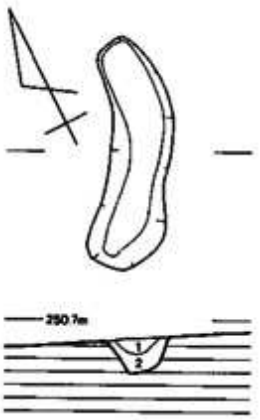
出土遺物（第２－12図，図版２－22）

弥生土器

底部（22）平底で，底径７cmである。調整は，内面は縦位の粗いハケ目，外面は摩滅のため不明である。焼成は良好で，胎土には細砂を少し含んでいる。

ＳＸ９（第２－10図）

調査区の北西側に位置し，ＳＡ３の1.5m南側に存在している。平面形は南北に細長い



第2－10図　SX9実測図（1：60）

不整形で，規模は長さ1.8m，幅0.4～0.6m，深さ25cmである。短軸の断面形は逆台形で，底面は北側に向かって低くなっている。覆土は2層に分層できるが，上層には焼土塊や炭化物が多量に認められた。遺物は出土していない。

（E）調査区出土の遺物

調査区内のほぼ全域から弥生土器片が，またD区からは磨製石斧が出土している。

C区出土遺物（第2－12図，図版2－22）

弥生土器

甕形土器（23）　口縁部片で，端部は上下に拡張し，端面に2条の凹線文がめぐる。内外面とも横ナデを施す。焼成は良好で，胎土に細砂を若干含んでいる。

D区出土遺物（第2－13図，図版2－23）

石器

磨製石斧（37）　定角式で，基部を欠損する。現存長11cm，幅5.5cm，断面形は楕円形である。石質は流紋岩質凝灰岩で，重さは456gである。

E区出土遺物（第2－12図，図版2－22）

弥生土器

壺形土器（24）　口縁部片で，口径は13.6cmである。口縁部は外反し，端部は内傾する。端部には3条の凹線文がめぐる。調整は摩滅のため不明である。焼成は良好で，胎土には細砂を若干含んでいる。

甕形土器（25）　口縁部～体部上半の破片で，口径は15cmである。頸部は「く」字状に屈曲し，口縁部は斜上方に立ち上がる。調整は，口縁部は内外面とも横ナデ，体部は内面が縦位のヘラ削り，外面は摩滅のため不明である。焼成は良好で，胎土には1～2mm大の砂粒を多く含んでいる。外面には煤が付着している。

底部（26・27）　26は凹底で，底径8cmである。調整は体部内面と底面はナデ，体部外

面は摩滅のため不明である。焼成は良好で，胎土には細砂を若干含んでいる。27は平底で，底径5㎝である。調整は体部内面と底面はナデ，体部外面は摩滅のため不明である。焼成は良好で，胎土には細砂を若干含んでいる。

F区出土遺物（第2－12図，図版2－22）

弥生土器

底部（28～31）　28・30・31は平底，29は凹底である。28は底径5㎝で，調整は体部内面はヘラ削り，底面はナデである。体部外面は摩滅のため不明である。焼成は良好で，胎土には細砂を若干含んでいる。29は底径4.4㎝で，調整は体部外面は縦位のヘラ磨き，内面は縦位のヘラ削りである。底面はナデである。焼成は良好で，胎土には1㎜以下の砂粒を多く含んでいる。30は底径8㎝で，調整は体部外面はナデ，体部内面は摩滅のため不明である。底面はハケ目である。焼成は良好で，胎土には1㎜以下の砂粒を多く含んでいる。31は底径7.6㎝で，調整は体部外面は縦位のヘラ磨き，内面及び底面はナデである。焼成は良好で，胎土には細砂を少し含んでいる。

G区出土遺物（第2－12図，図版2－22）

弥生土器

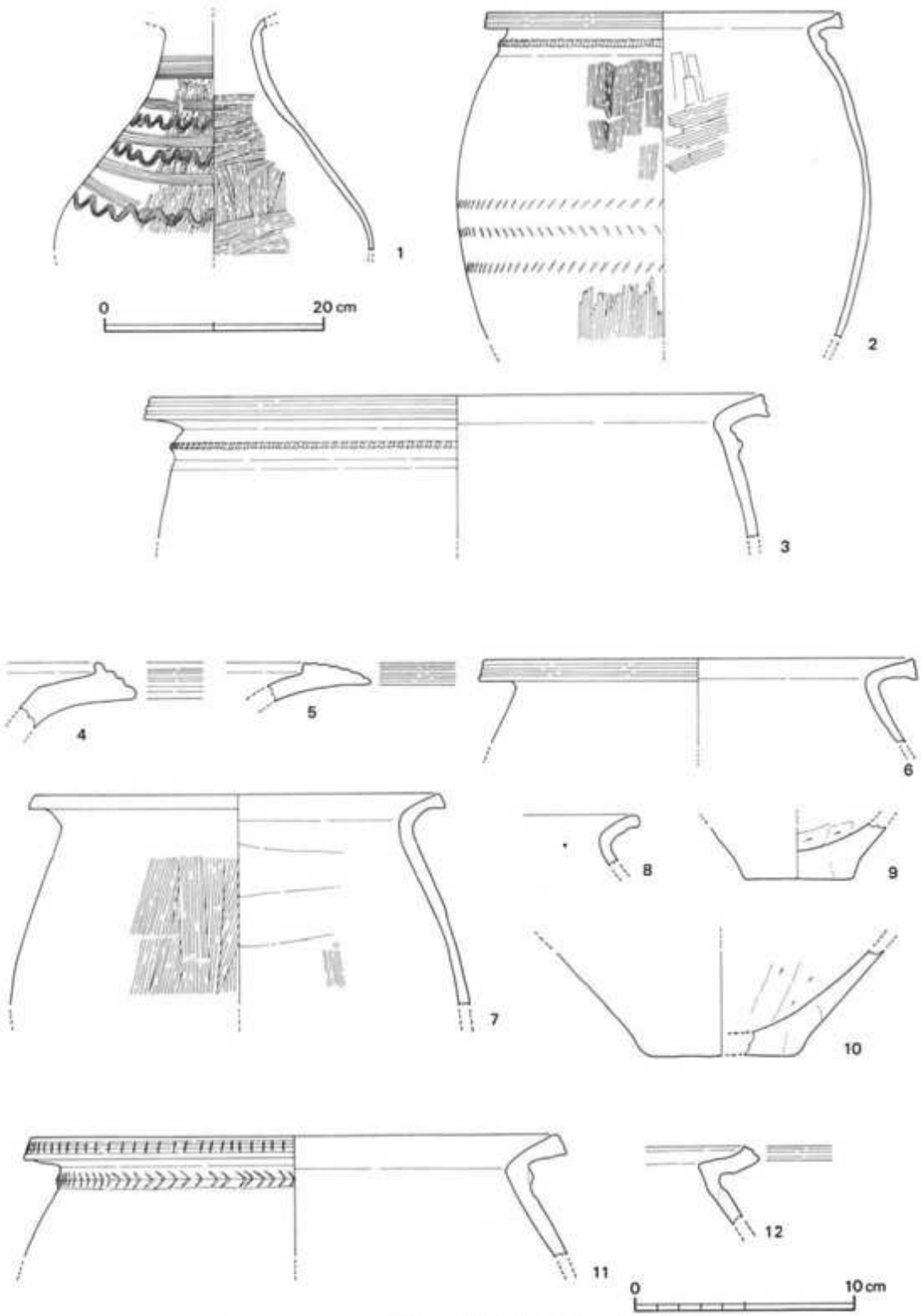
高杯形土器（32）脚部片で，脚径は7.8㎝である。裾部は緩やかに広がり，端部は上下に拡張している。径4㎜の円孔（未通）が2か所認められる。調整は，外面及び脚端部は横ナデ，内面は摩滅のため不明である。焼成は良好で，胎土には細砂を若干含んでいる。

（4）小結

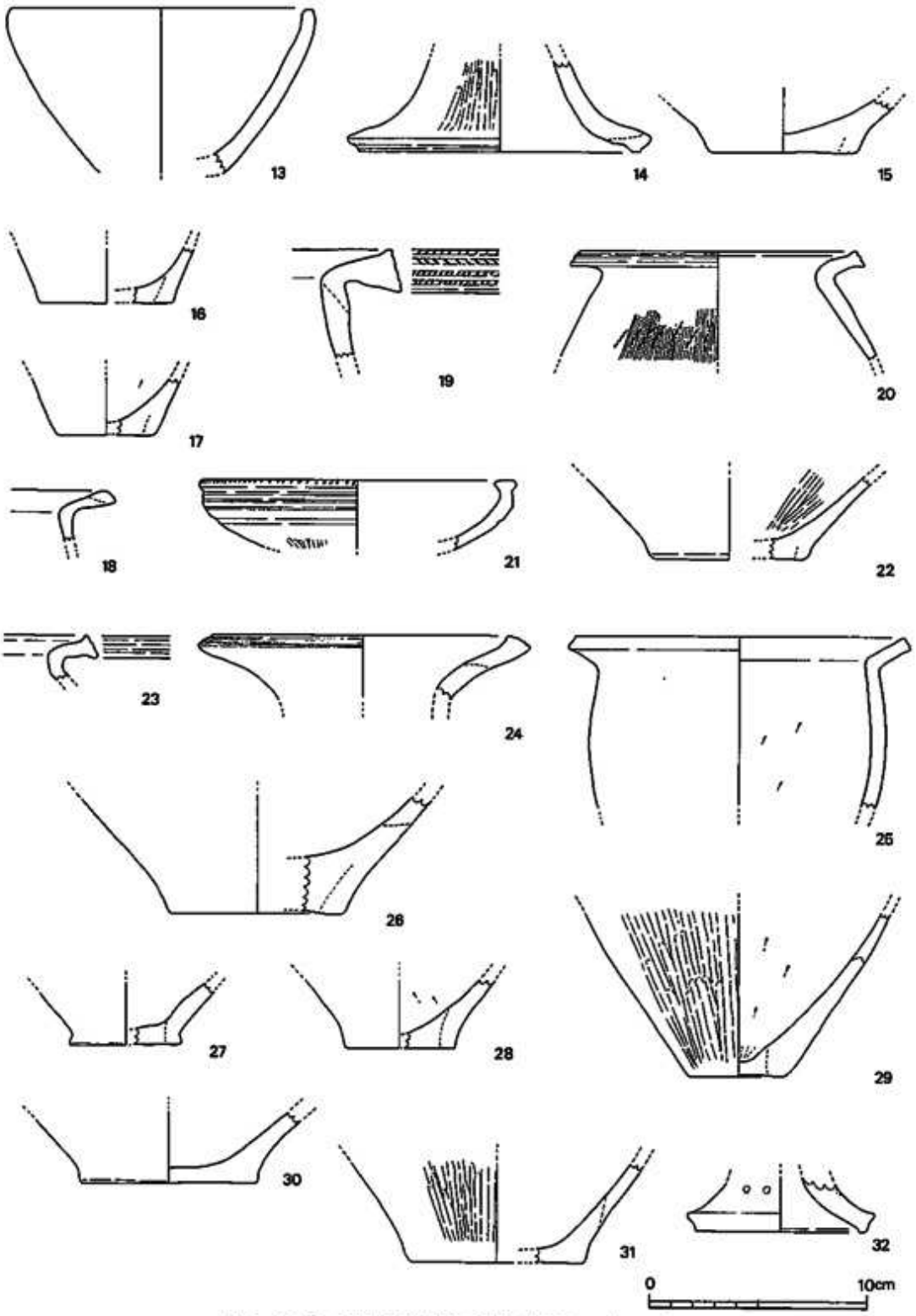
調査の結果，本遺跡では竪穴住居跡5軒（SB1～5），掘立柱建物跡1棟（SB6），溝状遺構2条（SD1・2），柵列4条（SA1～4），性格不明遺構9基（SX1～9）を確認することができた。出土した遺物から，弥生時代の集落跡であることが判明したが，遺構は調査区外にも延びており，遺跡の範囲はさらに広がるものと考えられる。ここでは，今回の調査で確認した遺構と遺物を中心に述べ，まとめとする。

a．遺物について

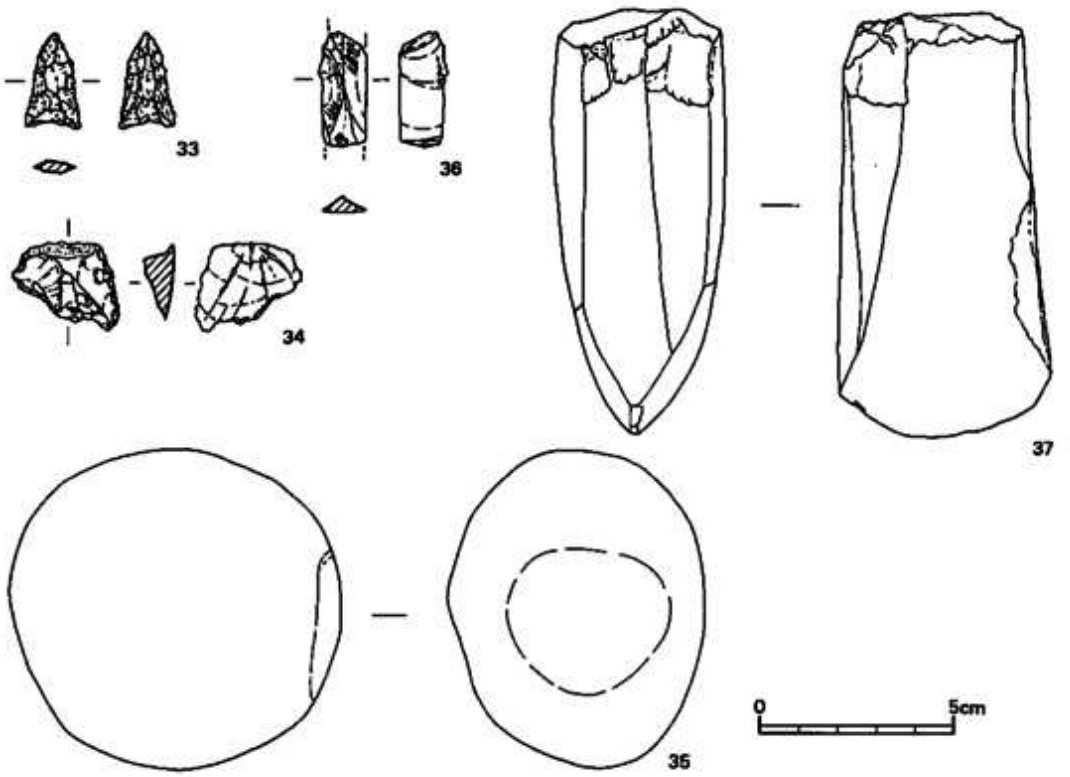
本遺跡から出土した土器には弥生土器（壺・甕・鉢・高杯等）があり，全体的には破片が多く，量的にも多くない。出土土器の特徴は，甕形土器は頸部の屈曲が強く，口縁部は



第2－11図　宮領1号遺跡出土遺物実測図Ⅰ（1：6，1：3）



第2－12図　宮領1号遺跡出土遺物実測図Ⅱ（1：3）



第２－13図　宮領１号遺跡出土遺物実測図Ⅲ（１：２）

水平あるいはやや斜上方に立ち上がる。口縁端面には２～３条の凹線文がめぐる。頸部下に貼付凸帯を施すもの（２・３・11）もみられる。壺形土器は口縁端部を拡張し，端面に３～６条の凹線文がめぐる。これらは，西条盆地周辺では助平２号遺跡[1]ＳＢ２・23・24出土土器にその類例が求められ，弥生時代中期後半に位置付けられる。本遺跡出土土器は，ほぼこの時期に該当すると思われる。

ｂ．遺構について

竪穴住居跡は建替えも含めると６軒分確認した。平面形が楕円形のもの３軒（ＳＢ１・２ａ・２ｂ），隅丸長方形１軒（ＳＢ４），長方形２軒（ＳＢ３・５）である。

ＳＢ１は平面形が円形で，２本柱構造である。周囲に数個の支柱穴を持ち，主柱穴間に炉跡を有する。ＳＢ２については，建替えによりその規模を縮小している（ＳＢ２ａ→ＳＢ２ｂ）。この２軒は炉跡と主柱穴を共有しており，ＳＢ１と同じく２本柱構造の住居である。これら２本柱構造の住居は，県東部の備後地域では弥生時代中期後半～後期初頭に多く見られる住居形態で，いわゆる「神辺型住居（松菊里型住居）」である。[2] 県西部の安

芸地方では本遺跡の他に大朝町岡の段[3]A・C地点遺跡[4]などで弥生時代のものが見つかっているが，まだ類例は少ない。

ＳＢ１は床面にいわゆるベッド状遺構と呼ばれる段を伴う。北側が流失しているため全容については明らかではないが，西側で一旦途切れるものの，少なくとも住居の南側を中心にして壁沿いに1/2～2/3周程度存在し，石野博信氏分類の円２型あるいは円３型[5]に該当するものと考えられる。ベッド状遺構は，弥生時代前期末～古墳時代に主に西日本に多く分布しており，その中心は北部九州にみられるようである。県内では現在までに，古いところでは庄原市大原１号遺跡[6]の弥生時代中期末から，同市小和田遺跡[7]の古墳時代（６世紀）までその類例が求められ，本遺跡を含め14例を数える。弥生時代後期に多く確認されており，その構造は本遺跡のように地山を削り出して作るものと，盛り土によるものとがみられるが，現段階では構造的な違いが時期差としては認められていない。また，弥生時代の円形の竪穴住居跡の場合，その壁に沿って設けられる例が多くみられるが，賀茂郡河内町竹下遺跡[8]のように「Ｌ」字状のものもみられる。これらベッド状遺構をもつ住居は，大原１号遺跡では鈍，深安郡神辺町御領遺跡[9]では不明鉄器数点，東広島市大槻３号遺跡[10]では青銅製斧が出土しており，集落内での中心的な建物とされている。北部九州では一集落内でベッド状遺構をもつ住居跡が数軒みられる例もあるが，本県ではこういった様相とは異なって一集落で１～２軒の存在で，その集落の中心的な建物あるいは特殊な性格を考えるべき建物といえるようである。

ＳＢ３は３×２ｍと小規模な長方形の住居跡である。庄原市和田原遺跡[11]，広島市芳ヵ谷遺跡[12]，東広島市胡麻５号遺跡[13]等でも同様な遺構が確認されているが，規模等からすると住居と考えるよりも，作業小屋的な建物と捉えられよう。

柵列は調査区の北側で４条確認した。長さは５～19ｍでその規模にばらつきが見られるが，いずれも等高線に沿うように存在する。これら柵列の柱穴掘方の規模は径10～30㎝で，竪穴住居跡や掘立柱建物跡等の柱穴よりも小さい。覆土が住居跡の覆土と同じであることや，ＳＡ１が竪穴住居跡（ＳＢ１～３）を取り囲むように存在していることなどから，これらの竪穴住居跡に伴うものと考えられる。また，このほかの柵列のあり方からも，同一の時期のものの可能性が高い。弥生時代の柵列は類例が少なく（福岡県一ノ口遺跡[14]・秋田県地蔵田Ｂ遺跡[15]など）不明な点が多く，今後の類例の増加によりその性格等が明らかになるであろう。

以上，本遺跡では弥生時代中期後半の集落を確認することができた。遺跡はさらに斜面の下方の調査区外に延びることが推測できる。西条盆地周辺では当時期の遺跡は少なく，

当該期の集落を知るうえで興味深い遺跡といえよう。

(註)

(1) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター「助平2号遺跡」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(I) 昭和58(1983)年

(2) 石野博信「西日本・弥生中期二つの住居型」『論集 日本原史』 吉川弘文館 昭和60(1985)年

(3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが 平成元年度及び2年度に調査を行なった。

(4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが 平成元年度に調査を行なった。

(5) 石野博信「弥生・古墳時代住居の屋内区分施設」『橿原考古学研究所論集』第10集 吉川弘文館 昭和63(1988)年

(6) 広島県教育委員会「大原1号遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 昭和53(1978)年

(7) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『西山・小和田・永宗』 昭和57(1982)年

(8) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが 平成元年に調査を行なった。

(9) 神辺町教育委員会『神辺町埋蔵文化財調査報告II－御領遺跡発掘調査概報』 昭和57(1982)年

(10) 建設省中国地方建設局広島国道工事事務所・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『大槇遺跡群』 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第38集 昭和60(1985)年

(11) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『和田原遺跡』 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第68集 昭和63(1988)年

(12) 広島市教育委員会「芳カ谷遺跡」『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』 広島市の文化財第30集 昭和59(1984)年

(13) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群』I 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第83集 平成2(1990)年

(14) 小田富士雄「弥生集落の調査と保存問題－福岡県・一ノ口遺跡をめぐって－」『古文化談叢』第22集 平成2(1990)年

(15) 菅原俊行「地蔵田B遺跡」『考古学ジャーナル』NO.273 昭和62(1987)年

3．柳原遺跡

（1）位置と現状（第3－1図，図版3－1）

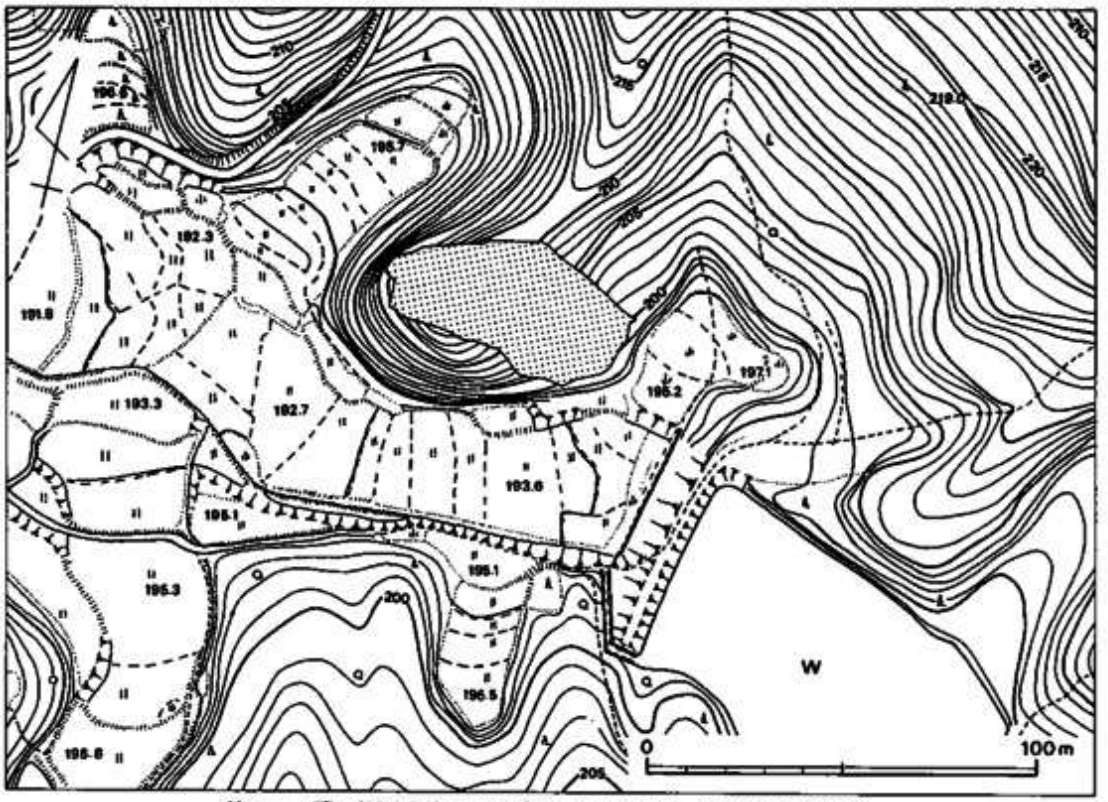
本遺跡は東広島市高屋町大字小谷5184外に所在する。

本遺跡が位置する丘陵は，南側の馬背山塊から北側に延びた樹枝状丘陵の一つで，遺跡の南側と西側には入野川の支流によって開析された谷水田が広がっている。遺跡は丘陵頂部からやや東側に下がった標高約200～210mの斜面に位置し，周囲の水田面との比高差は約15mである。遺跡の現状は山林である。

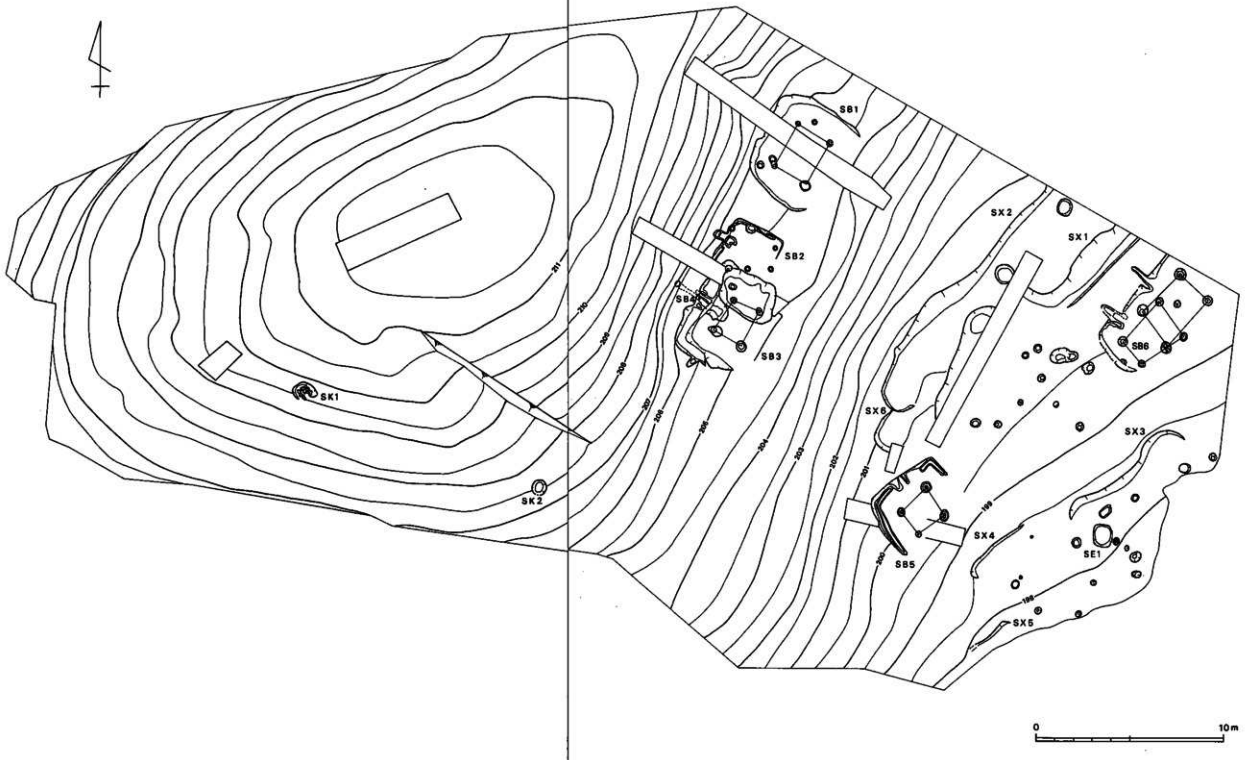
（2）調査の概要（第3－2図）

本遺跡の立地する丘陵は花崗岩風化土を基盤とし，丘陵尾根筋では表土直下でこの基盤面を検出したが，遺構を検出した東側斜面では，花崗岩風化土の上層に厚さ20～50cmの堆積土が認められた。調査は尾根頂部に任意に基準点を設定し，これをもとに尾根主軸方向に沿って基準線を設け，さらに基準点から直角方向にも基準線を設けておこなった。

遺構の内訳は東側斜面の古墳時代後期（6世紀後半頃）の竪穴住居跡6軒（SB1～6）



第3－1図　柳原遺跡周辺地形図（1：2,000）（アミ目は調査区）



第３－２図　柳原遺跡遺構配置図（１：200）

及び段状遺構6（ＳＸ1～6），また南側斜面の土壙2基（ＳＫ1・2）等である。

（3）遺構と遺物

1）古墳時代の遺構と遺物

a．竪穴住居跡

ＳＢ1（第3－3図，図版3－2・3）

調査区東側斜面中央付近で検出した隅丸方形の竪穴住居跡で，南西側にＳＢ2～4が近接する。この付近の斜面は比較的平坦になっている。

本住居跡の東壁はすでに流失していた。住居跡の規模は西辺長4.6m，南辺長3.6m，北辺長4.5mで，壁高は最も残りの良好な北西隅で1.1mで，約75°の角度で立ち上がっている。床面はほぼ平坦で，壁際に壁溝は認められなかった。残存床面積は約16.8㎡である。主柱穴は4本で，各壁際から1～1.4m内側にある。柱穴の規模は径25～50cm，深さ33～59cmで，柱穴間の距離は1.95～2.50mである。住居跡の中央の東西方向に試掘溝が入れられていたため，直接カマド等は確認できなかったが，西辺中央付近で焼土と炭化物が広がる箇所が確認されていることからカマドが存在したことが推定できる。

出土遺物には覆土中から出土した少量の須恵器片がある。

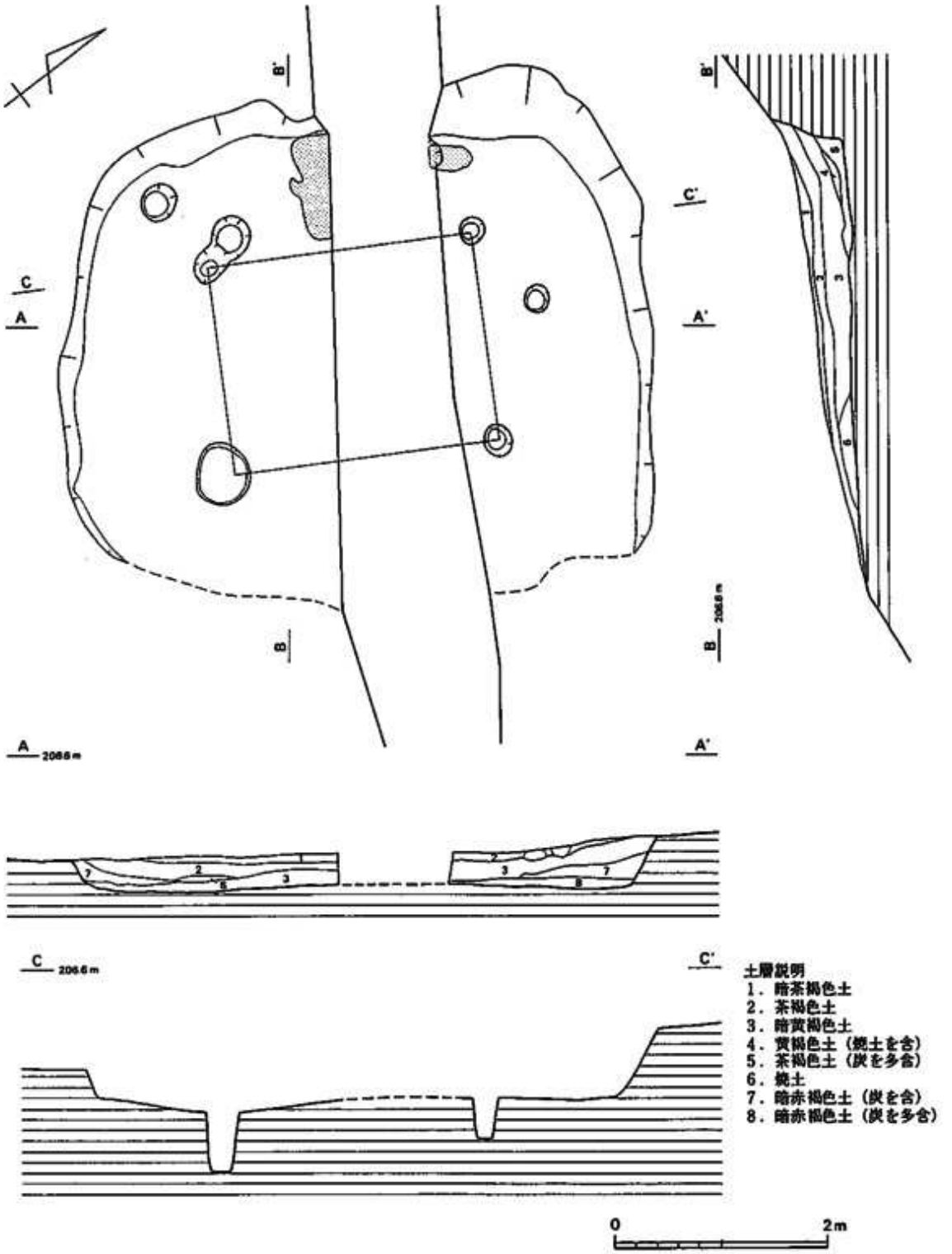
出土遺物（第3－17図，図版3－26）

須恵器

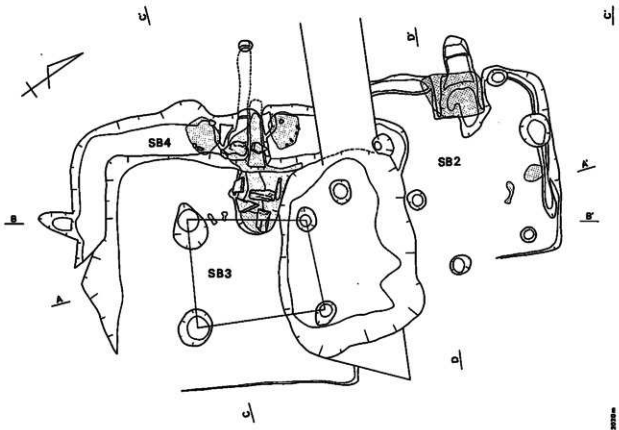
杯蓋（1～3）　1は天井部から体部にかけて緩やかに屈曲した後，体部は外下方に続き，さらに屈曲して垂下する。口縁端部はやや尖り気味となり，内面には緩やかな段を持つ。調整は天井部外面回転ヘラ切り，体部外面から内面にかけてはロクロナデで，内面天井部は不定方向のナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。2の体部は天井部から強く屈曲した後，やや内傾して口縁端部に続く。端部は丸く終わる。調整は内外面ともロクロナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。3は体部から口縁部にかけて緩やかにカーブして外下方に続き，端部は丸く終わる。調整は内外面ともロクロナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を少量含む。

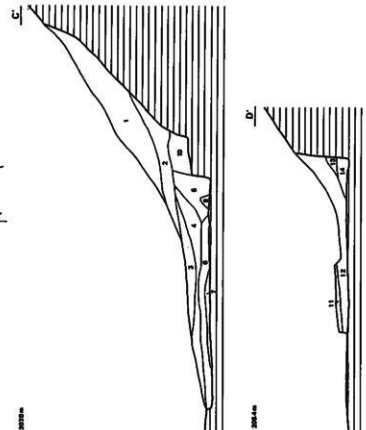
ＳＢ2（第3－4図，図版3－4～6）

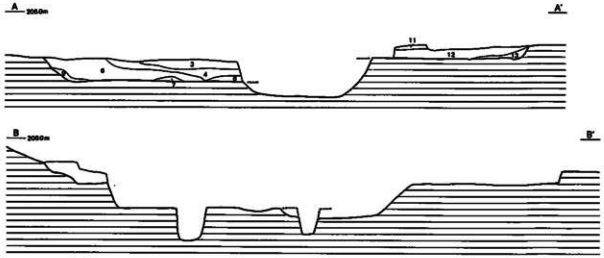
ＳＢ1の南西側約2mに位置する隅丸方形の竪穴住居跡である。東壁はすでに流失しているうえ，住居跡の南半部を試掘溝によって失っているため本来の規模は明確ではない。残存する北壁長は2.85m，北西隅の壁高は約85cmで，壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。



第3－3図　ＳＢ１実測図（１：60）（アミ目は焼土）





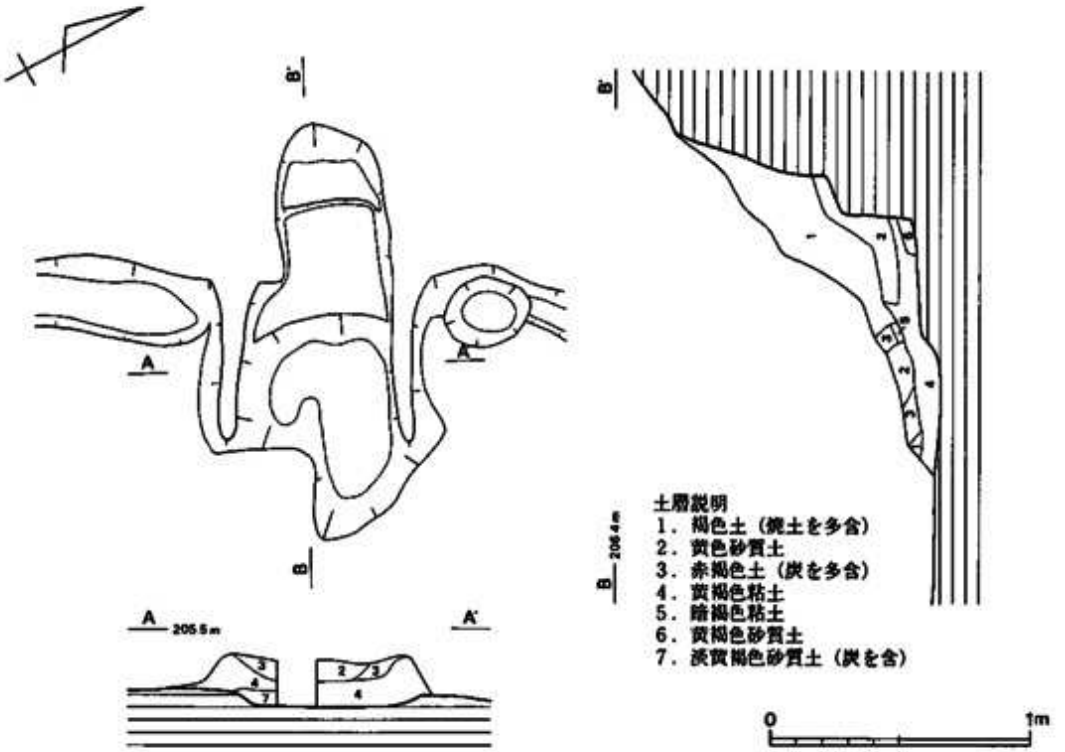


土層説明

1．赤褐色土	8．黄褐色砂質土
2．茶褐色土	9．赤褐色粘質土
3．淡灰褐色土	10．暗黄褐色砂質土
4．灰褐色土	11．灰褐色砂質土
5．黄褐色粘質土	12．褐色土
6．淡灰褐色土	13．暗褐色土
7．黄白色土	14．暗黄褐色砂質土

0　2m

第3－4図　ＳＢ２～４実測図（１：60）（アミ目は焼土炭



第3－5図　SB2カマド実測図（1：30）

床面はほぼ平坦で，西壁と北壁の壁際には幅10～20cm，深さ約3cmの壁溝が認められた。柱穴については床面で数個のピットを検出したが，柱の対応関係などから明らかに主柱穴と確認できるものはなかった。

一方，住居跡北西隅から約1m南側の西壁でカマドを検出した。このカマドの袖部は黄褐色の粘土で造られており，焚口部の規模は幅約95cmである。また火床の規模は長径95cm，短径85cm，深さ7cmで焼土や炭化物層が堆積していた。煙道部は長さ75cmで，火床からほぼ垂直に立ち上がり，わずかな平坦面をつくってさらに垂直に立ち上がっている。

住居跡覆土中から少量の須恵器片が出土した。

出土遺物（第3－17図，図版3－26）

須恵器

杯蓋（4）　天井部と体部との境界に浅い沈線が1条廻り，体部は緩やかにカーブして外下方に続く。端部はやや尖り気味に終わる。調整は内外面ともロクロナデで，焼成は良好である。胎土は砂粒を少量含む。

杯身（5）　口縁部の受部は短く外上方にのび，端部は丸く終わる。立上がり部はやや外湾して短く上方にのび，端部は丸く終わる。体部から底部にかけては緩やかにカーブし，

底部はほぼ平坦である。調整は内外面ともロクロナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を少量含む。

ＳＢ３（第３－４図，図版３－７～11）

ＳＢ２の南側に近接する竪穴住居跡で，土層観察からＳＢ４が埋没する以前に造られたと想定される隅丸方形の住居跡である。住居跡の北半部を試掘溝によって失っているため，ＳＢ２との切り合いの有無などは不明であり，また規模についても明確ではない。残存する南壁長は3.1mで，土層断面で確認できる壁高は30cmである。床面は平坦であるが，北側は後世の撹乱と思われる不整形な落ち込みによって失っている。主柱穴は４本で，柱穴の規模は直径30～55cm，深さ約45cmである。

住居跡西壁の中央と考えられる付近でカマド１基を検出した。このカマドは袖部を石を立てて構築したもので，その内側には天井石と考えられる角礫が落ち込んでいた。火床は長さ1.90m，幅1.45m，深さ約30cmで，焼土，炭化物などの堆積が認められた。煙道部は長さ2.05mで，煙出しにかけては緩やかに立ち上がっている。

なお，住居跡覆土中からは少量の土師器・須恵器のほか，刀子１点が出土した。

出土遺物（第３－17図，図版３－26・36）

土師器

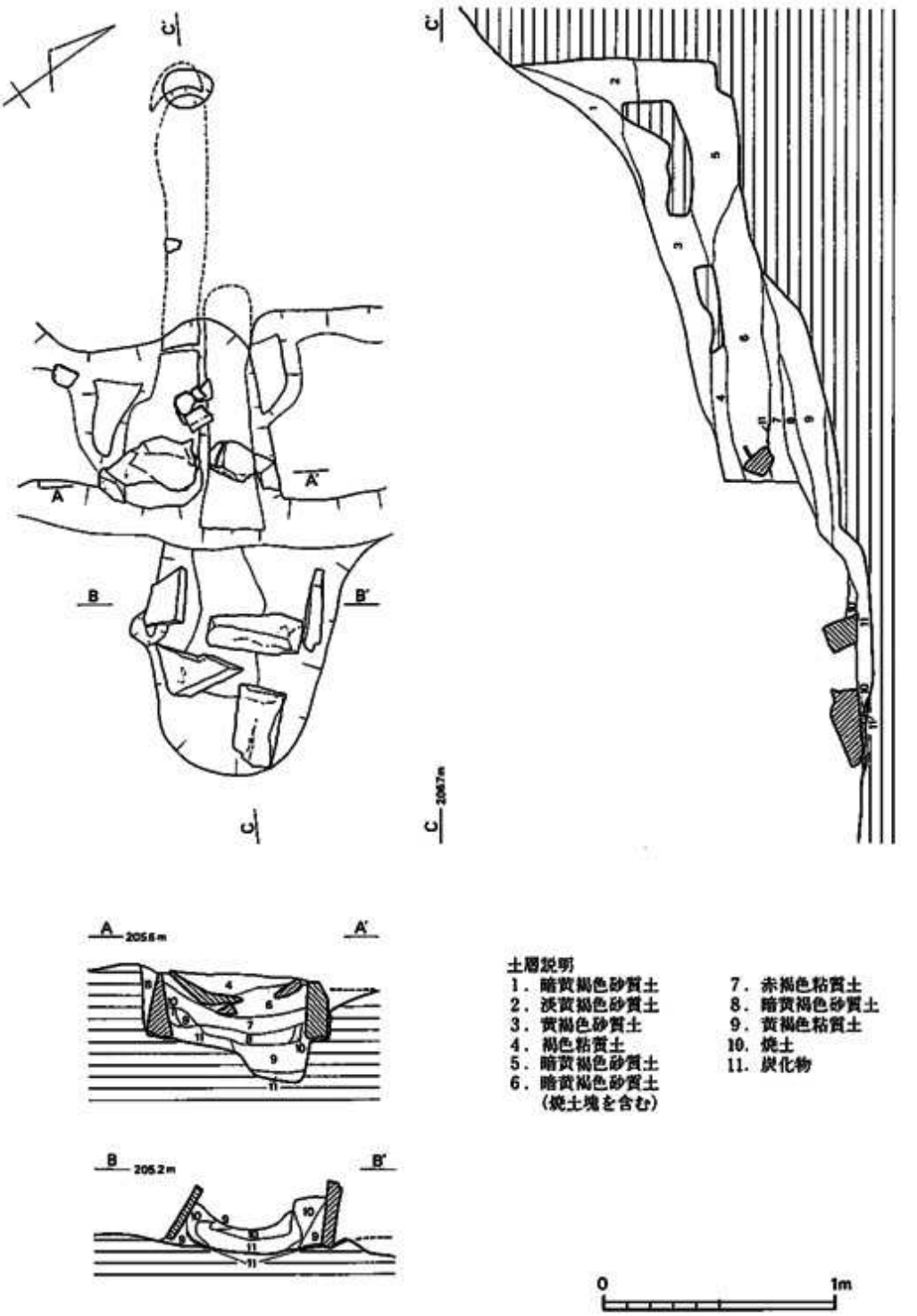
甕形土器（６～８）　いずれの口縁部も頸部から緩やかにカーブして外上方にのび，端部はやや尖り気味に丸く終わる。調整は６の口縁部内外面は横ナデ，体部外面は横位のハケ調整，内面ヘラケズリである。７は口縁部内外面及び体部外面は摩滅が著しいため不明，体部内面はヘラケズリ。８は口縁部外面はナデ，内面は調整不明。焼成は６が良好で，７・８は不良である。胎土はいずれも砂粒を多く含む。

須恵器

杯身（９）　口縁部受部は緩やかに内湾し，立上がり部とともに短くのびる。体部から底部にかけては緩やかにカーブし，底部はやや丸くなる。調整は内面及び口縁部外面はロクロナデ，体部外面はヘラケズリ後ナデ，底部外面は不定方向のナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を少量含む。

鉄製品

刀子（73）切先を欠損している。残存長6.8cm，棟幅２～３mmで，関はない。棟はほぼ直線的で，刃部はやや外ぞりする。



第3－6図　SB3・4カマド実測図（1：30）

ＳＢ４（第３－４図，図版３－７～11）

ＳＢ３に先行する竪穴住居跡で，南壁と西壁の一部が残存する。床面についても壁際から最大幅75cmが残存するのみで，本来の住居の規模等は不明である。南壁と西壁の残存長はそれぞれ2.1mと5.15mである。柱穴については明らかではない。

住居跡南西隅から約2.3m北側に寄った付近の西壁でカマドを検出した。カマドの袖部は石を立てて構築し，北側の袖石はＳＢ３のカマドの煙道壁に利用されたためかやや北側に倒れかけた状況であった。また南側の袖石に接して天井石と考えられる石が内側に倒れた状況で検出した。火床は北半部をＳＢ３の煙道が切っているため幅は明らかではないが，長さは65cmである。煙道部はトンネル状となり，天井部が残存する。長さは1.21mで，煙出しにかけてほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物には若干の土師器がある。

出土遺物（第３－17図，図版３－27）

土師器

甕形土器(10・11)　ともに口縁部はやや分厚い頸部から緩やかに外反して外上方にのび，端部は矩形を呈する。調整はともに口縁部内外面横ナデ，内面の頸部直下から下方はヘラケズリである。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。

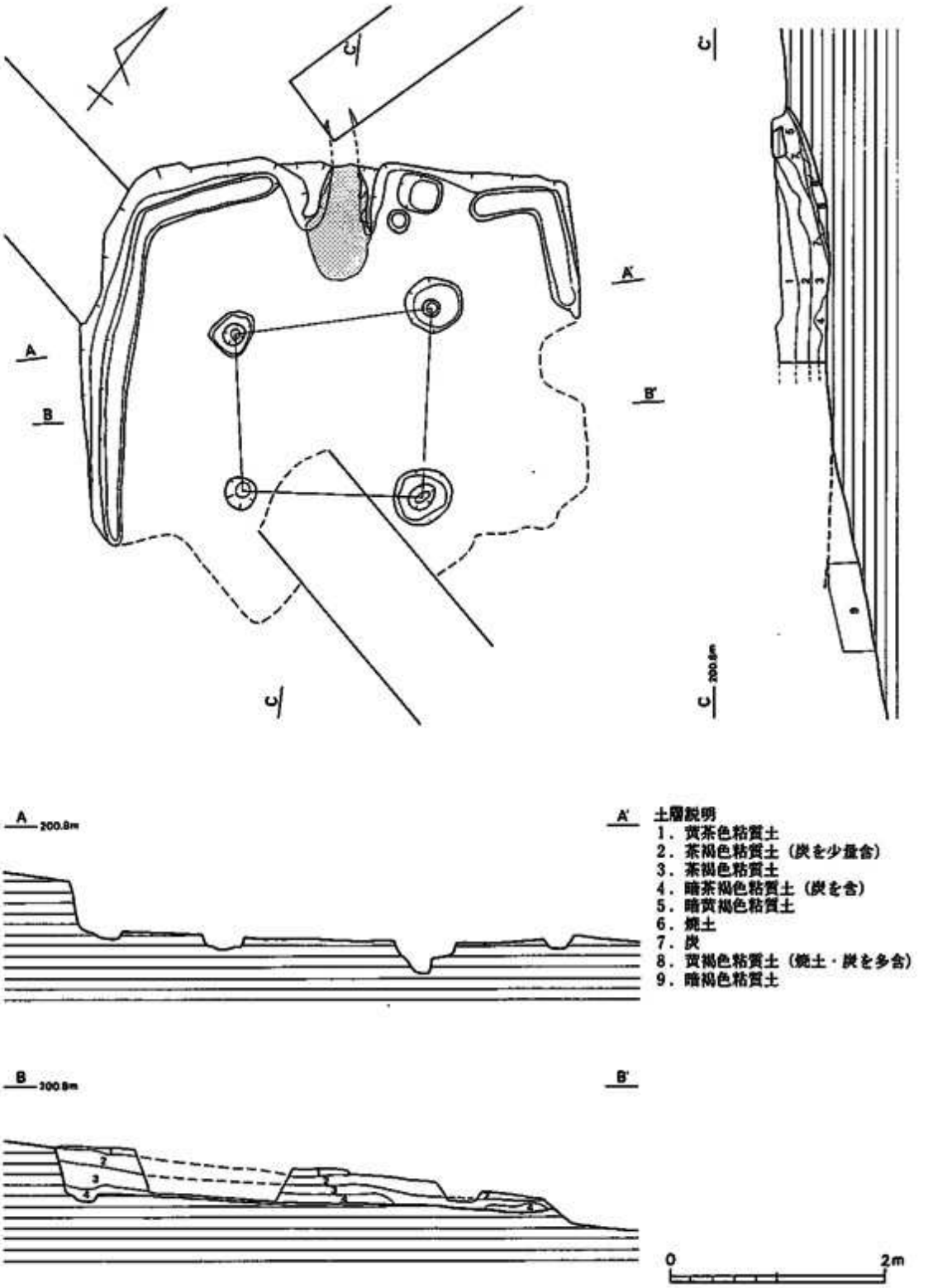
ＳＢ５（第３－７図，図版３－12・13）

ＳＢ３の南東側約10mで検出した竪穴住居跡で，北及び東側にはＳＸ１・２・４・６が近接して存在する。住居跡の北東壁の大半と南東壁はすでに流失し，残存する北西壁と南西壁のそれぞれの長さは4.1mと3.4mである。壁高は南西隅で約50cmで，壁はほぼ垂直に掘り込まれている。住居跡の床面はほぼ平坦で，北西壁と南西壁の壁際には幅20～25cm，深さ約５cmの壁溝が廻っている。住居跡の残存床面積は約12.6㎡である。主柱穴は４本で，柱穴の規模は径30～55cm，深さ10～25cmで，柱穴間の距離は1.45～1.85mである。主柱穴のうち南隅の柱穴を除いて中央に柱痕らしき痕跡が認められた。

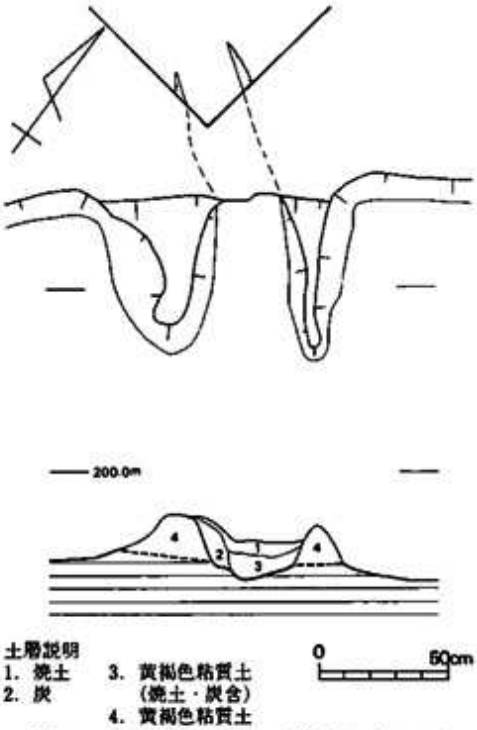
一方，住居跡北西壁の中央付近でカマドを検出した。カマドの袖部は粘土で構築したもので，袖部の規模は幅約１m，長さ約1.2mである。火床は明確ではないものの，長径1.05m，短径0.65mの範囲で炭と焼土が広がる箇所を確認した。煙道はトンネル状で，長さ約1.3mあり，煙出しにかけて緩やかに立ち上がっている。

遺物は覆土中から土師器・須恵器が少量出土した。

出土遺物（第３－17図，図版３－27）



第３－７図　ＳＢ５実測図（１：60）（アミ目は焼土・炭）



第3－8図　SB5カマド実測図（1：30）

土師器

甕形土器（12）　口縁部は頸部から緩やかにカーブして外反して立ち上がり，端部はやや尖り気味となる。体部にかけては緩やかにカーブして下方に続く。調整は口縁部内外面横ナデ，体部外面縦位のハケ，内面ヘラケズリである。焼成は普通で，胎土は砂粒を多く含む。

甑（13）　体部外面に牛角状の把手が付く。体部は直線的に下方に続く。調整は体部外面縦位のハケ，内面ナデで，把手付近の内面には指頭による押圧痕が認められる。把手はナデである。焼成は普通で，胎土は砂粒を多く含む。

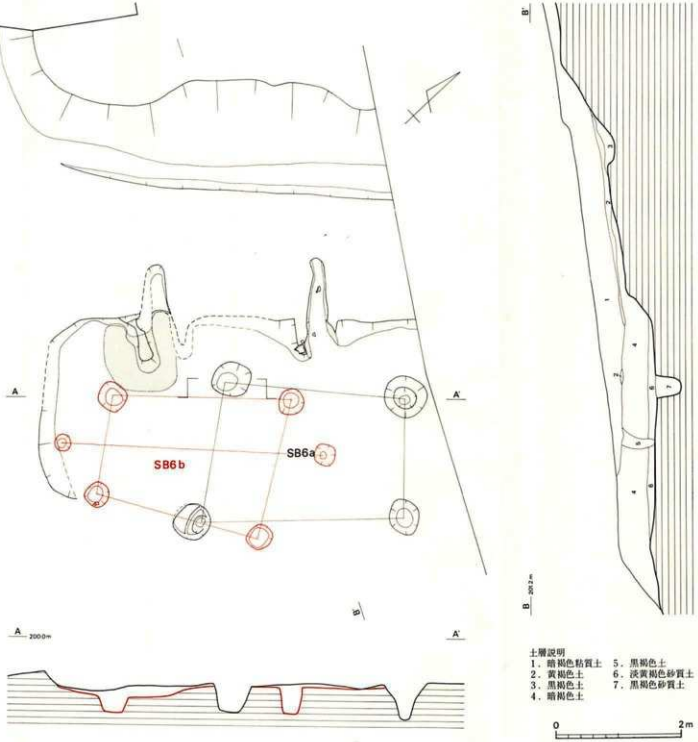
須恵器

杯身（14～16）　14の受部は短く外上方にのび，立上がり部は外湾気味に立ち上がる。体部から底部にかけては緩やかにカーブし，底部は丸くなる。調整は口縁部及び体部内外面ロクロナデ，底部は内面ロクロナデ，外面ヘラケズリである。15の受部は短く外方にのび，立上がり部は短く直線的に内傾してのびる。体部はややカーブして下方に続き，底部との境は明瞭である。底部は平底となる。調整は内面及び口縁部外面・体部上半部外面がロクロナデ，体部下半部から底部外面にかけてはヘラケズリである。焼成は良好で，胎土は砂粒を少量含む。16の受部は短く外方にのび，立上がり部は直線的に内傾して立ち上がる。体部は緩やかにカーブして下方に続き，底部との境は明瞭である。底部は平底である。調整は内面及び口縁部・体部外面ロクロナデ，底部外面はヘラケズリである。

SB6a・6b（第3－9図，図版3－14・15）

SB5の北東側約11mで検出した2軒が重複する竪穴住居跡である。2軒の住居跡の呼称は時期的に新しい住居跡を6a，古い住居跡を6bとした。

SB6aは住居跡の北半部が調査区外にのびているため，本来の規模は明確でない。壁高は北西壁の中央付近で約30cmである。床面は平坦で，厚さ10～15cmの淡黄褐色土で貼



第３－９図　ＳＢ６ａ・６ｂ実測図（１：60）（アミ目は焼土・炭）

床している。また壁際には壁溝等は認められない。主柱穴は４本で，その規模は径50～75cm，深さ40～65cmであり，柱穴間の距離は1.85～3.25mである。

住居跡北西壁の中央付近でカマドを検出した。カマドの袖部は粘土で構築し，袖部の幅は約60cm，長さ約50cmである。火床は明確ではないが，焚口部の周辺にわずかに焼土や炭の広がる部分を認めた。煙道部は長さ約１mで，煙出しにかけては緩やかに立ち上がる。

一方，ＳＢ６ｂはＳＢ６ａの南側に位置する住居跡で，北半部がＳＢ６ａと重複している。住居跡本来の規模は明らかではないが，柱穴の配置状況からＳＢ６ａと比較してやや規模の大きな住居跡であったと考えられる。南西壁での壁高は約25cmで，床面はほぼ平坦である。柱穴は６本確認したが，このうち北東側と南西側に突出した２本の柱穴は支柱的なものと考えられる。主柱穴の規模は径40～45cm，深さ25～40cmである。

住居跡の西隅から北側に約１m寄った位置でカマドを検出した。このカマドも粘土で袖部を構築している。焚口部の幅は約70cmで，火床については確認できなかったが，焚口から南側袖にかけて焼土面を確認した。煙道は長さ約80cmで，煙出しにかけて緩やかに立ち上がる。

住居跡覆土中から若干の土師器・須恵器が出土した。

出土遺物（第３－18図，図版３－27）

土師器

甕形土器（17）　ＳＢ６ａのカマド煙道部から出土したもので，口縁部は頸部から緩やかに屈曲して外上方にのび，端部は丸く終わる。体部は頸部から緩やかにカーブして下方に続く。調整は口縁部外面ナデ，内面横位のハケ，体部外面は器面の摩滅が著しいため不明，内面はナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。

須恵器

杯蓋（18）　ＳＢ６ｂから出土したもので，天井部から体部にかけては緩やかにカーブして下方に続き，端部は丸く終わる。調整は外面は器面の摩滅が著しいため不明，内面はロクロナデである。焼成は不良で，胎土は砂粒を少量含む。

b.段状遺構

ＳＸ１（第３－10図）

ＳＢ６の西側で検出した段状遺構で，北側は調査区外にのびている。また西側については試掘溝によって分断されているため明確ではないが，ＳＸ６に続く可能性も考えられる。平坦面の幅は，ＳＢ６ともっとも近接した場所で2.5mで，西側のＳＸ２との段差は約85

cmである。この落ち際で幅45～55cm，深さ約10cmの溝状の遺構を検出した。

またＳＸ１は土層断面を検討した結果，ＳＢ６に伴う遺構であることが明らかとなった。

これらのことからＳＸ１の性格についてはＳＢ６の背面カットとして機能していたと考えられ，斜面上方からの土砂や水の流入を防止するために掘削された可能性が考えられる。

遺物は覆土中から土師器・須恵器が少量出土した。

出土遺物（第３－18・19図，図版３－28～31）

土師器

甕形土器（20～24）　20・21はともに頸部から緩やかに外反して外上方に長くのび，端部は平坦面をなす。体部は頸部から緩やかにカーブして下方に続く。調整はともに口縁部外面ナデで，21は指頭圧痕を残す。内面は横位のハケで，体部外面は斜位のハケ，内面は20がナデ，21が縦位のハケである。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。22～24の口縁部は頸部から緩やかに外反して短くのび，端部は丸く終わる。調整はいずれも口縁部内外面横ナデ，体部外面は縦位のハケ，内面は22・23は器面の摩滅が著しいため不明で，24は横位のヘラケズリ。焼成はいずれも悪く，胎土は砂粒を多く含む。

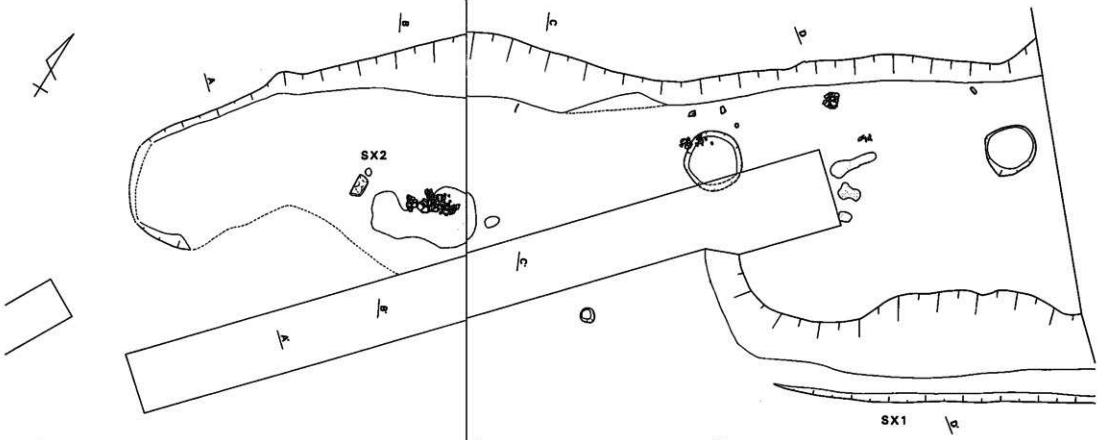
甑（25～27）　25・26の体部はいずれも直線的に外上方にのび，口縁部はやや内面が肥厚し，端部は丸く終わる。25の体部の２か所に偏平な短い牛角状の把手がつく。調整は25が口縁部内外面横ナデ，体部外面縦位及び斜位のハケ，内面口縁部直下が横位のヘラケズリ，体部中位以下が縦位のヘラケズリ。把手は摩滅のため不明。26は体部外面が縦位のハケで，それ以外は器面の摩滅が著しいため不明。焼成は25が良好で，26は不良。胎土はいずれも砂粒を多く含む。27の体部は緩やかにカーブする。体部外面には短い牛角状の把手がつく。調整は外面は器面の摩滅が著しいため不明，内面は縦位のヘラケズリ。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。

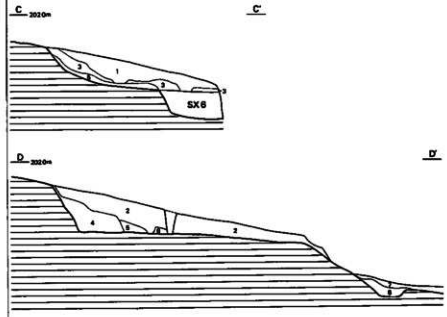
須恵器

壺（28）　口縁部は一旦外反して立ち上がった後，内湾気味に端部に至る。端部は丸く終わる。調整は内外面ともロクロナデ。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。

甕（29）　体部の一部で外面に細かな格子目状のタタキ，内面に同心円状のタタキを残す。焼成は良好で，胎土は砂粒を少量含む。

杯蓋（30・31）　30は天井部から体部にかけて緩やかにカーブし，体部から口縁部にかけては強く屈曲して垂下する。端部は丸く終わる。調整は天井部外面ヘラケズリ，体部外面から内面にかけてはロクロナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を少量含む。31は天井部から口縁部にかけて緩やかにカーブして下方に続き，端部は丸く終わる。調整は天井部





第３－10図　ＳＸ１・２実測図（１：60）（アミ目は焼土）

内外面ともナデ，体部から口縁部にかけての内外面はともにロクロナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を少量含む。

杯身（32～34）　32の口縁部受部は外上方にのび，また立上がり部は内傾して直線的にのびる。体部は緩やかにカーブし，底部との境は比較的明瞭である。底部はやや丸みを持つ。調整は底部外面がヘラケズリ，内面から体部外面にかけてロクロナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。33の口縁部の受部と立上がり部はいずれも短く斜上方にのびる。体部から底部にかけては緩やかにカーブして続き，底部は丸みを持つ。調整は内面及び体部外面にかけてロクロナデ，底部外面にかけてはナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を少量含む。34は高台がつく杯身で，底部は平底で，体部は底部からやや内湾気味に外上方にのびる。底部外面には断面方形のやや外踏ん張りした短い高台がつく。調整は内外面ともロクロナデ。焼成は良好で，胎土は砂粒を少量含む。

高杯（35）　脚柱部から脚端部にかけてはラッパ状に開き，端部は短く垂下する。調整は内外面ともロクロナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を少量含む。

ＳＸ２（第３－10図，図版３－16・17）

ＳＸ１の西側で検出した段状遺構で，南側ではＳＸ６と重複する。また北側は調査区外にのびている。平坦面の規模はＳＸ１の北西側幅約3.3mで，西側との段差は20～70cmである。検出した平坦面の中央からやや西側に寄った付近で1.0×1.6mの範囲で焼土が集中する箇所を検出し，その周辺部から土師器の甕などの遺物が出土した。またＳＸ２の性格については，柱穴や壁溝などは検出していないものの，焼土の集中する箇所が認められることから，なんらかの屋外作業場的性格をもっていた可能性が考えられる。

出土遺物（第３－20・23図，図版３－31・32・36）

土師器

甕形土器（36～38）　いずれも口縁部は頸部から緩やかに外反して外上方にのび，端部は矩形を呈する。体部は頸部から緩やかにカーブして下方に続き，36は胴長となる。調整はいずれも器面の摩滅が著しいため不明の部分が多いが，36・38は体部外面縦位及び斜位のハケで，内面は37がナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。

鉢形土器（39）　口縁部は頸部から屈曲して外上方にのび，端部は丸く終わる。体部は頸部から緩やかにカーブして下方に続き，底部は平底気味である。調整は口縁部内外面がナデであるほかは，器面の摩滅が著しいため不明。焼成は普通で，胎土は砂粒を多く含む。

須恵器

杯蓋（40）　天井部はやや丸みを持ち，体部にかけては緩やかにカーブして続き，口縁部にかけては屈曲してやや内傾気味に垂下する。端部は丸く終わる。調整は天井部外面がヘラケズリで，ほかはロクロナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を少量含む。

壺（41）　口縁部は頸部から強く屈曲して外上方に短くのび，端部は平坦面をなす。体部は球形を呈するが最大径は中位から上方にあり，外面に浅い１条の沈線が廻る。底部は丸底である。調整は外面及び内面の口縁端部から肩部にかけてロクロナデ，内面の肩部から下方はナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を少量含む。

高杯（42）　脚柱部で，外面に浅い１条の沈線が廻る。調整は内外面ともロクロナデで，焼成は良好で，胎土は砂粒を少量含む。

石器

石斧（71）　太型蛤刃石斧で，ほぼ完存している。長さは14cm，幅5.4cmで，重さは447ｇである。石質は高田流紋岩（流紋岩質凝灰岩）の可能性がある。

ＳＸ３（第３－11図，図版３－18）

調査区東端付近で検出した段状遺構で，規模は長さ8.5ｍで，段差は約20cmである。幅については平坦面が緩やかに傾斜して調査区外に続くため明確ではない。この平坦面では後述するＳＥ１や柱穴を検出したが，柱穴そのものの配置には規則性は認められず，建物跡とは認定できない。このためＳＸ３の性格については不明といわざるを得ない。

遺物は覆土中から土師器・須恵器が出土した。

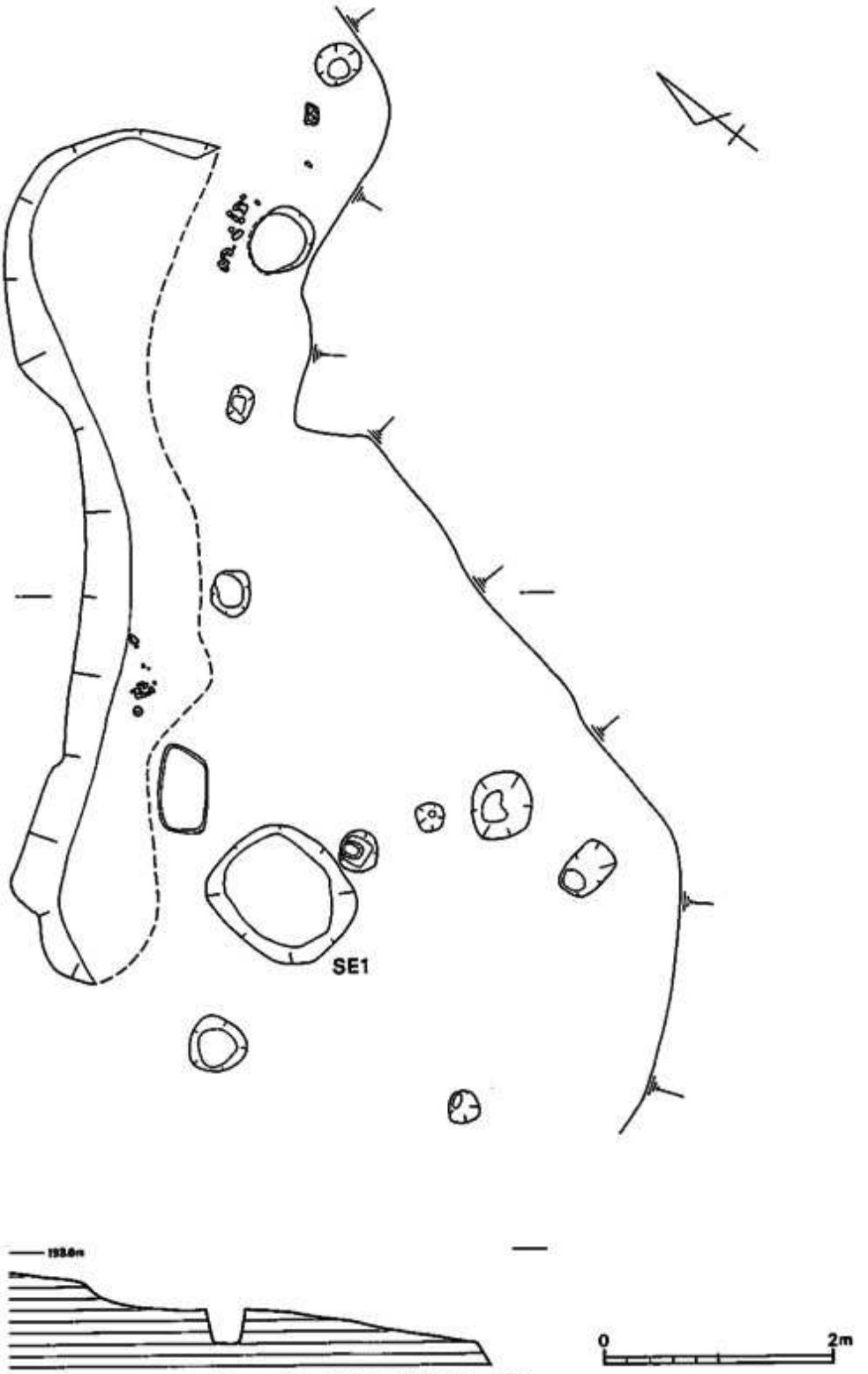
出土遺物（第３－21図，図版３－33）

土師器

甕形土器（43～45）　43・44の口縁部は頸部から「く」字状に屈曲して外上方にのび，中位がやや肥厚し，端部は矩形を呈する。調整は43が口縁部外面ナデ，頸部から体部にかけての外面斜位のハケ，口縁部内面横位のハケ，体部にかけてはナデである。44は外面は器面の摩滅が著しいため不明，内面は横ナデで，口縁部下半に横位のハケ目が認められる。焼成はともに良好で，胎土は砂粒を多く含む。45の口縁部は頸部から外湾気味に立ち上がり，端部は矩形を呈して平坦面をなす。調整は外面は器面の摩滅が著しいため不明，内面は口縁部は横位のハケ，体部はナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。

須恵器

杯蓋（46）　天井部は丸みを持ち，体部にかけては緩やかにカーブして下方に続き，口縁



第3－11図　ＳＸ３実測図（１：60）

部は体部から屈曲して垂下する。端部は丸く終わる。調整は天井部外面へラケズリ，体部外面から内面にかけてはロクロナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。

杯身（47～49）　47・48の口縁部受部は短く外上方にのび，立上がり部は内傾して直線的にのびる。49の立上がり部はやや内湾気味に短くのびる。体部はいずれも緩やかにカーブし下方に続く。48の底部は平底である。調整はいずれも体部外面から内面にかけてロクロナデで，48の底部外面はヘラケズリである。焼成はいずれも良好で，胎土は砂粒を多く含む。

甑（50）　体部はやや偏平な球形を呈し，肩部には1条の浅い沈線が廻る。体部中位に円孔が1か所穿たれている。調整は外面体部上半部ロクロナデ，下半部ヘラケズリ後ナデである。内面は不明。焼成は良好で，胎土は砂粒を少量含む。

ＳＸ４（第３－12図，図版３－19ａ）

ＳＸ３の南西側に近接して検出した等高線に平行した段状遺構である。南西端は「Ｌ」字状になって終わっているが，北東端については明確でない。平坦面の状況は不明確であるが，残存部分の状況で長さは約４ｍ，斜面上方側との段差は約50㎝である。この平坦面についてもＳＸ３同様にほかに伴う遺構がないことから，その性格については不明である。

遺物は覆土中から少量の須恵器が出土した。

出土遺物（第３－21図，図版３－33）

須恵器

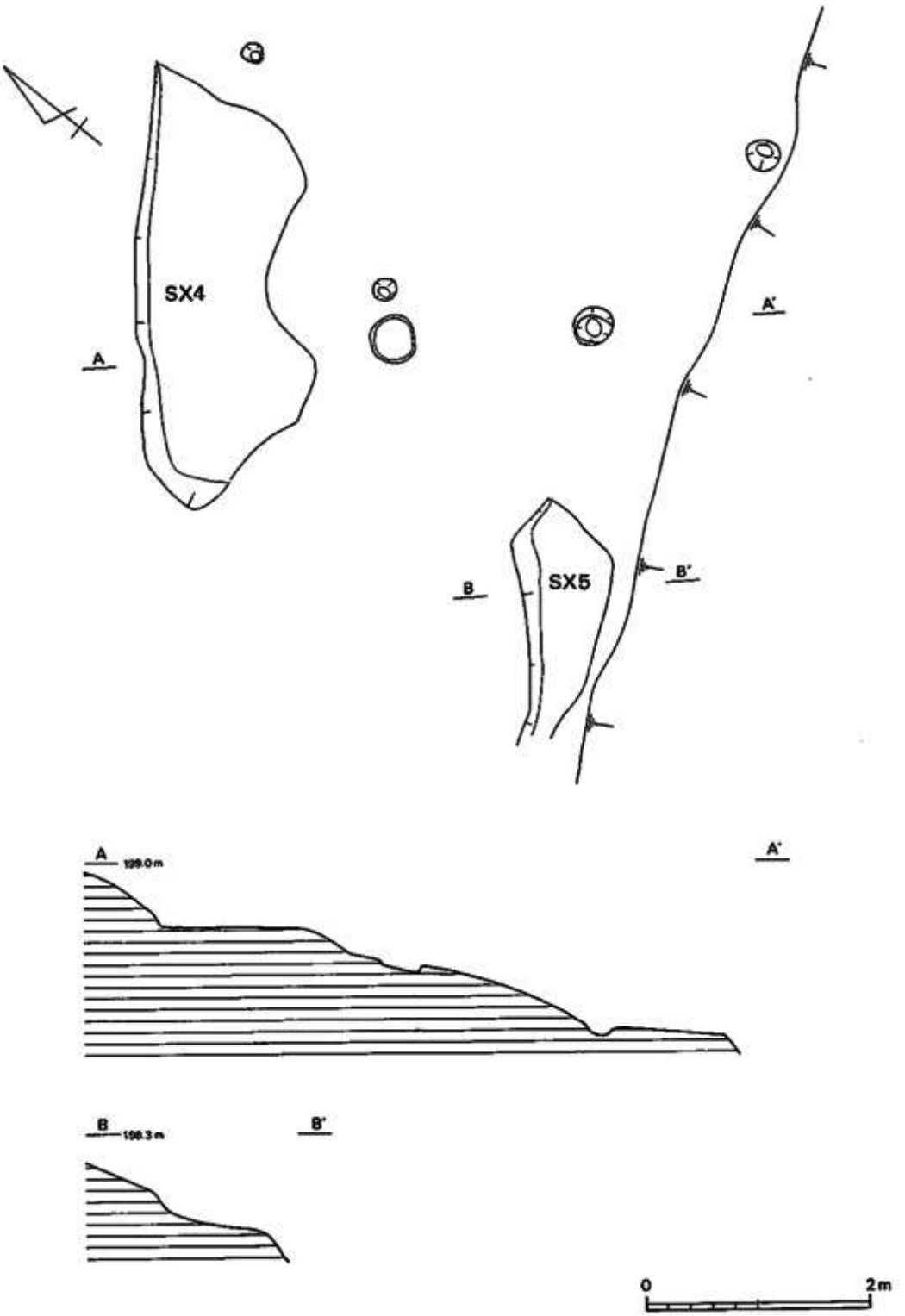
杯身（51）　口縁部受部は外方に短くのび，立上がり部は内傾して短く上方にのびる。体部は緩やかにカーブして下方に続き，底部は平底となる。調整は体部外面から内面にかけてロクロナデ，底部外面はヘラケズリ後，不定方向のナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を少量含む。

ＳＸ５（第３－12図，図版３－19ｂ）

ＳＸ４の南側，調査区際に位置し，等高線に平行した段状遺構である。段状遺構の北東端は「Ｌ」字状に屈曲して終わっているが，南西端については不明確で，本来の規模は明確でない。現存での長さは約2.2m，斜面上方との段差は約25㎝である。本遺構についてもＳＸ３・４同様に伴う遺構がないことから，その性格については不明である。

遺物は覆土中から少量の須恵器が出土した。

出土遺物（第３－21図，図版３－33）



第3－12図　ＳＸ４・５実測図（１：60）

須恵器

高杯（52）　脚柱部はラッパ状に緩やかにカーブして開き，端部にかけては内面がややくぼみ，端部は矩形を呈する。調整は内外面とも器面の摩滅が著しいため不明。焼成は良好で，胎土は砂粒を少量含む。

ＳＸ６（第３－13図，図版３－20）

ＳＸ２の南西側に位置する段状遺構である。段状遺構の南西端は「Ｌ」字状に屈曲して終わり，この付近から北東側約２ｍ寄った箇所でＳＸ２に壊されている。現存長は約7.4ｍ，ＳＸ２の平坦面との段差は約15cmである。遺構の南西端付近からは土師器などの遺物とともに，焼土の集中する箇所を検出した。このことから本遺構に関してはＳＸ２同様，屋外作業場的な性格の遺構と想定される。

出土遺物（第３－21・22図，図版３－33・34）

土師器

甕形土器（53・54）　53の口縁部は頸部から緩やかにカーブして外上方にのび，端部は矩形を呈する。体部は頸部から緩やかにカーブして下方に続く。調整は体部外面が縦位のハケ調整以外は器面の摩滅が著しいため不明である。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。54の口縁部は頸部から緩やかにカーブして外上方にのびる。体部は緩やかにカーブする。調整は頸部外面の一部縦位のハケ調整がみられ，体部内面がヘラケズリであるほかは器面の摩滅が著しいため不明である。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。

甑（55）　口縁部は頸部からわずかに屈曲した後外上方にのび，端部は矩形を呈する。体部は直線的に下方に続き，底部にかけては緩やかにカーブする。体部外面にはやや偏平な牛角状の把手がつく。調整は体部外面が縦位のハケ目である以外は器面の摩滅が著しいため不明である。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。

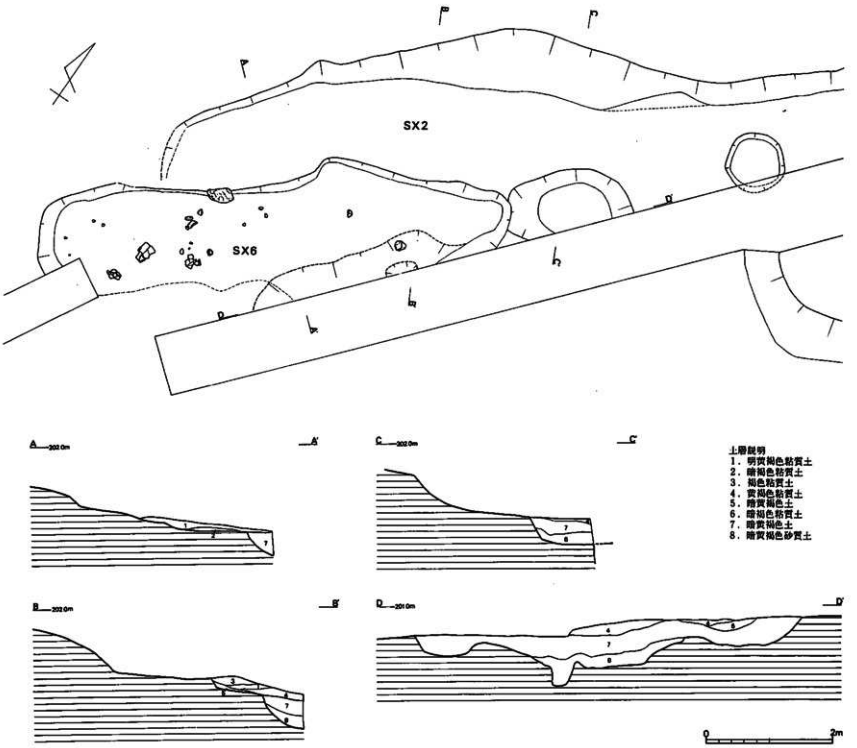
須恵器

杯蓋（56）　天井部はほぼ平坦で，体部にかけては緩やかにカーブし，口縁部にかけても緩やかにカーブする。端部は丸く終わる。調整は天井部外面がヘラケズリ後ナデで，それ以外はロクロナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。

ｃ．墓壙

ＳＫ１（第３－14図，図版３－21）

調査区最高所からやや南側に下がった斜面で検出した小型の石棺である。南東側の小口



第３－13図　ＳＸ６実測図（１：60）

はすでに欠失し，北西側小口と側石の一部が残存していた。

石棺の掘方の本来の状況は不明であるが，現存の状況は石材を安定させるために「コ」字状に掘り窪められている。

棺の内法規模は北西側小口幅は34cm，側石はともに約34cm残存している。石棺に使用された石材は小型の石が多く，基底部に使用された石はいずれも横長に使用している。小口石と側石との石の当て方は小口石の内側に側石を当てる方法である。また一部には蓋石との間隙を充填するための石が認められる。

本遺構に伴う遺物は出土していないため時期については明確ではないが，石材の組み方など棺の造りが雑なことや小型であることから，古墳時代の石棺と考えられる。

2）その他の遺構と遺物

ＳＫ２（第３－15図，図版３－22）

ＳＫ１の南東側約14mの丘陵斜面に位置する小規模で，ほぼ円形の土壙である。土壙の規模は長径0.81m，短径0.77m，深さ３～33cmで，底面はやや南東側に傾斜している。

土壙底面中央付近から蔵骨器と考えられる須恵器の壺が，やや南東側に傾いた状況で出土した。壺は口縁部を欠損しているが，中からは多量の骨片が出土した。ほかに出土した遺物はないが，時期については須恵器の年代観から９世紀頃と考えられる。

出土遺物（第３－18図，図版３－28）

須恵器

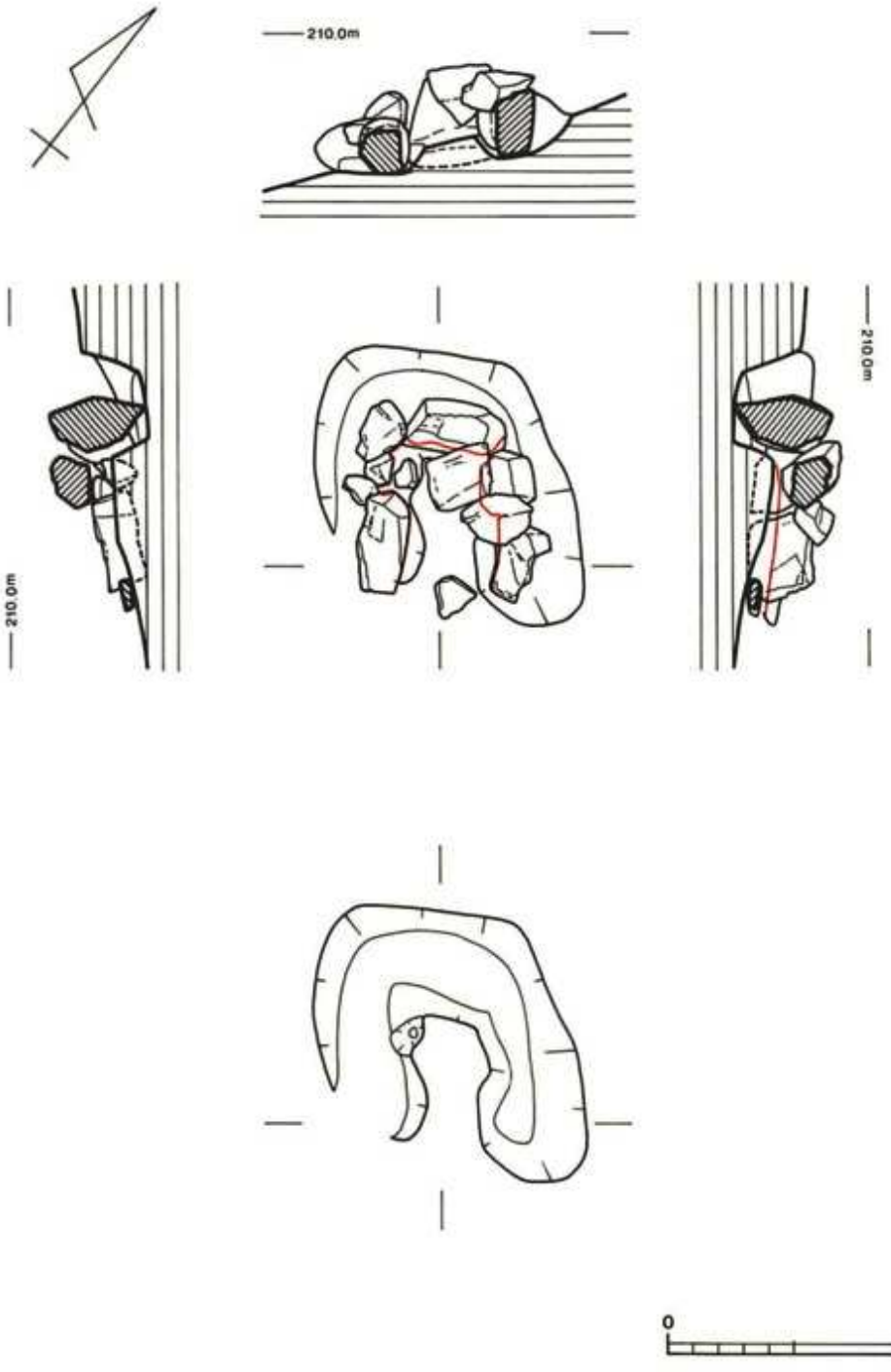
壺（19）　口縁部を欠損している。肩部は強く張り，底部にかけては直線的に下がる。底部との境界はヘラケズリして強く屈曲し，底部は中央がやや上げ底気味となる。調整は体部外面上半部はロクロナデ，下半部はヘラケズリ後粗いナデ，内面はロクロナデである。底部外面は内外面ともナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を少量含む。

ＳＥ１（第３－16図，図版３－23）

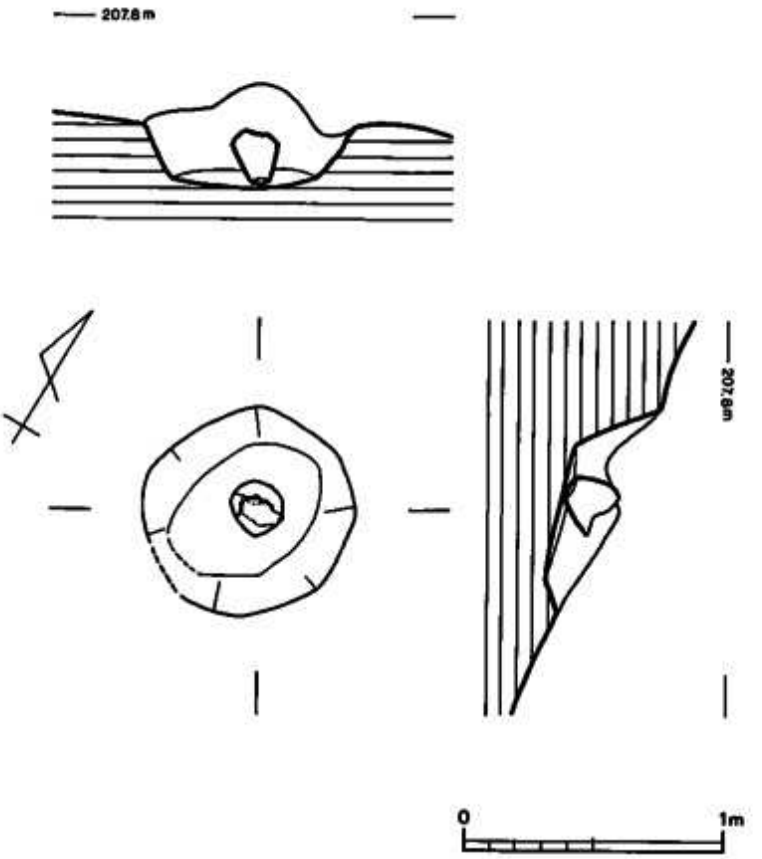
段状遺構ＳＸ３の南西側平坦面で検出した素掘りの井戸である。検出面での掘方の規模は長軸1.22m，短軸1.06m，深さ1.18mで，平面形は隅丸長方形である。掘方底面は中央がやや窪んでいるが，曲物などの水溜施設は備えていない。

調査区出土の遺物（第３－22・23図，図版３－34～36）

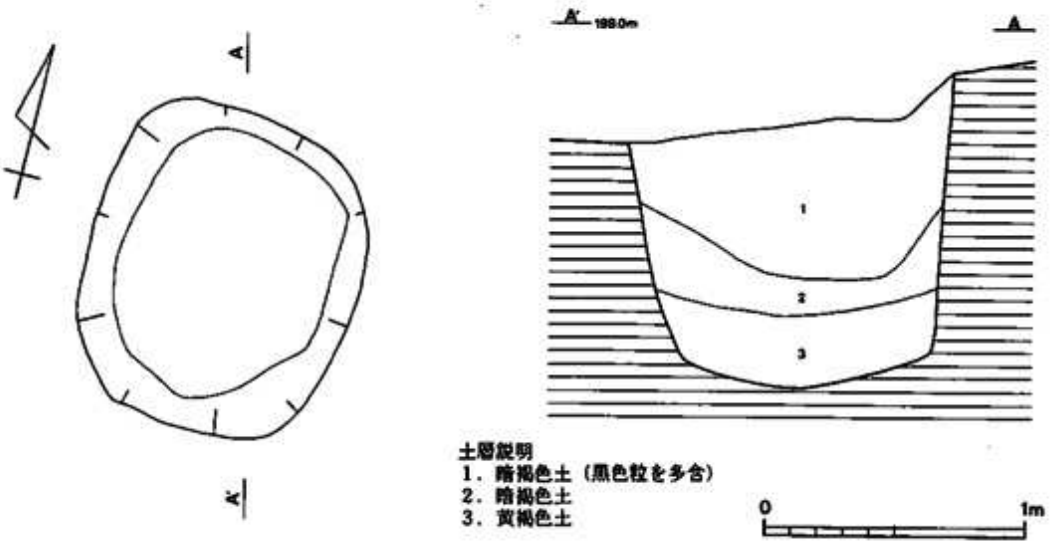
土師器



第3－14図　ＳＫ１実測図（１：30）



第３－15図　ＳＫ２実測図（１：30）



第３－16図　ＳＥ１実測図（１：30）

甕形土器（57）　口縁部は頸部から強く屈曲して外上方に外反しながらのび，端部は矩形を呈する。体部にかけては直線的に続く。調整は口縁部内外面横ナデ，体部外面はナデ，内面はヘラケズリである。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。

椀形土器（58）　体部から底部にかけては緩やかにカーブして下方に続き，底部は平底となる。調整は体部外面斜位はハケ調整，内面は横位から斜位のヘラケズリである。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。

須恵器

杯蓋（59～62）　59～61の天井部はやや丸みをもち，口縁部にかけてはやや外反する。また62の天井部は平坦で，体部から口縁部にかけては緩やかにカーブして続く。調整はいずれも天井部外面ヘラケズリ，体部外面から内面にかけてはロクロナデである。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。

杯身（63～68）　63～65の立上がり部は63が直線的に，64はやや外湾気味に，65が強く外湾気味にのびる。63の底部は平底となる。調整はいずれも内外面ともロクロナデ。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。66～68は高台の付く杯身である。高台はいずれも短く，67はほぼ垂直，66と68はわずかに外側に開く。調整はいずれも内外面ロクロナデで，焼成は良好であり，胎土は砂粒を多く含む。

高杯（69・70）　いずれも脚柱部である。中位には1条の凸帯が巡る。調整はいずれも内外面ともロクロナデである。焼成は良好で，胎土は少量の砂粒を含む。

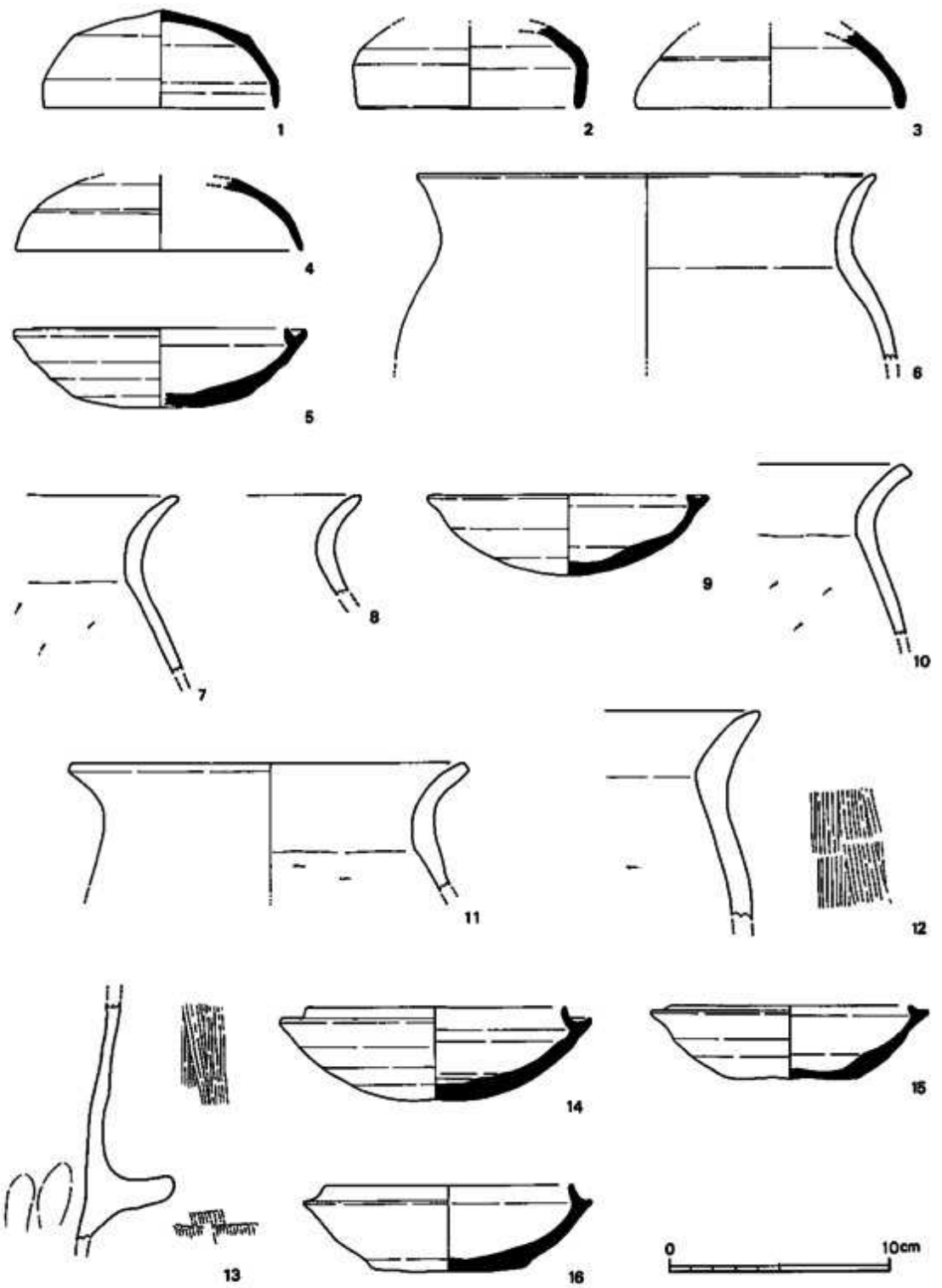
石器

砥石（72）　半分を欠損している。使用面は4面で，石質は無斑晶流紋岩である。重さは384gである。

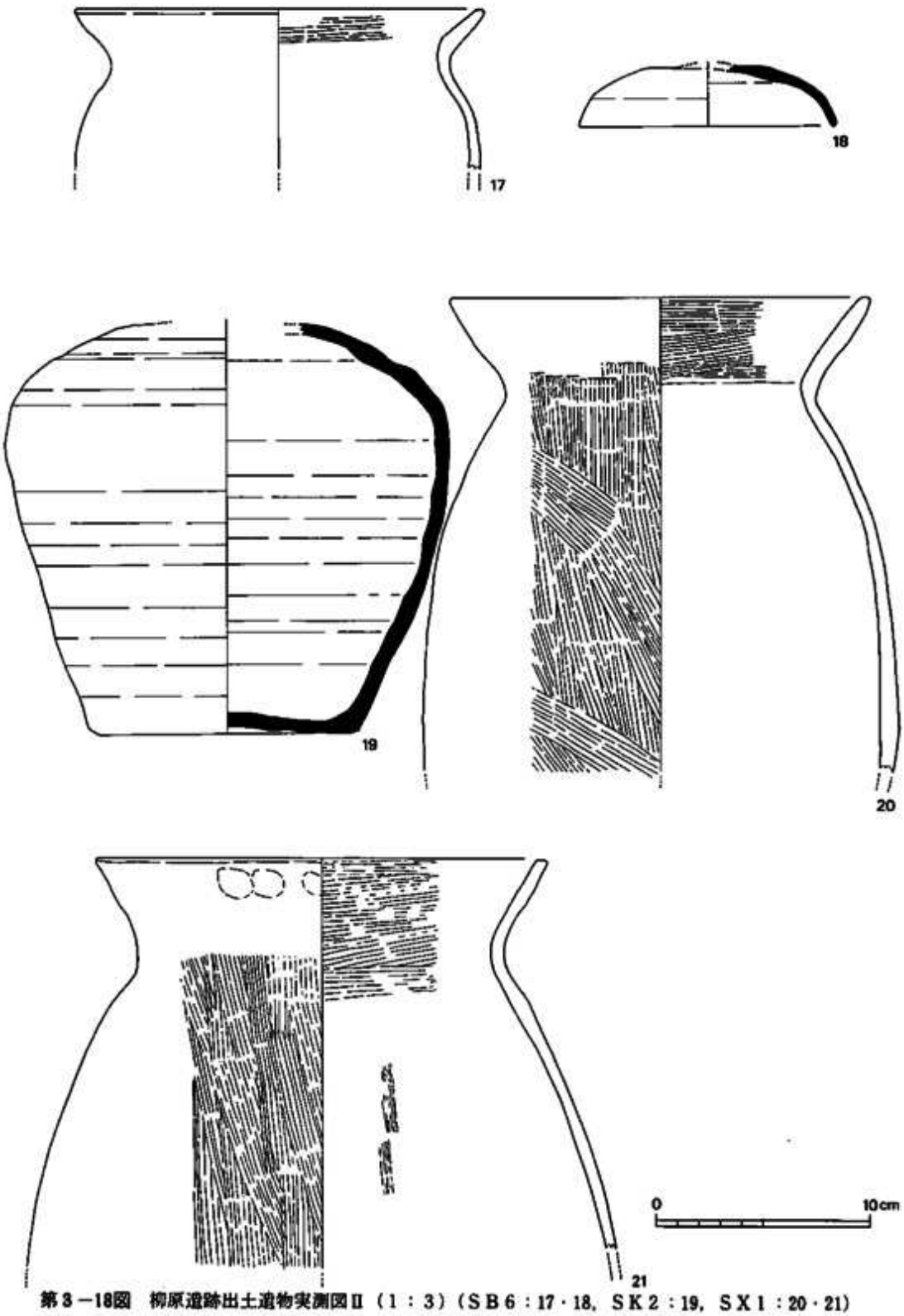
鉄器

鉄鏃（74）　方頭広根斧箭形式の鉄鏃で，全長は10.4cmである。刃部は平造りで薄手となる。刃部先端付近の幅は2.6cmで，篦被に向かって直線的に狭まる。茎断面は方形である。

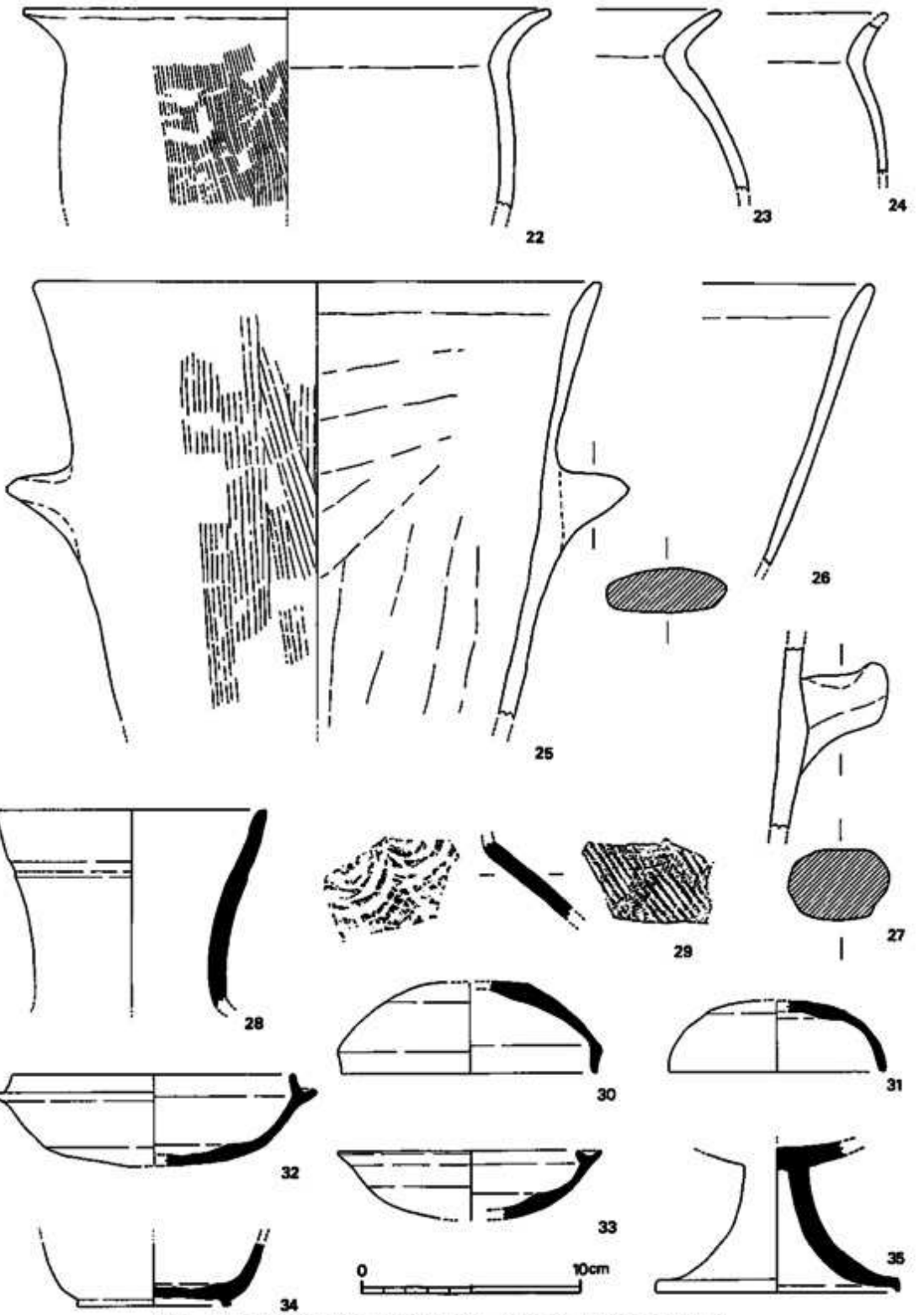
不明鉄器（75・76）　75は刀子状の鉄器で，残存長6.7cm，刃部幅1cmである。棟幅は2～3mmで，茎については不明である。76は断面方形の棒状の鉄器で，中空となっている。



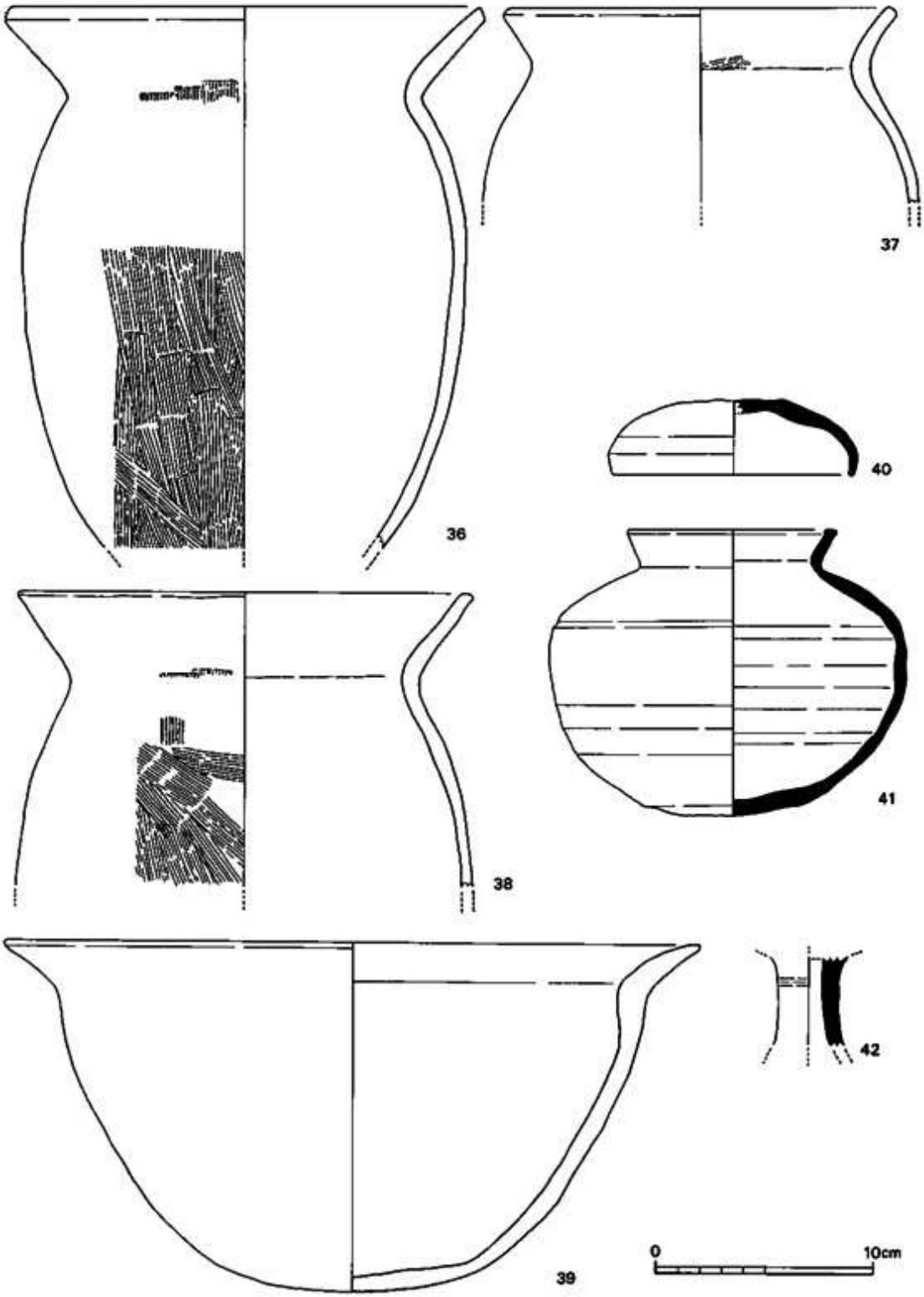
第３－17図　柳原遺跡出土遺物実測図Ⅰ（1：3）（SB1：1～3，SB2：4・5，SB3：6～9，SB4：10・11，SB5：12～16）



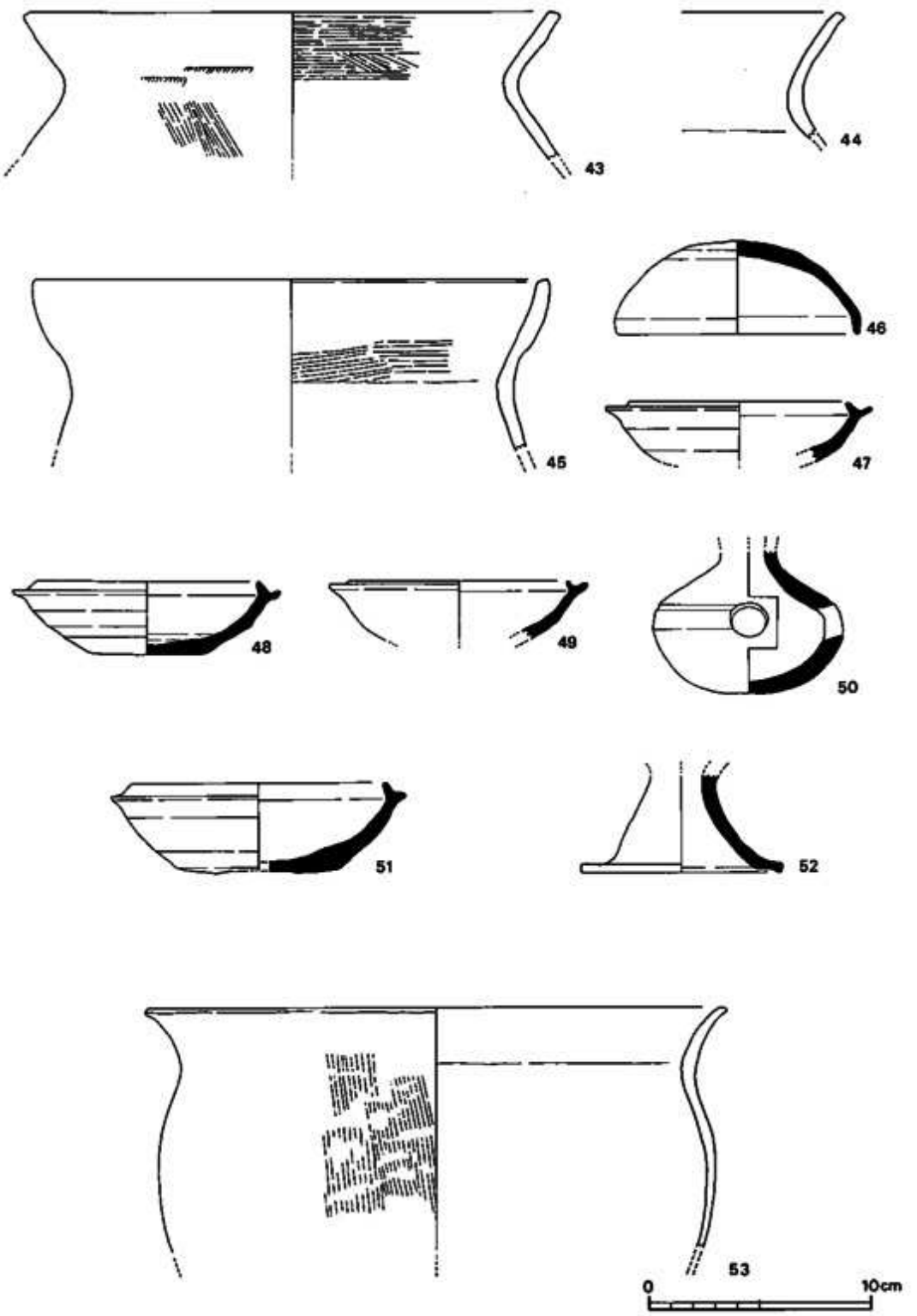
第3－18図　柳原遺跡出土遺物実測図Ⅱ（1：3）（SB6：17・18，SK2：19，SX1：20・21）



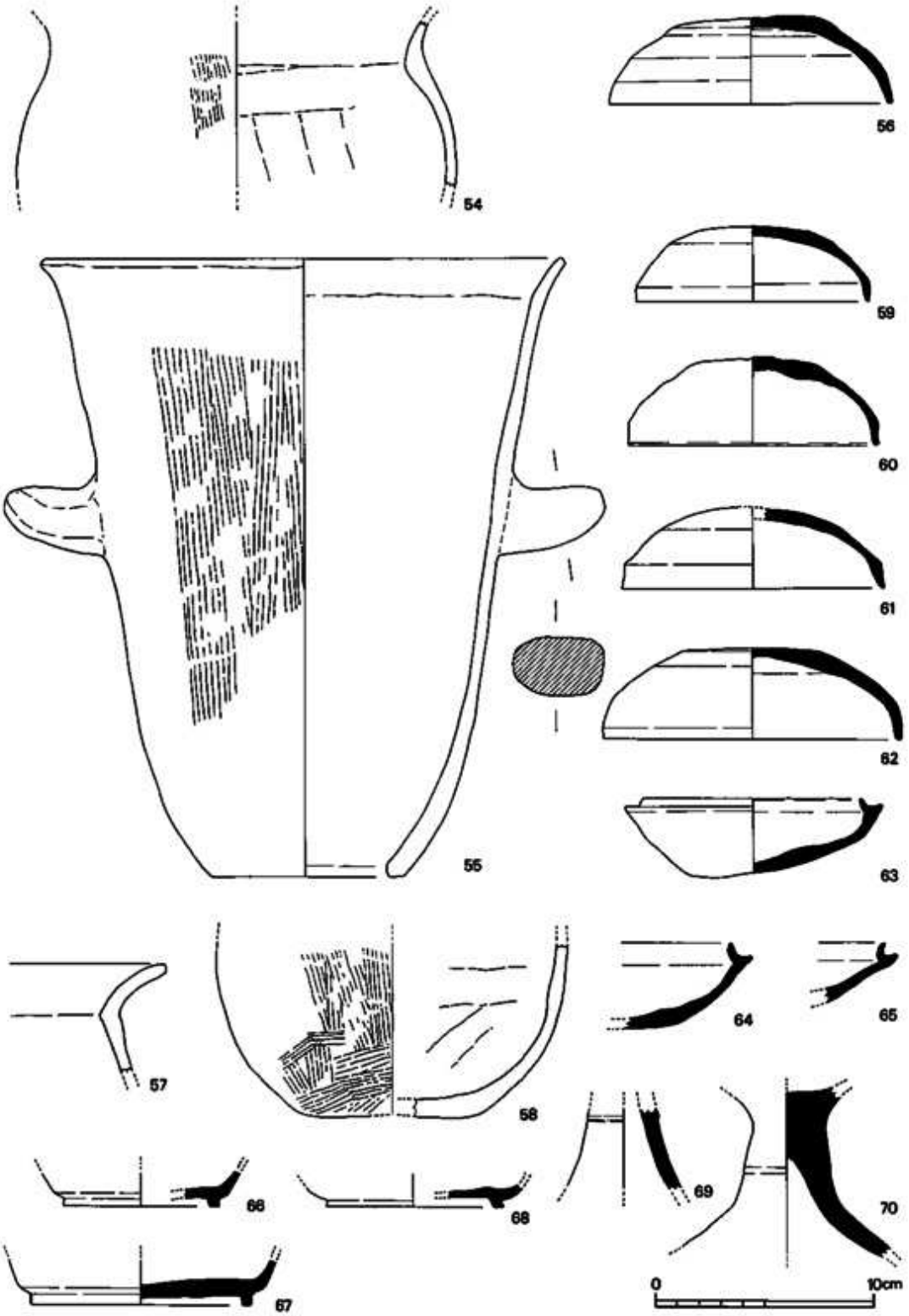
第３－19図　柳原遺跡出土遺物実測図Ⅲ（１：３）（ＳＸ１：22～35）



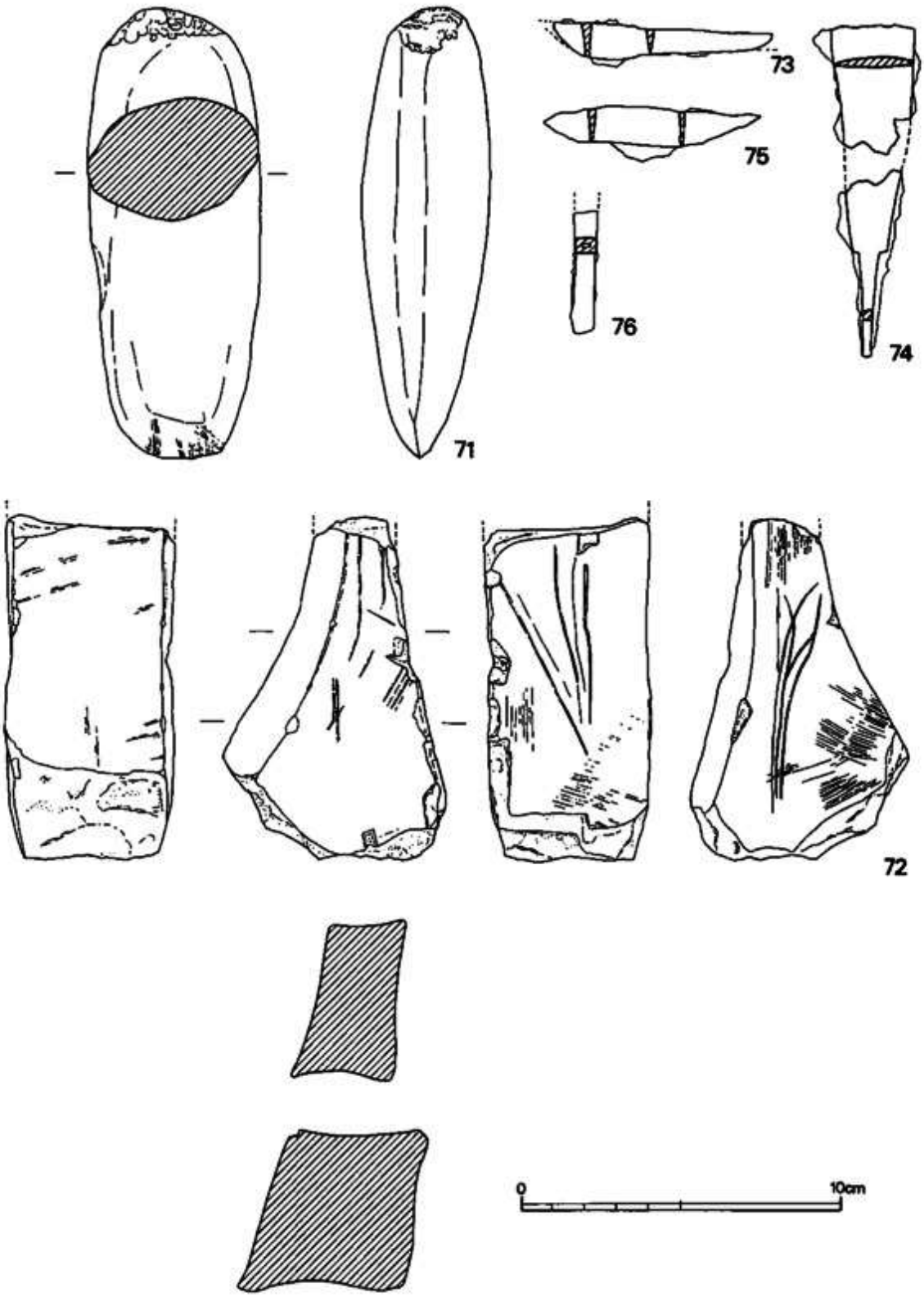
第３－20図　柳原遺跡出土遺物実測図Ⅳ（１：３）（ＳＸ２：36～42）



第３－21図　柳原遺跡出土遺物実測図Ⅴ（１：３）（ＳＸ３：43～50，ＳＸ４：51，ＳＸ５：52，ＳＸ６：53）



第３－22図　柳原遺跡出土遺物実測図Ⅵ（１：３）（ＳＸ６：54～56，調査区出土：57～70）



第３－23図　柳原遺跡出土遺物実測図Ⅶ（１：２）（ＳＢ３：73，ＳＸ２：71，調査区：72，74～76）

（4）小結

今回の調査においては古墳時代後期の集落跡を検出した。ここでは調査成果を整理してまとめとしたい。

まず，竪穴住居跡は建替えを含めて７軒検出した。これらの竪穴住居跡はいずれも谷尻方向に向いた東側斜面に造られている。このうち斜面中位にあるＳＢ１～４は周辺地形が急峻であることから住居の構築に際して，まず斜面を大きく掘り込み，その排土を斜面側に盛土することによって比較的広い平坦面を造成し，上屋を構築したと考えられる。

また住居跡の重複関係を見てみるとＳＢ２～４，ＳＢ６ａ・６ｂの計５軒に重複関係が認められる。これら重複関係にある住居跡から出土した遺物を比較するとさほどの時間差は認められず，比較的短期間のうちに建替えが行われたことが窺える。また同時期に３～４軒の住居が存在したと考えられ，これらが一つの世帯共同体を形成していたと想定できよう。近年同地域で発掘調査を実施し，本遺跡と時期的にも大差がない集落を検出した志村遺跡[1]や小谷黄幡遺跡[2]でも同様な傾向にあることから，当該期の当地域の生産規模ではこのような３～４軒を一つの単位とする集落が一般的であったことが窺えよう。

次に住居の構造についてみると，柱構造が明らかとなっているものについてはすべてが４本柱構造の住居跡である。また柱穴間の距離を見てみると等高線に沿う方向に柱間が広くとられており，一応この方向が棟方向であると想定できよう。

次にカマドに注目するとＳＢ１を除いた竪穴住居跡で造り付けのカマドを検出した。ＳＢ１についても試掘溝によって壊された床面で焼土や炭の広がりを確認していることから，カマドが存在したと推定される。これらのカマドの住居内における位置についてはいずれの住居跡においても山側の壁の中央付近に造られており，各住居におけるカマドの位置に共通性が認められる。このことと住居の棟方向が等高線に沿うこととを併せ考えると，これらのことが集落の立地に密接に関連したことが考えられよう。またカマドの焚口部の袖の構造を見ると，石を立てた構造のもの（ＳＢ３・４）と，粘土のみで構築したもの（ＳＢ２・５・６ａ・６ｂ）とに二分できる。しかし，これらカマドをもつ住居の構造及び規模等にはさほど差違は認められず，時期的な違いもほとんどないことから，カマドの構造面の違いが何に起因するものか明らかでない。

段状遺構の性格については本文中で述べたように，ＳＸ２とＳＸ６では焼土等の集中する箇所を検出したことから，屋外作業場的な性格が想定されるものの，焼土以外に何等他の遺構を伴うものでないことから，積極的にこのように解釈することはむつかしく，ここでは一つの可能性として示すにとどめたい。一方，その他の段状遺構については性格は不

明である。

最後に本遺跡の成立年代について，住居跡出土の須恵器を中心に検討したい。住居跡出土の須恵器のうち杯蓋は口径が10～12cmと小さく，天井部から口縁部にかけては緩やかにカーブし，稜をもたない。また杯身に関しても口径が小さく，器高もさほどないうえ，口縁部受け部の立ち上がりも小さくなっている。このような特徴からこれらの須恵器は陶邑編年[3]のⅡ－6期にあたり，よって本遺跡の成立年代は6世紀末～7世紀前半頃と考えられる。

以上検討してきたように本遺跡では6世紀末～7世紀前半にかけての集落を検出したが，当該期の集落についての資料は近年増加しつつあるもののいまだに少ない。当該期については横穴式石室を内部主体とする小規模な古墳が一般的に当地域でも認められる時期にあたり，このことと集落の成立とは密接に関連したと考えられる。今後相互の状況が明らかになるにつれて当地域の社会状況の変遷が明らかになると考えられよう。

（註）

（1） 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「志村遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅷ) 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第98集 平成4（1992）年

（2） 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「小谷貢幡遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅷ) 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第98集 平成4（1992）年

（3） 中村浩『和泉陶邑窯の研究－須恵器生産の基礎的考察－』 柏書房 昭和56（1981）年

a．調査前全景（西から）

b．調査前近景（北から）

a．ＳＢ１　検出状況（北から）

b．同上　掘り下げ状況（東から）

a．SB1　掘り下げ状況（北から）

b．同上　南北土層断面（東から）

a．ＳＢ１　遺物出土状況

b．同上

a．SB1　完掘状況（南から）

b．同上（西から）

a．古墳墳丘検出状況（南から）

b．墳丘全景（南から）

a．墳丘全景（西から）

b．溝検出状況（西から）

a．溝土層断面（西から）

b．溝内遺物出土状況（南から）

a．第1・2主体部検出状況（東から）

b．同上（北から）

a．第1・2主体部掘方掘り下げ状況（西から）

b．同上　棺床面検出状況（西から）

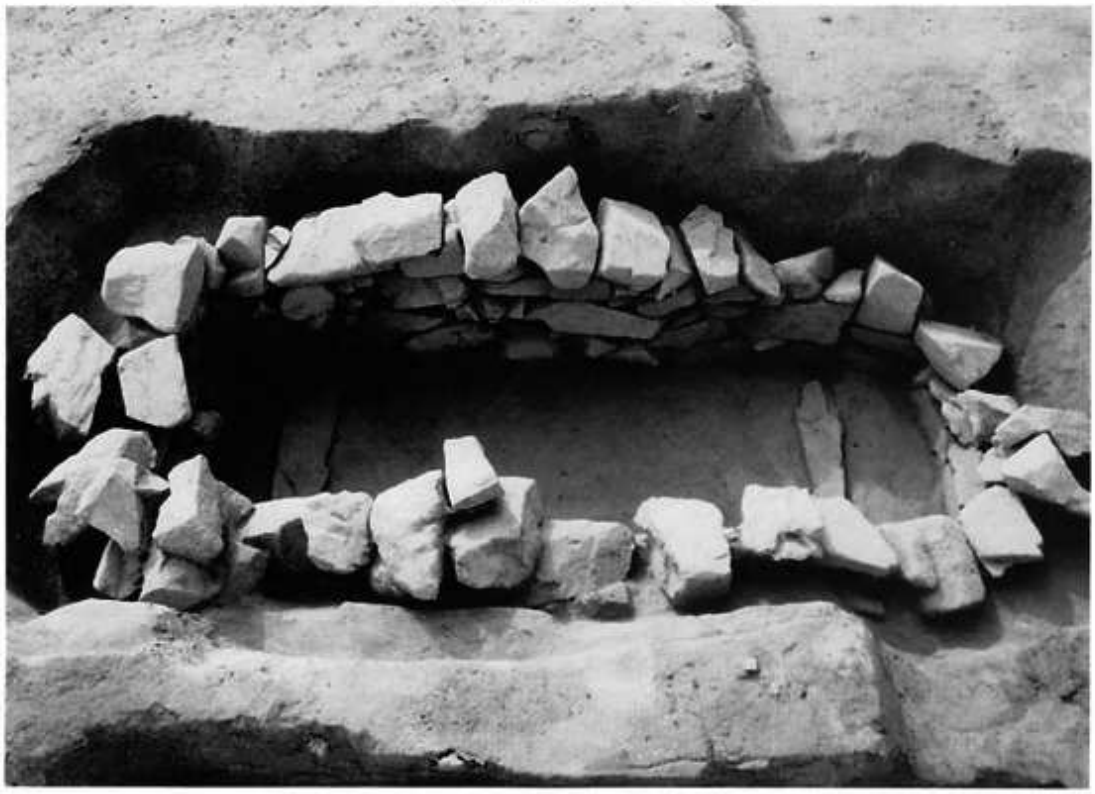
a．第1・2主体部基底石検出状況（西から）

b．同上　完掘状況（西から）

a．第1主体部検出状況（東から）

b．同上　掘方掘り下げ状況（南から）

a．第1主体部遺物出土状況（南から）



b．同上　棺床面検出状況（北から）

a．第1主体部東側小口石積状況（北西から）

b．同上　西側小口石積状況（南東から）

a．第1主体部基底石検出状況（西から）

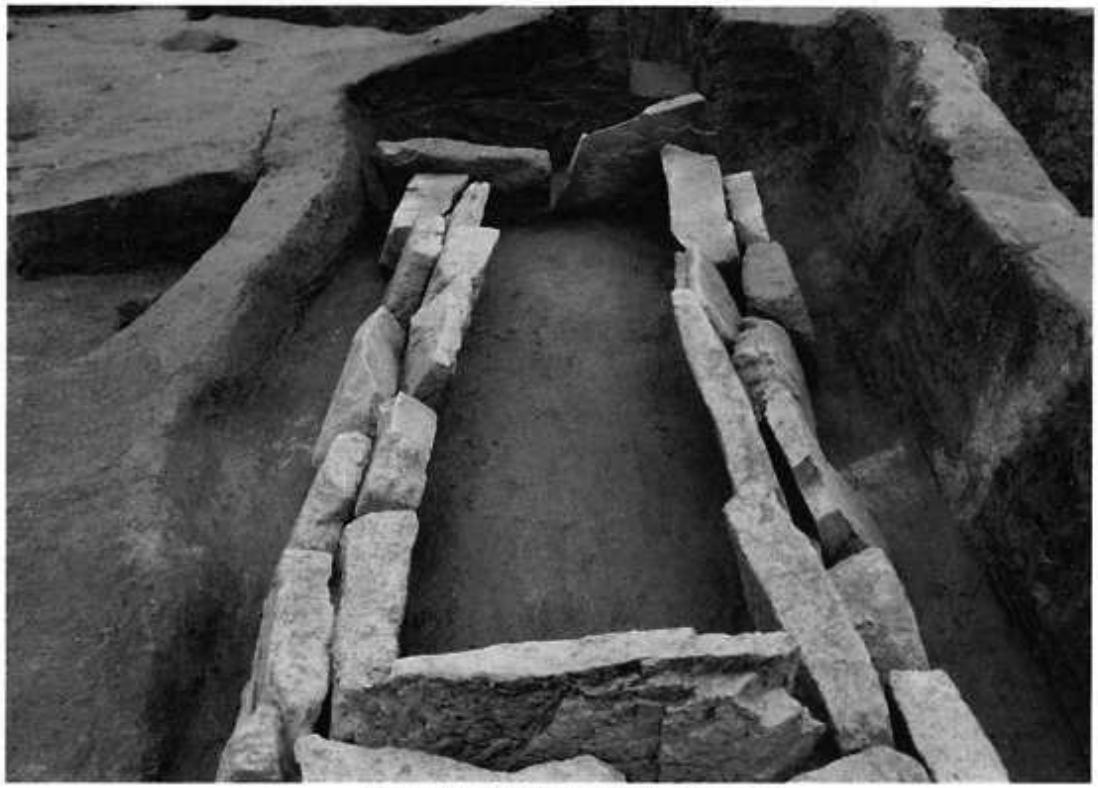
b．同上　東側小口基底石（北東から）

a．第1主体部西側小口基底石（南西から）

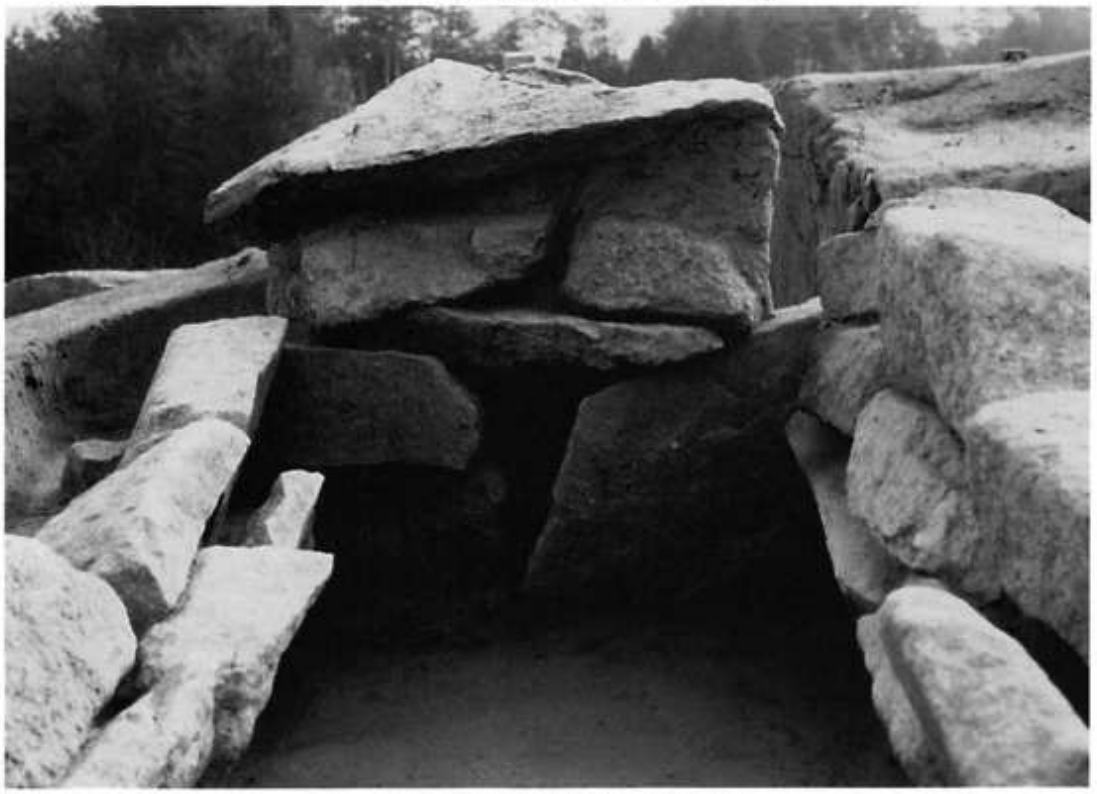
b．同上　完堀状況（西から）

a．第2主体部検出状況（東から）

b．同上　掘方掘り下げ状況（西から）



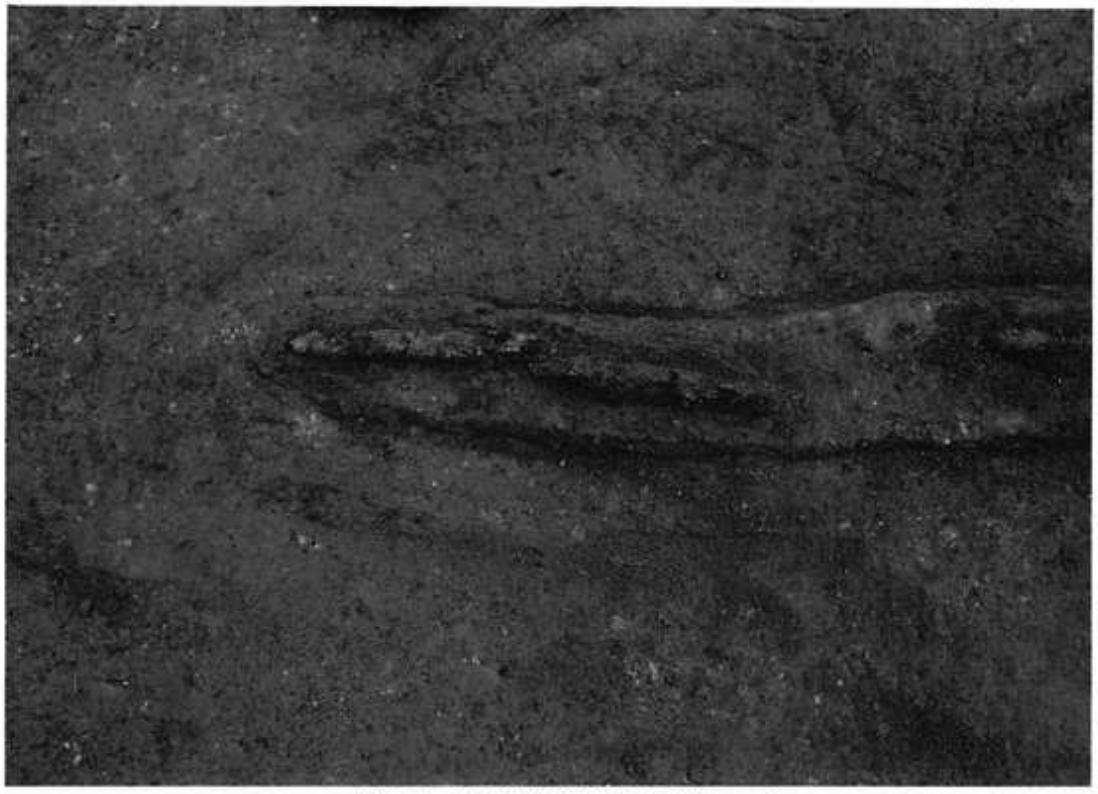
a．第2主体部東側小口状況（西から）



b．同上　西側小口状況（東から）

a．第2主体部遺物出土状況（西から）

b．同上（北から）



a．第2主体部遺物出土状況（北から）

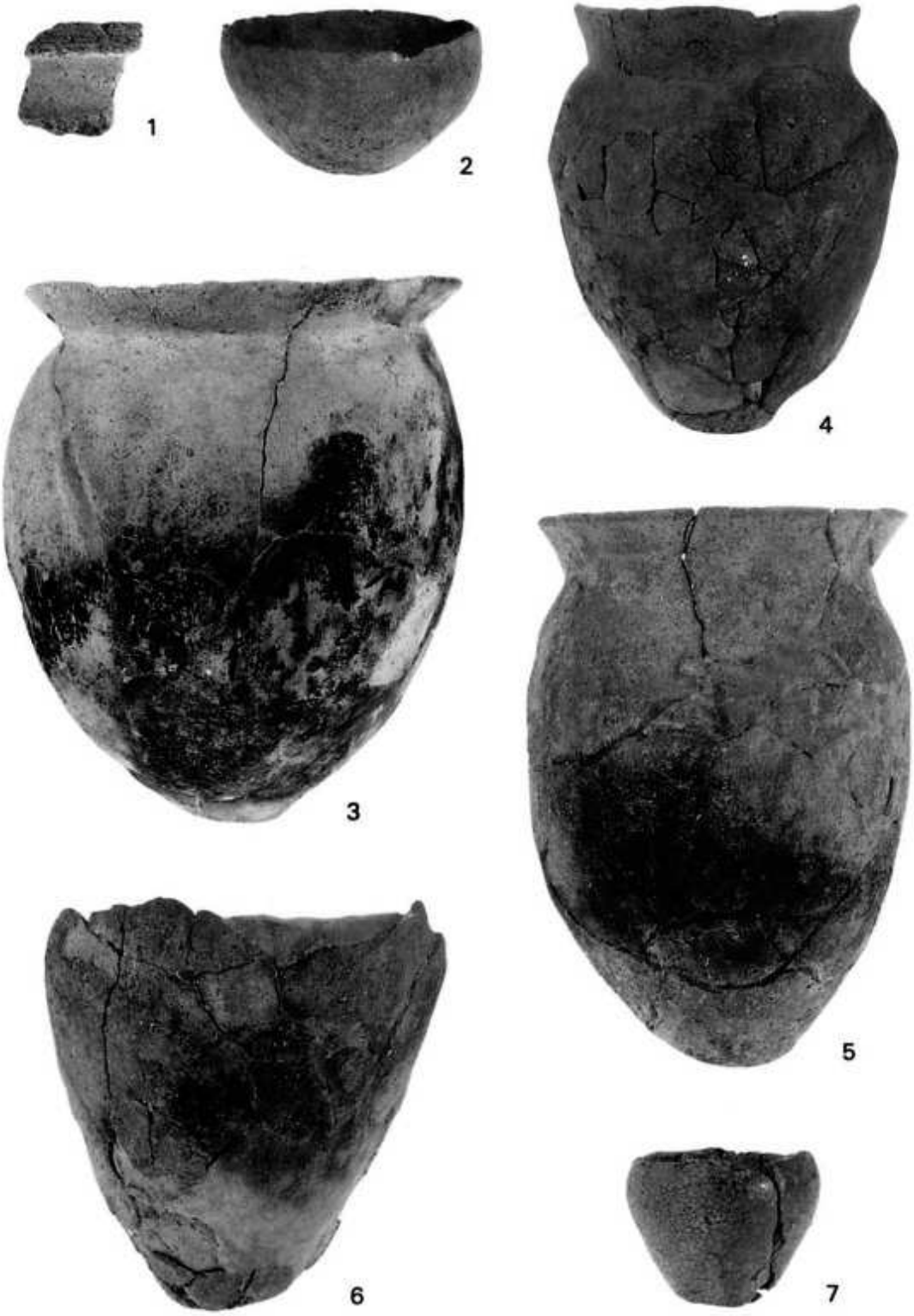
b．同上（南から）

a．ＳＸ１　検出状況（北から）

b．同上　完掘状況（北から）

a．調査風景

b．調査風景



出土遺物Ⅰ

出土遺物Ⅱ

16

17

18

19

20

21

22

23

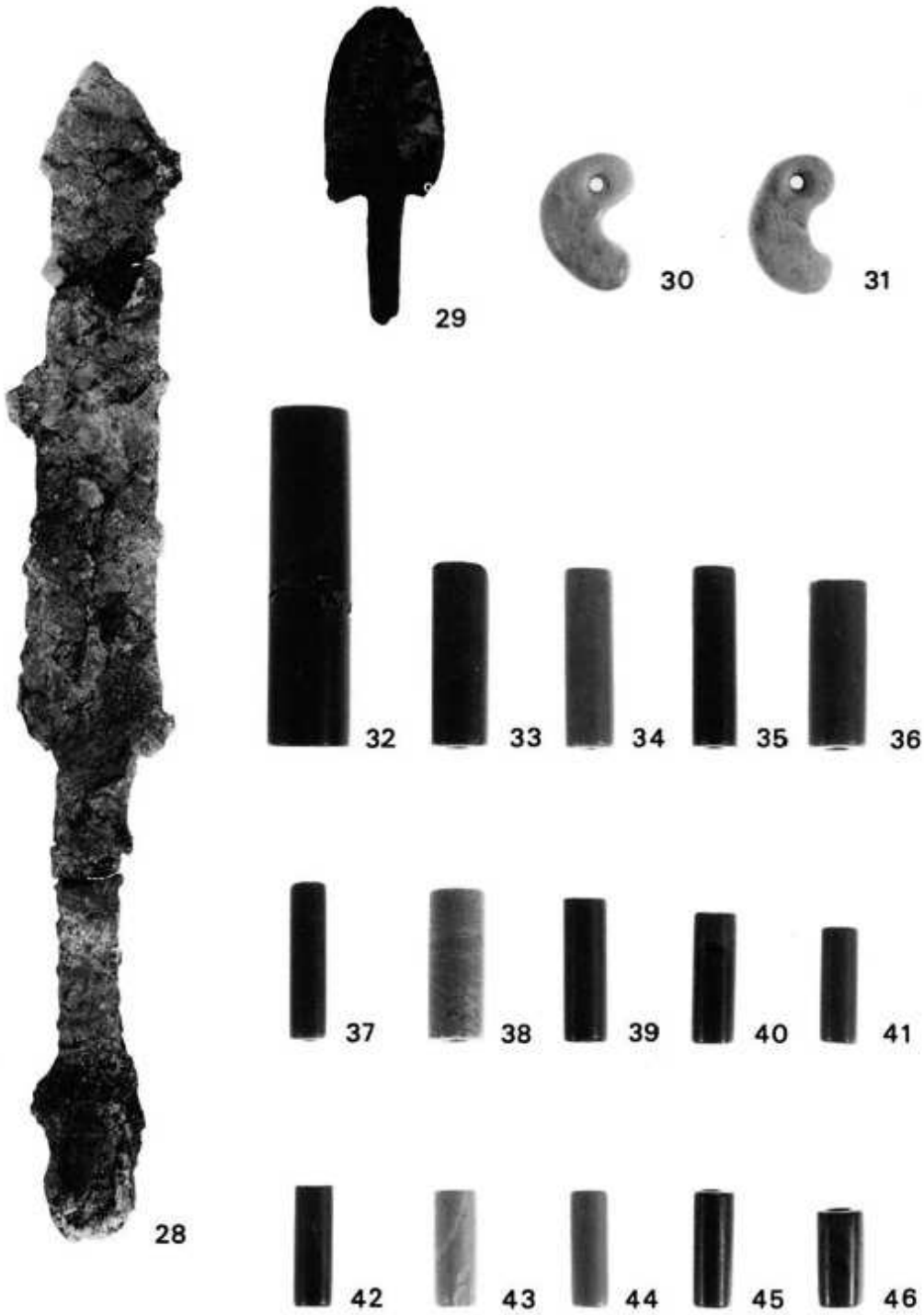
24

25

26

27

出土遺物Ⅲ



出土遺物Ⅳ

47

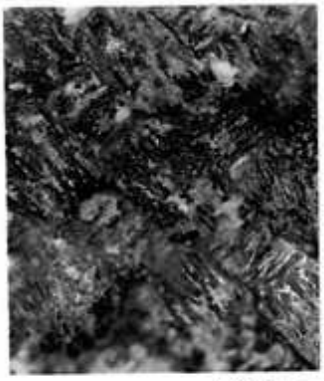
48

51

49

50

(×45) 47



(×45) 50

出土遺物V

a．宮領1号遺跡遠景（北から）

b．同上　調査前近景（東から）

a．ＳＢ１　検出状況（北から）

b．同上　床面検出状況（北から）

a．SB1　炉跡検出状況（東から）

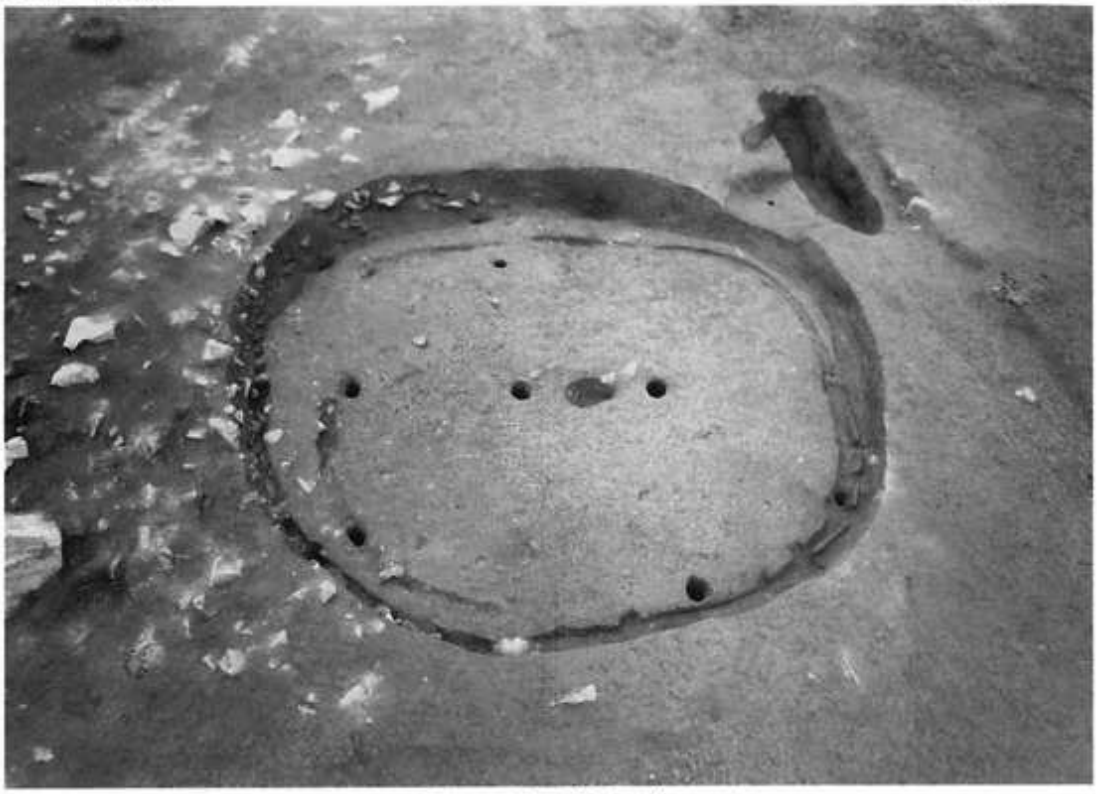
b．同上　完掘状況（東から）

a．SB1　遺物出土状況

b．同上　完掘状況（北から）

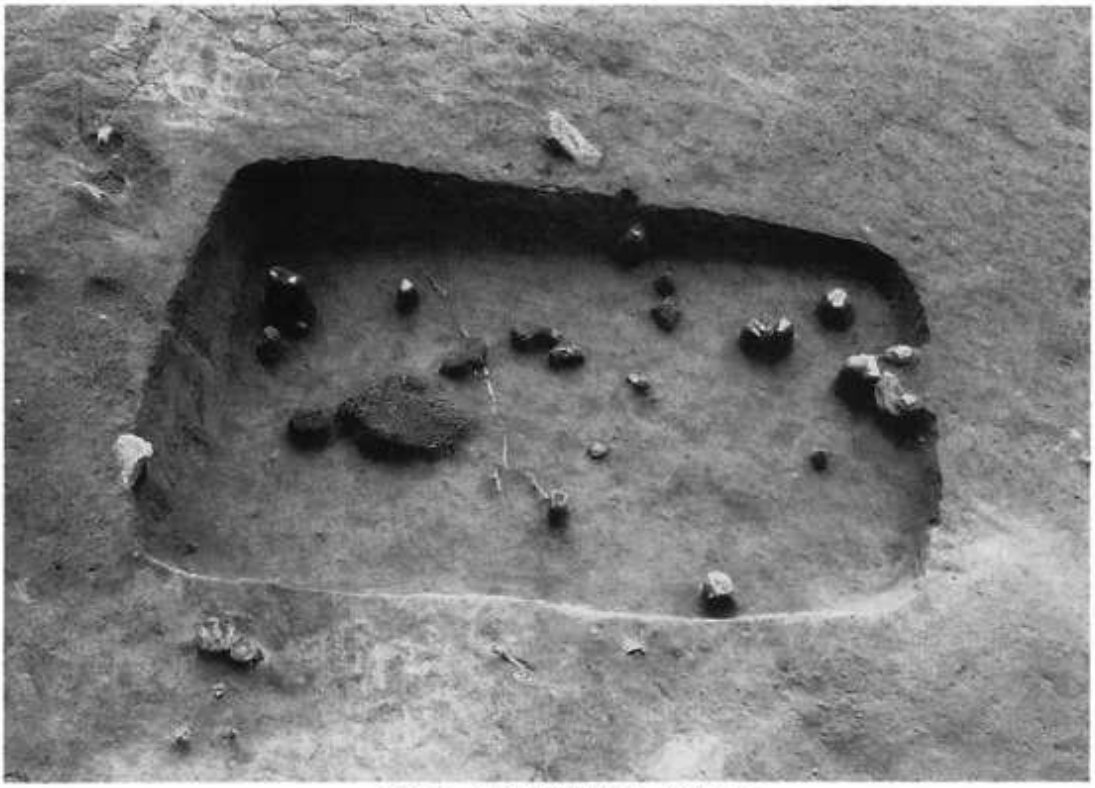
a．ＳＢ２　検出状況（北から）

b．同上　床面検出状況（北から）

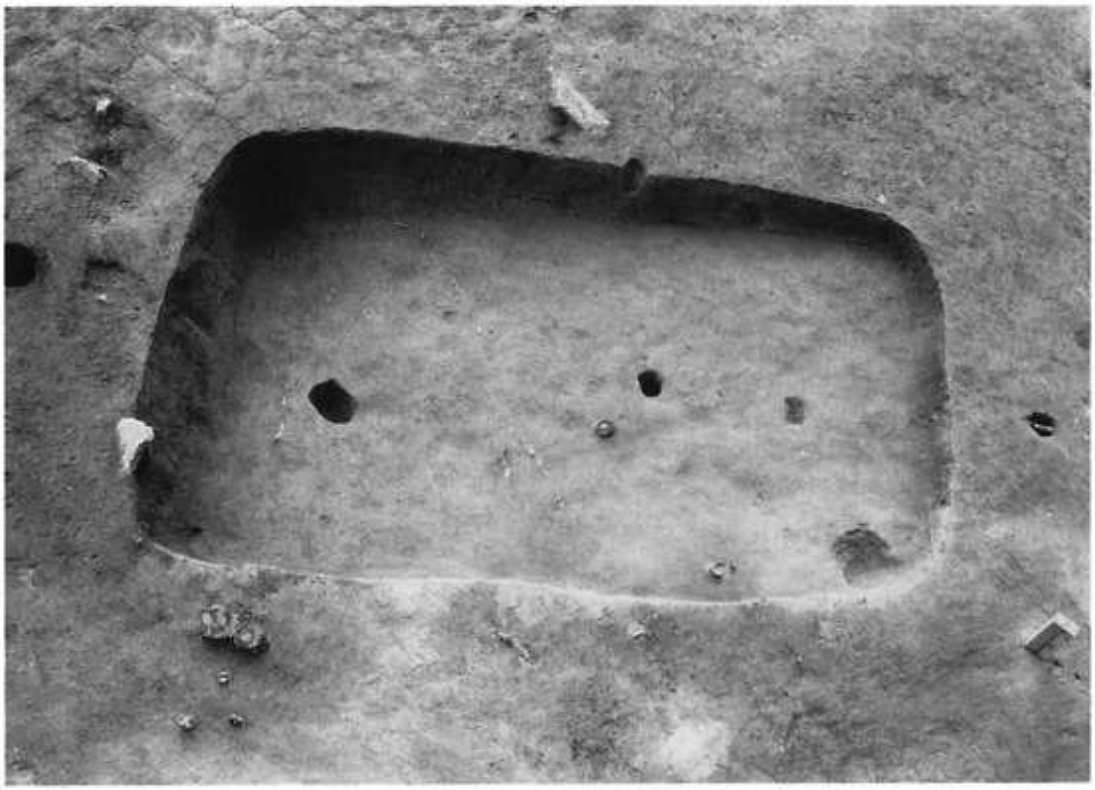


a．SB2　完掘状況（北から）

b．同上　調査風景



a．ＳＢ３　床面検出状況（東から）



b．同上　完掘状況（東から）

a．SB4　床面検出状況（西から）

b．SB4・6　完掘状況（西から）

a．SB6　完掘状況（南から）

b．柵列完掘状況（北から）

a．ＳＤ1　完掘状況（西から）

b．ＳＤ2　検出状況（南から）

a．ＳＸ１　検出状況（西から）

b．同上　完掘状況（北から）

a．SX2　完掘状況（北から）

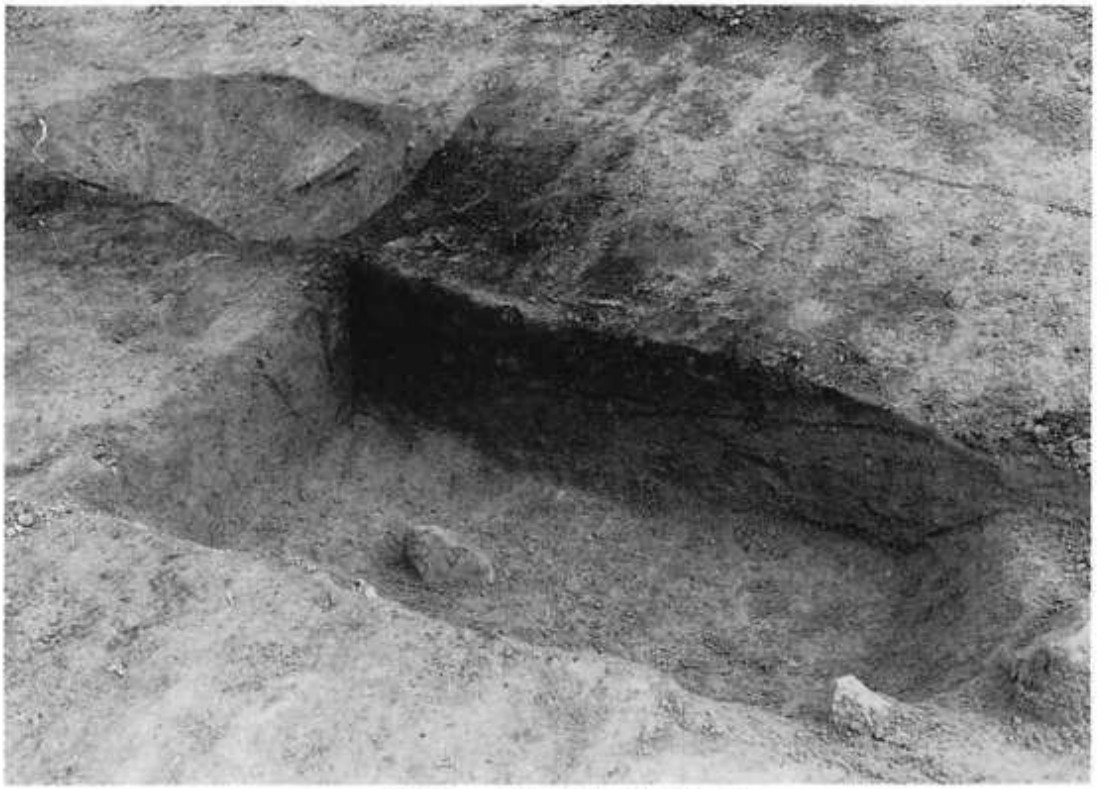
b．同上（西から）

a．ＳＸ３　検出状況（西から）

b．同上　完掘状況（西から）

a．ＳＸ４　検出状況（東から）

b．同上　完掘状況（西から）



a．ＳＸ５　検出状況（南西から）

b．同上　完掘状況（北から）

a．ＳＸ６　検出状況（北から）

b．同上　完掘状況（東から）

a．ＳＸ７　検出状況（南から）

b．同上　完掘状況（北から）

a．調査区東側谷部検出状況（南から）

b．遺跡見学会風景

1

1

1

出土遺物Ⅰ

2

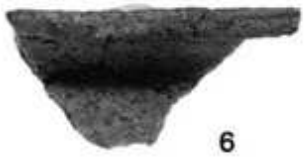
2

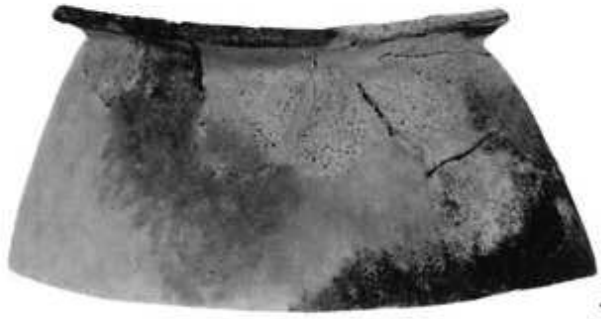
出土遺物Ⅱ

3

4

5


6


7

8

9

11

12

10

13

14

15

16

17

18

出土遺物Ⅲ

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

出土遺物Ⅳ

33

34

36

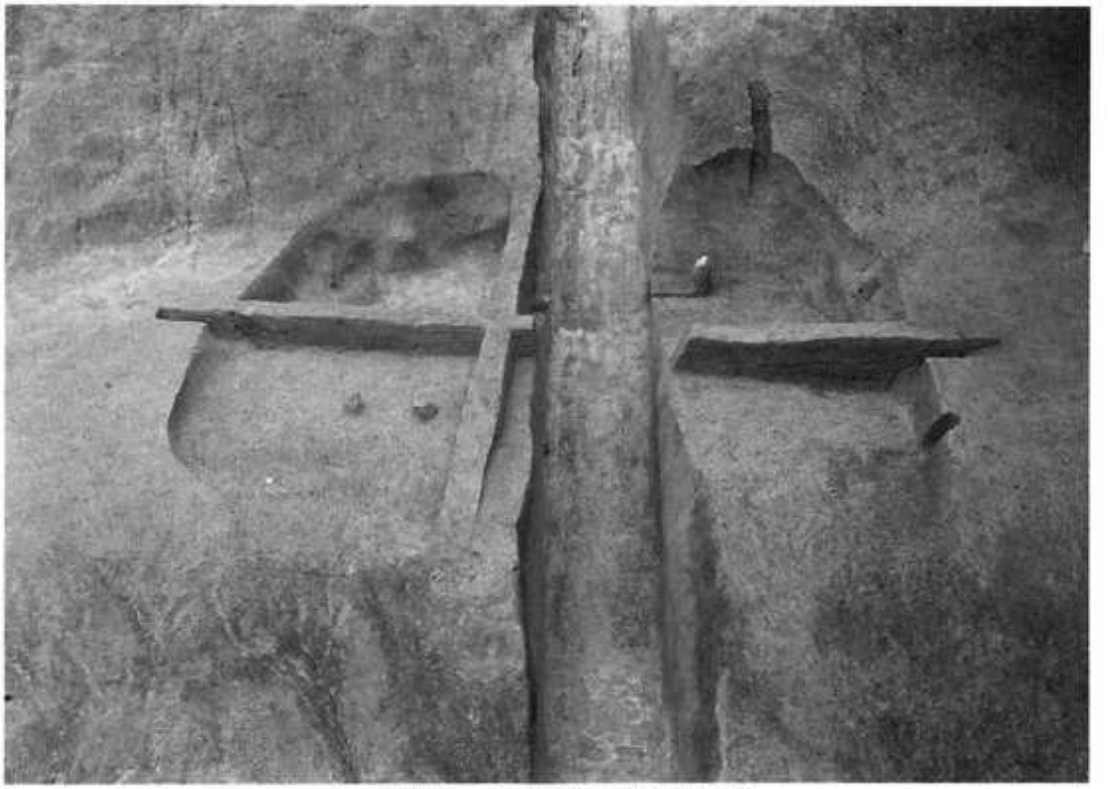
37

35

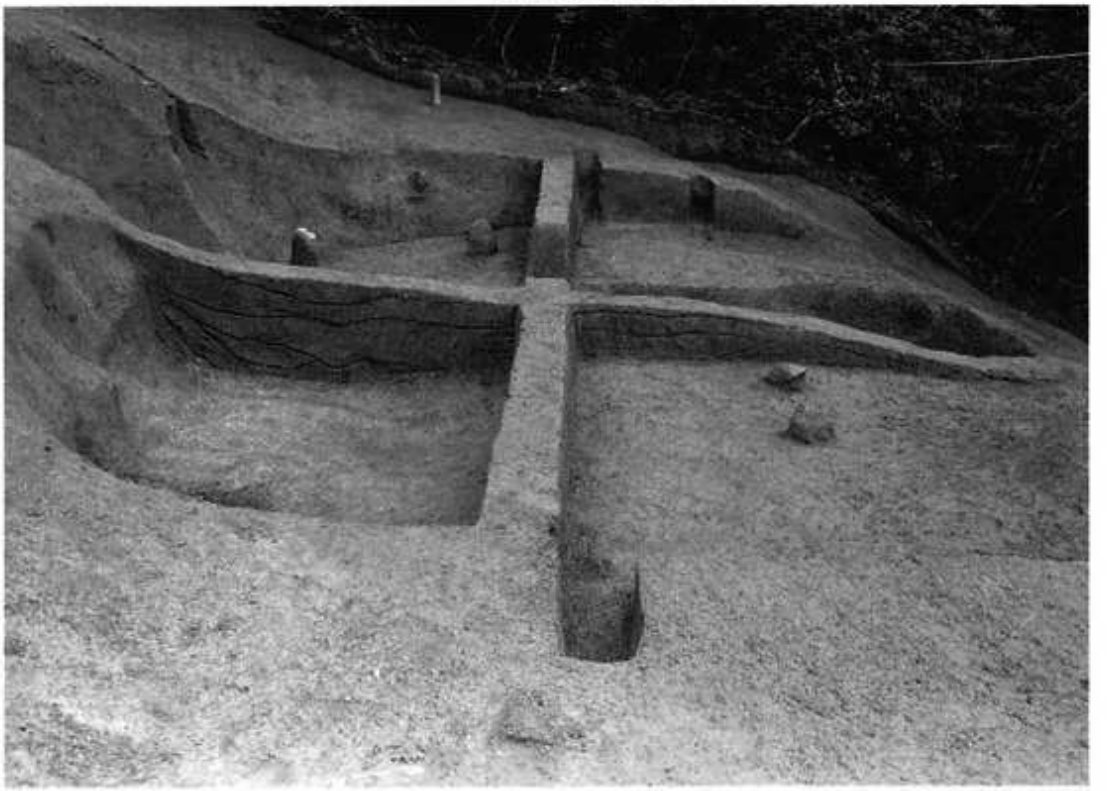
出土遺物Ⅴ

a．柳原遺跡遠景（西から）

b．同上　調査前近景（東から）

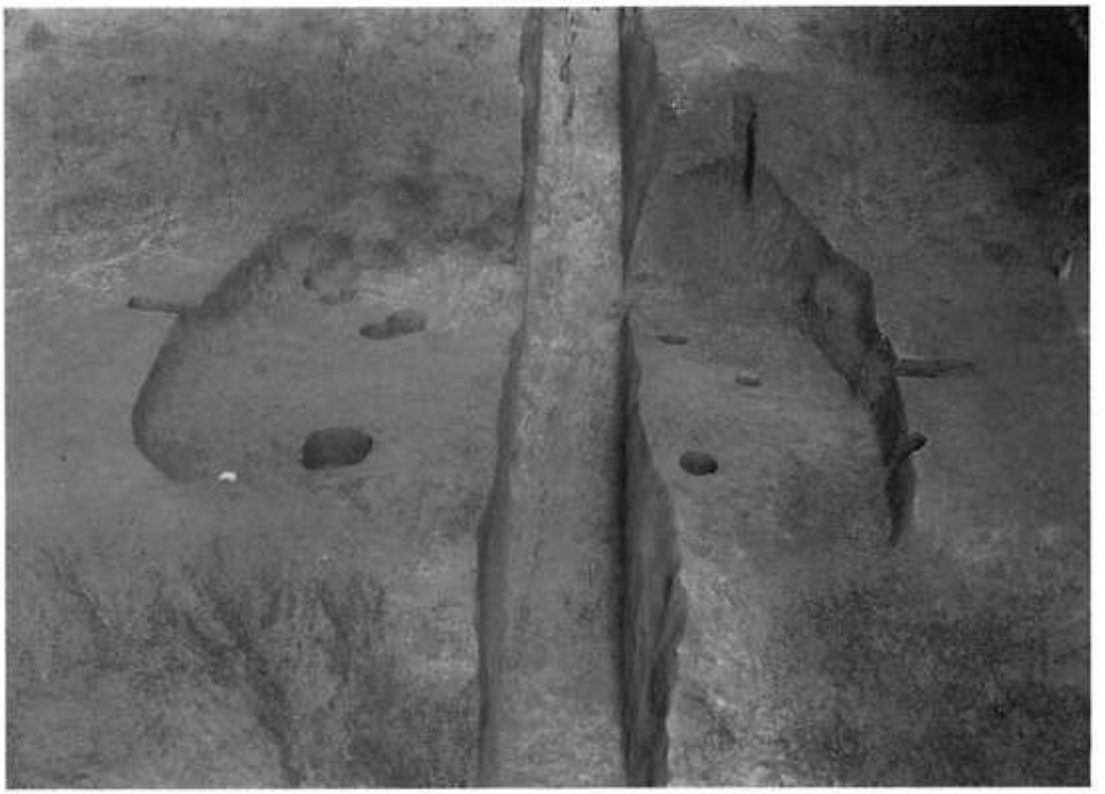


a．ＳＢ１　検出状況（南東から）

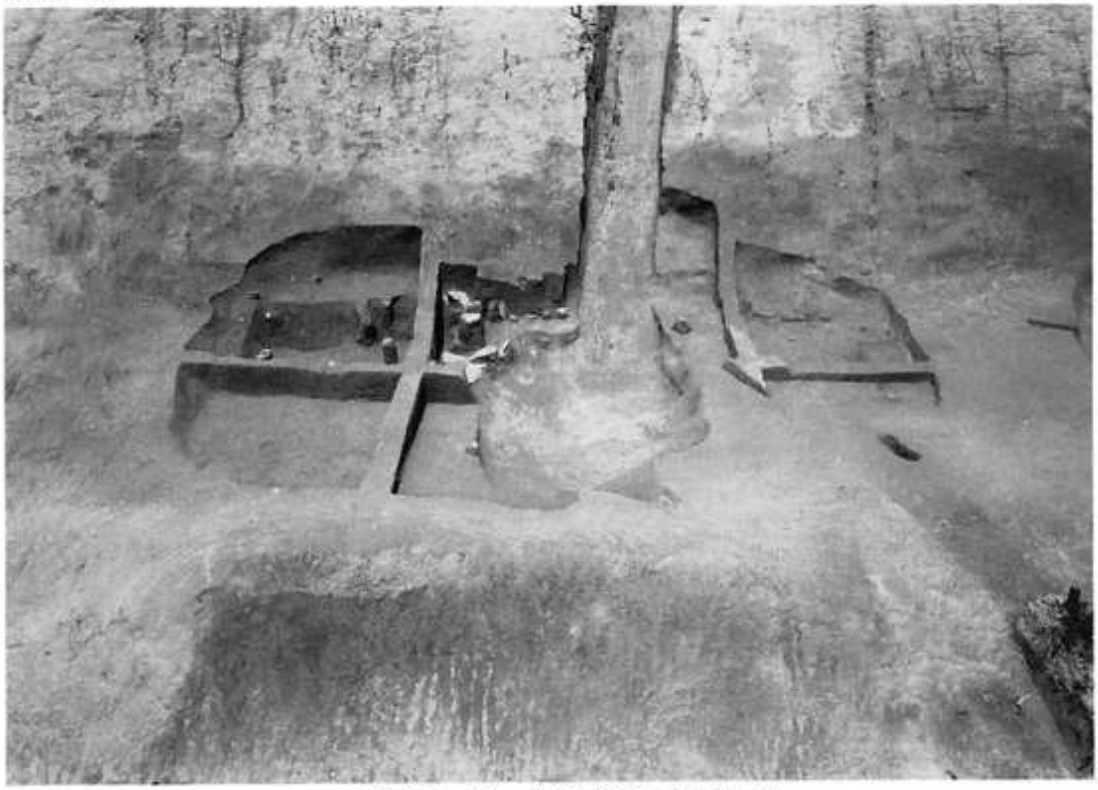


b．同上　東西土層断面（南西から）

a．ＳＢ１　土層断面（北東から）

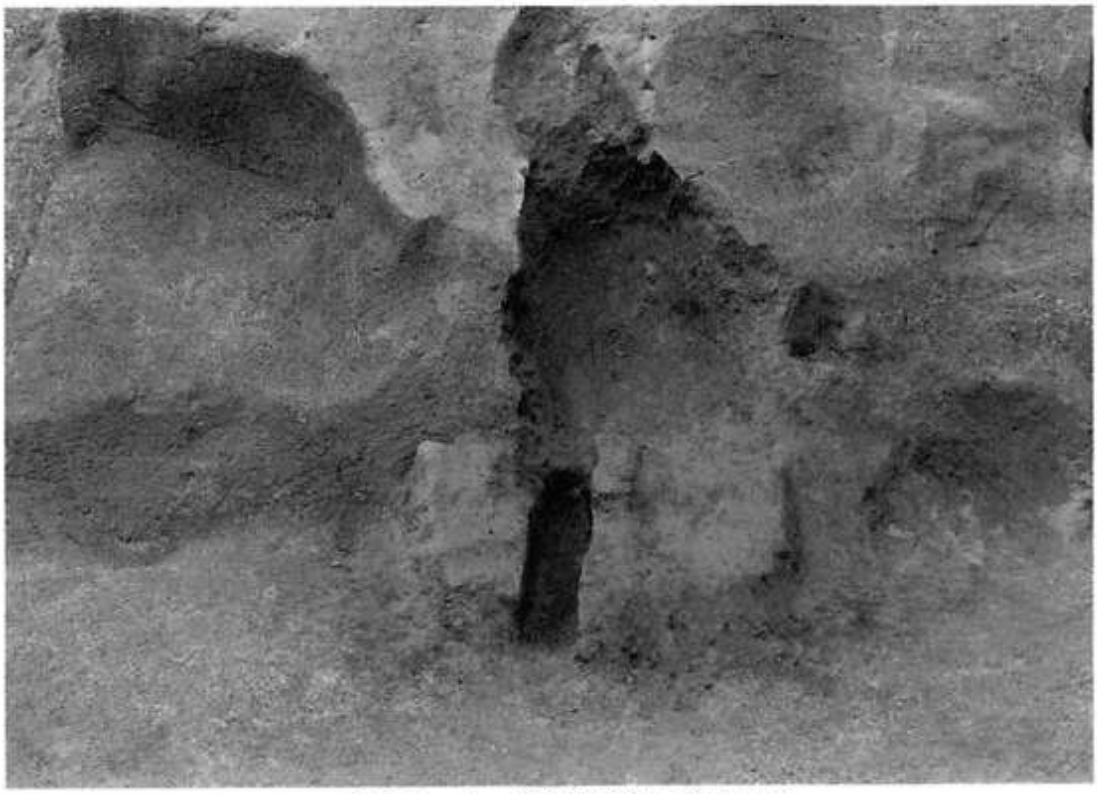


b．同上　完掘状況（南東から）



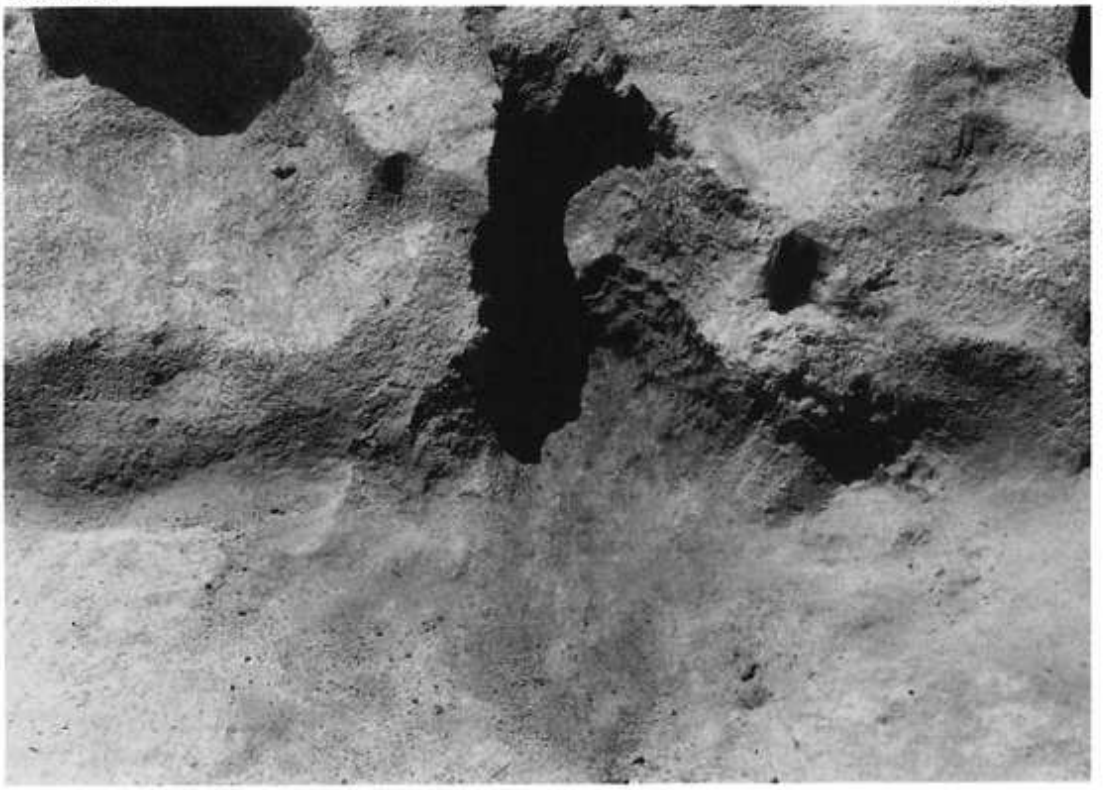
a．ＳＢ２・３　検出状況（南東から）

b．ＳＢ２　検出状況（南東から）



a．SB2　カマド検出状況（南東から）

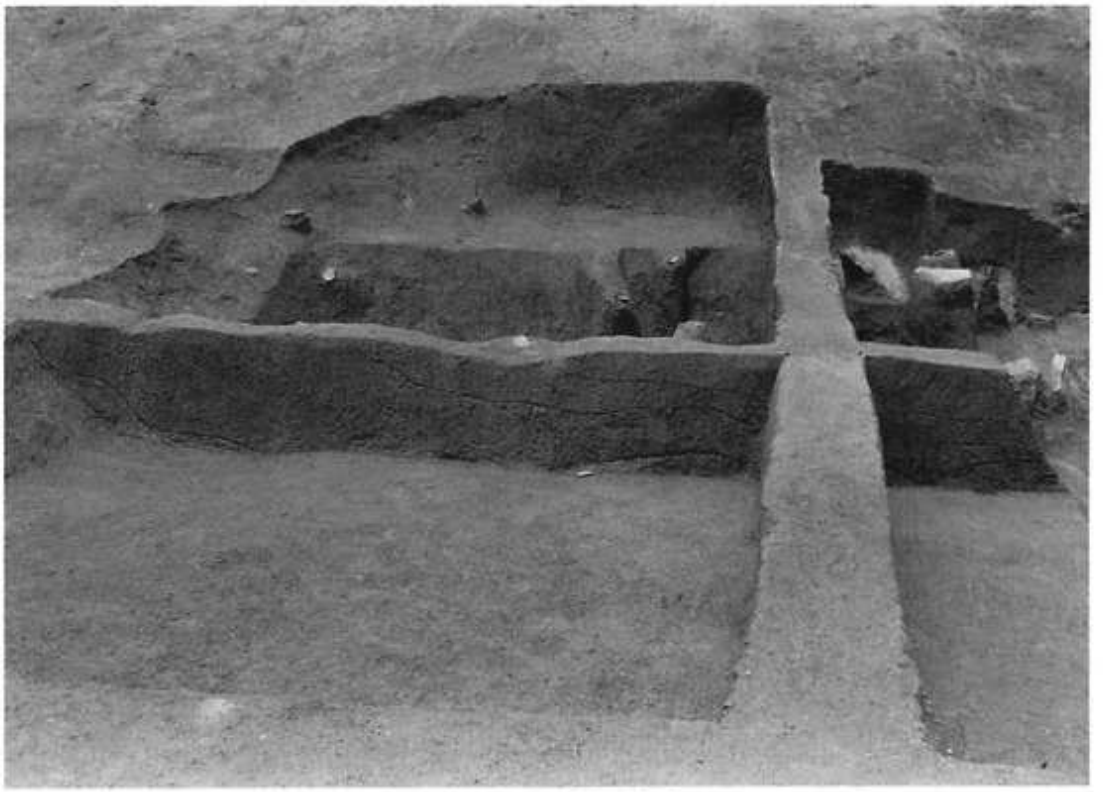
b．同上　袖部土層断面（南東から）



a．SB2　カマド完掘状況（南東から）

b．同上　床面検出状況（南東から）

a．ＳＢ３・４　検出状況（南西から）



b．ＳＢ３　土層断面（南東から）

a．ＳＢ４　土層断面（南東から）

b．ＳＢ３・４　遺物出土状況（南東から）

a．SB3・4　カマド検出状況（南東から）

b．同上　カマド掘り下げ状況（南東から）

a．SB3・4　カマド完掘状況（南東から）

b．同上　床面検出状況（南東から）

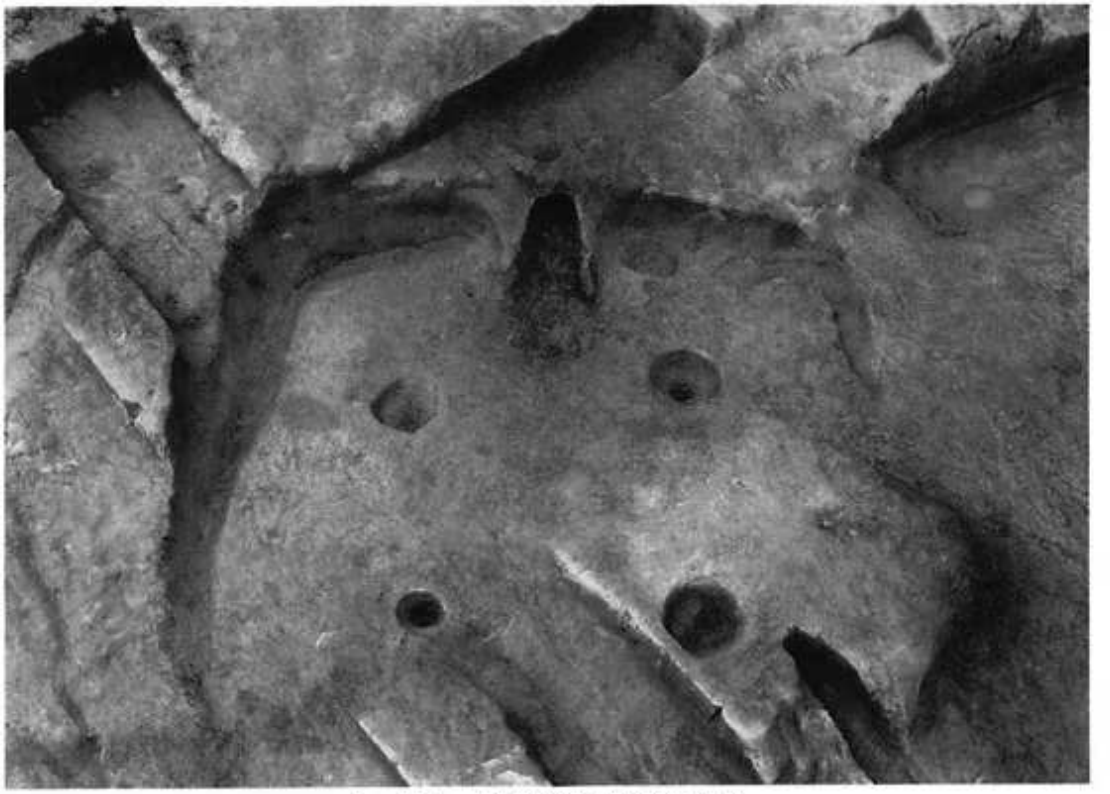
a．ＳＢ３・４　完掘状況（南東から）

b．ＳＢ１～４　完掘状況（南西から）

a．SB5　検出状況（南東から）

b．同上　遺物出土状況（南東から）

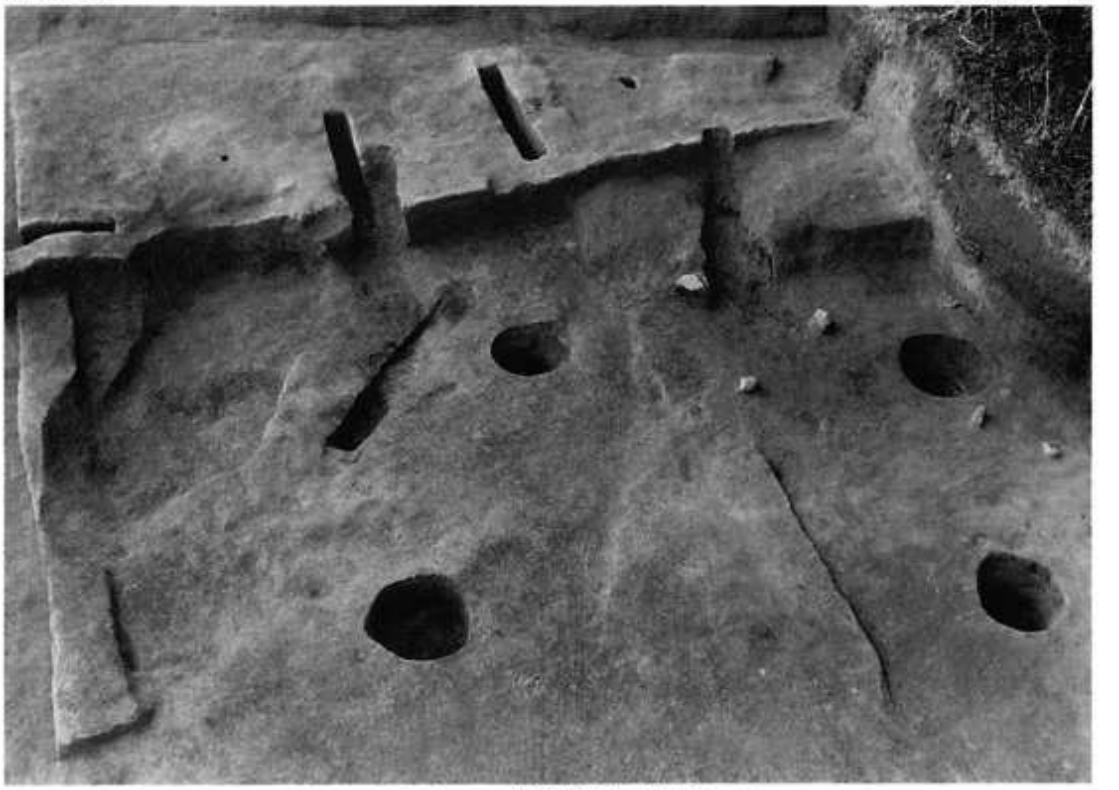
a．ＳＢ５　遺物出土状況



b．同上　完掘状況（南東から）

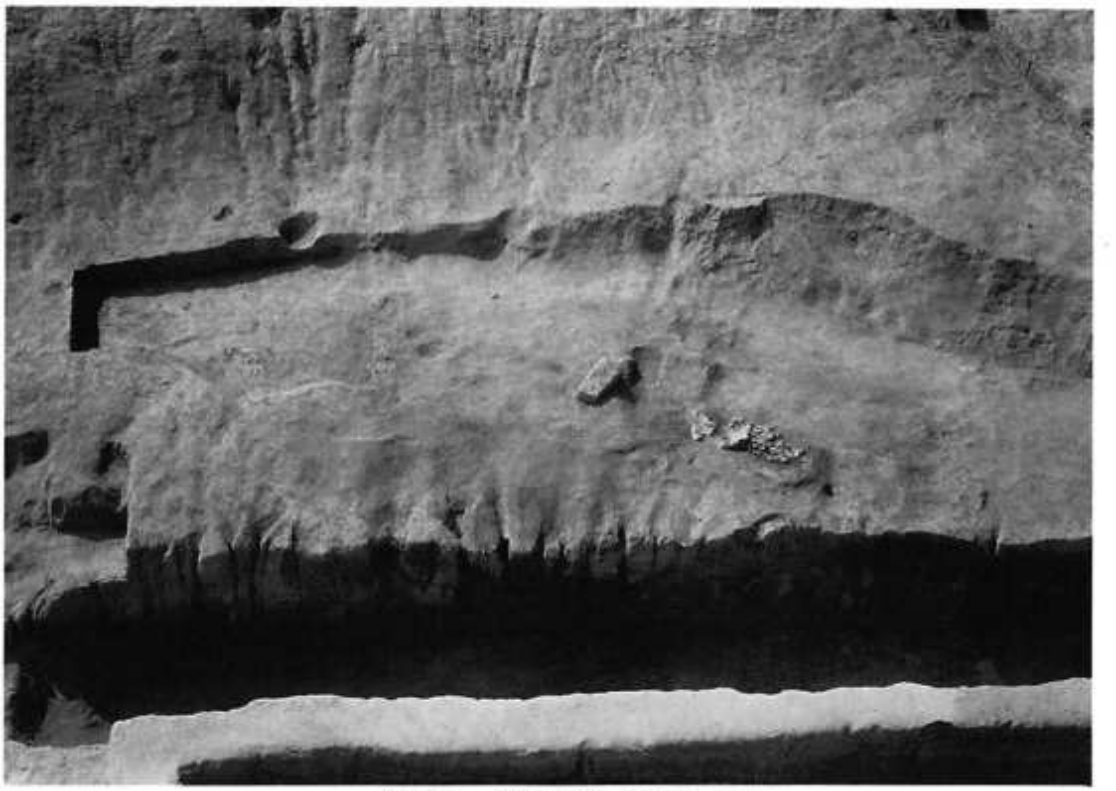
a．ＳＢ６ａ　検出状況（南東から）

b．同上　カマド検出状況（南東から）



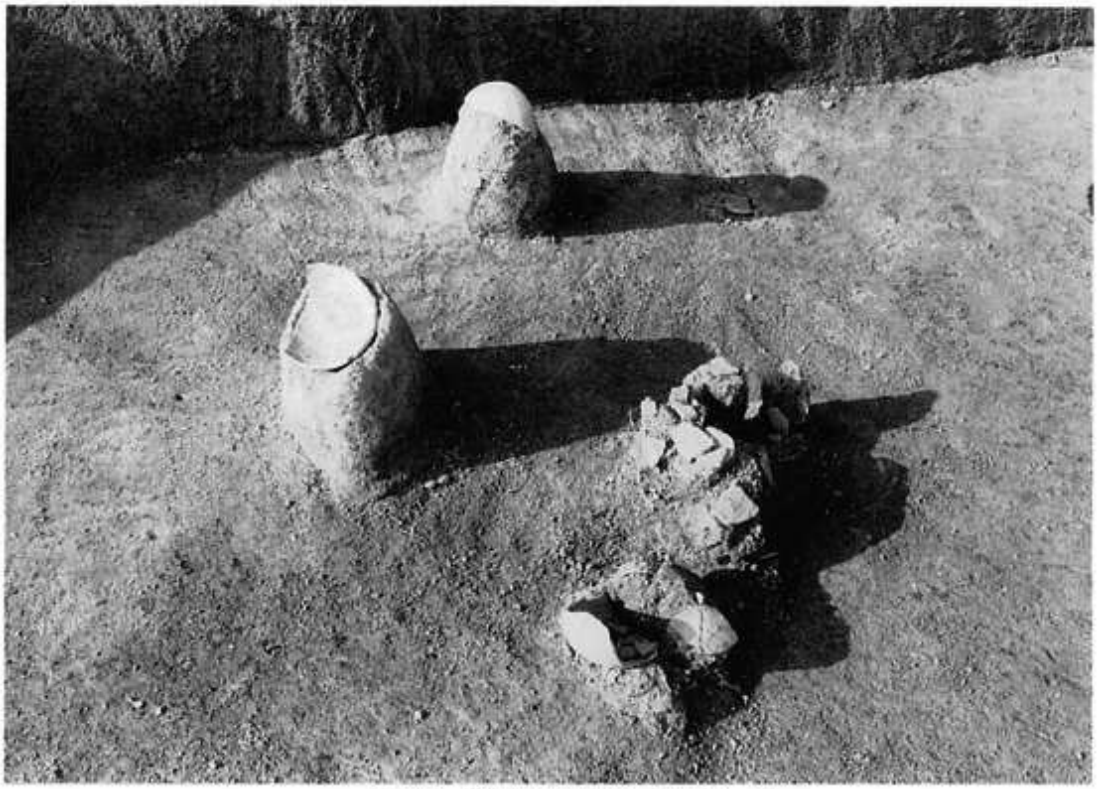
a．ＳＢ６ａ　完掘状況（南東から）

b．ＳＢ６ｂ　完掘状況（南東から）

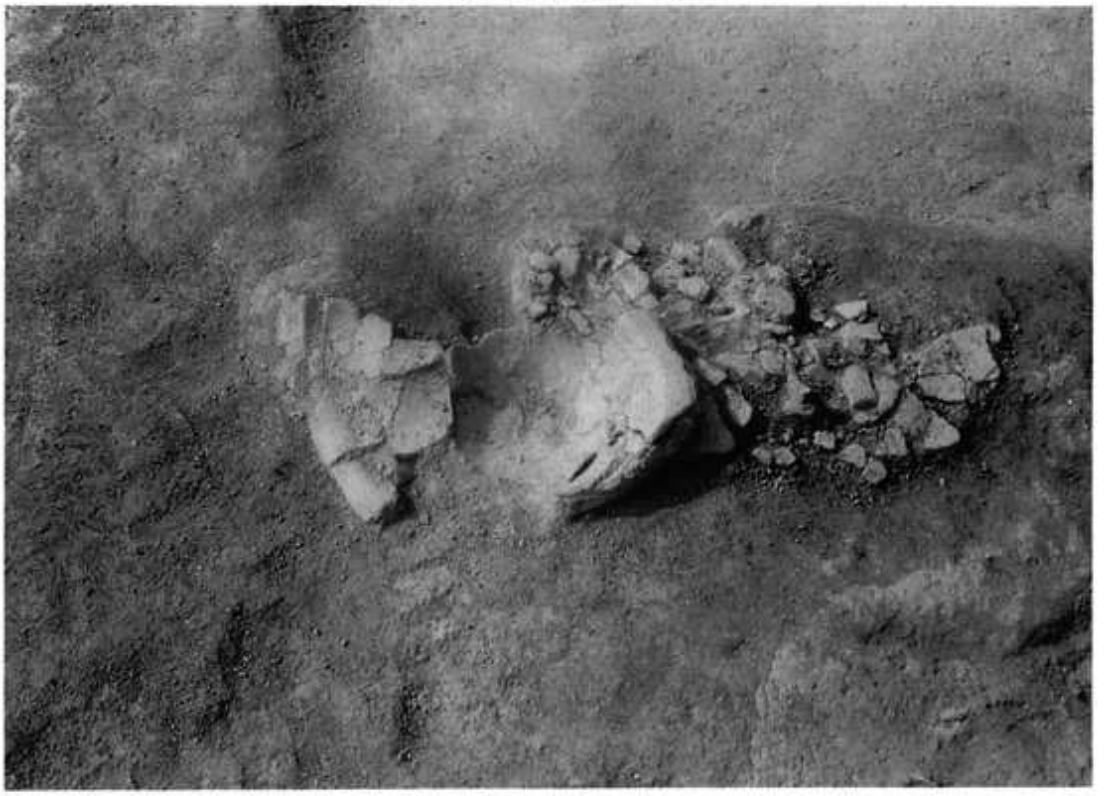


a．ＳＸ２　検出状況（南東から）

b．同上　遺物出土状況（南東から）



a．ＳＸ２　遺物出土状況（南東から）



b．同上（南東から）

a．ＳＸ３　検出状況（南東から）

b．同上　完掘状況（南西から）

a．ＳＸ４　完掘状況（南西から）

b．ＳＸ５　完掘状況（南東から）

a．ＳＸ６　検出状況（南東から）

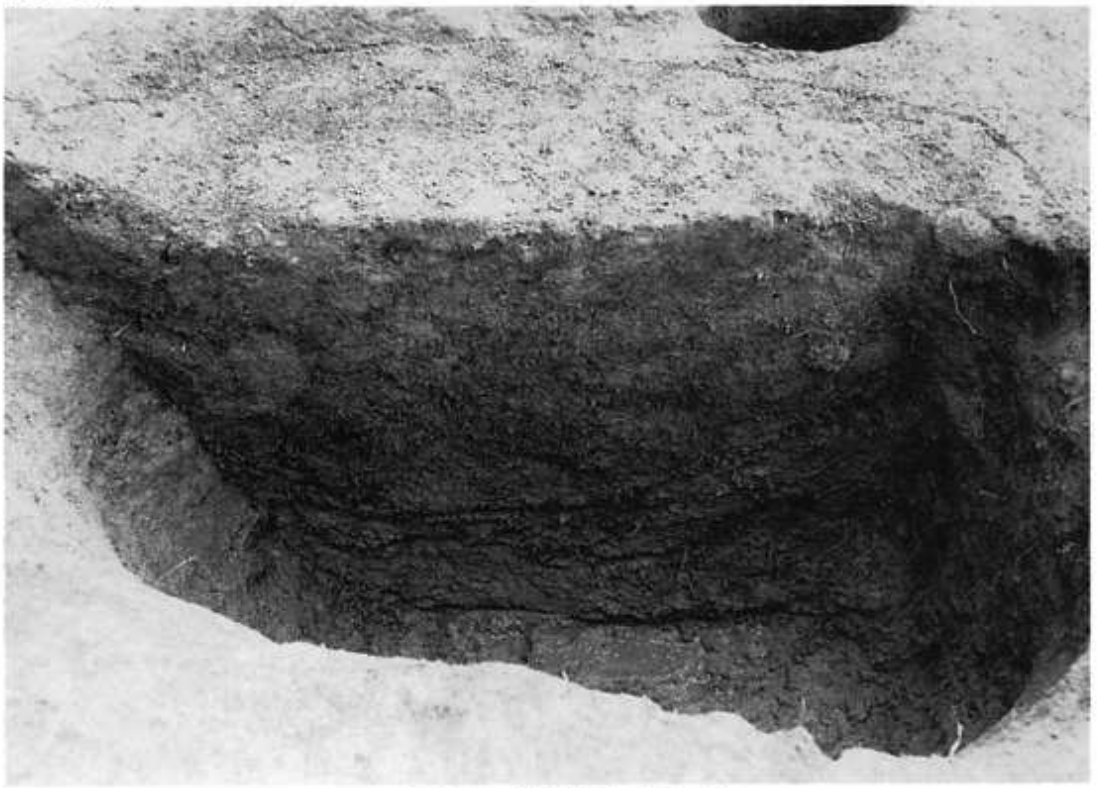
b．同上　完掘状況（南東から）

a．ＳＫ１　検出状況（南東から）

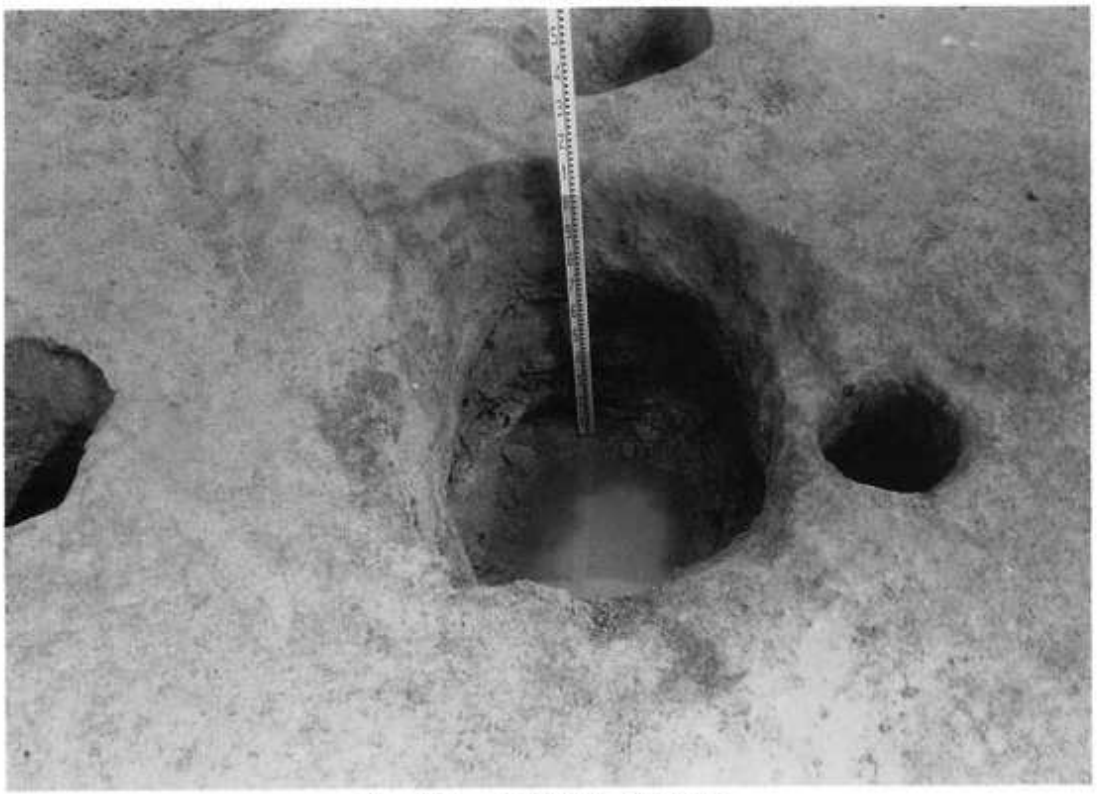
b．同上　完掘状況（南東から）

a．SK2　検出状況（南西から）

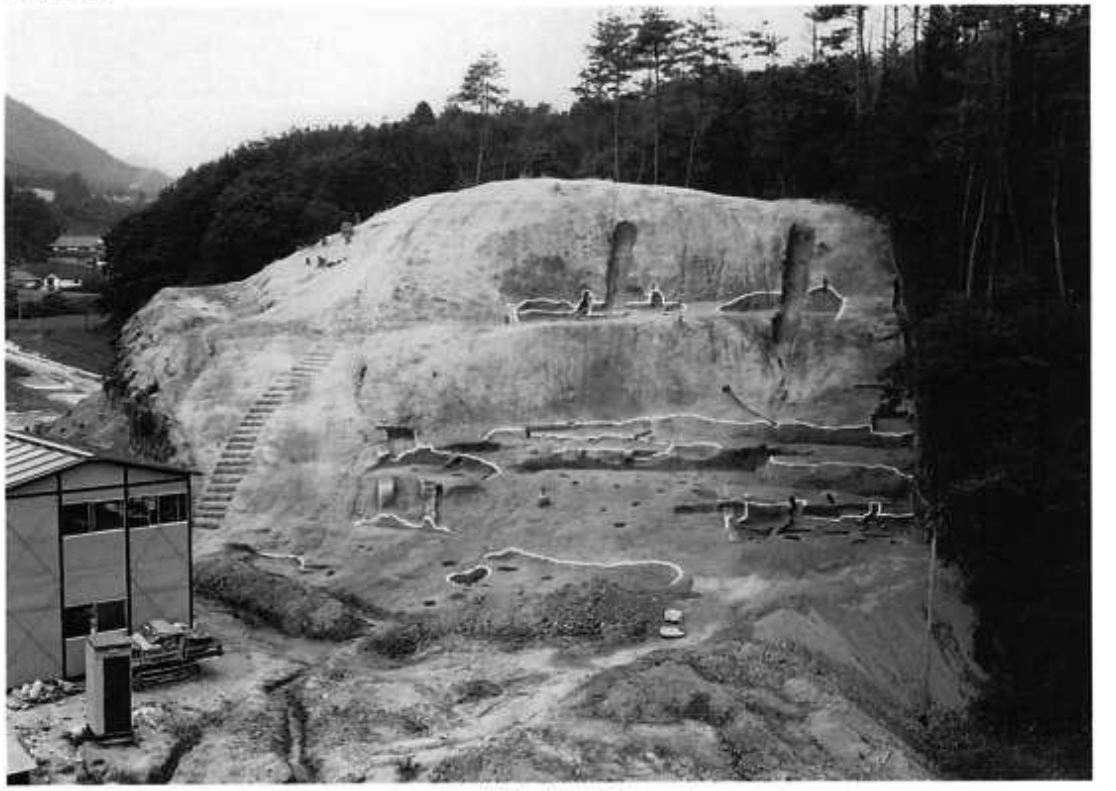
b．同上　遺物出土状況（東から）



a．ＳＥ１　土層断面（西から）



b．同上　完掘状況（南から）



a．調査後近景（東から）

b．同上（南東から）

a．調査風景

b．遺跡見学会風景

1

2

3

4

5

6

7

8

9

出土遺物Ⅰ

10

12

11

14

13

15

16

17

18

出土遺物Ⅱ

19

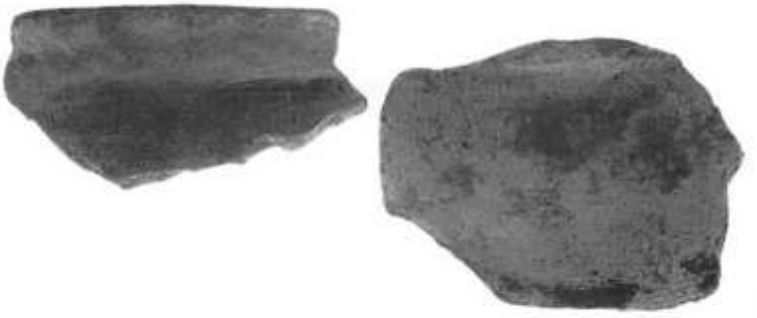
20

出土遺物Ⅲ

21

22

24



23

出土遺物Ⅳ

25

26

27

29

28

出土遺物V

30

31

32

33

34

35

36

出土遺物Ⅵ

37

40

41

38

42

39

出土遺物Ⅶ

43

44

46

45

47

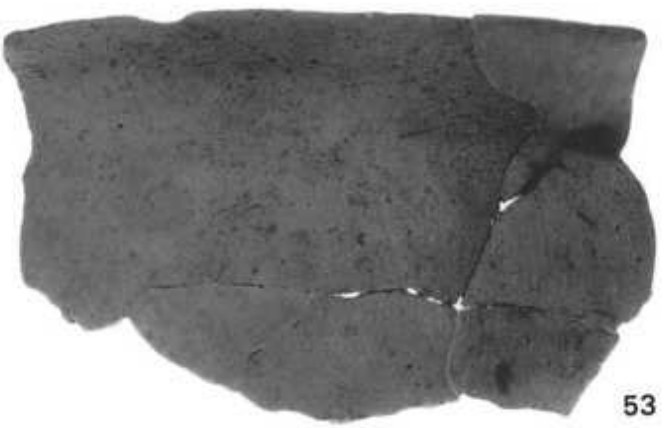
48

49

50

51

52


53

出土遺物Ⅷ

54

56

57

55

58

出土遺物Ⅸ

59

60

61

62

63

64

65

66

67

68

69

70

出土遺物X

71

73

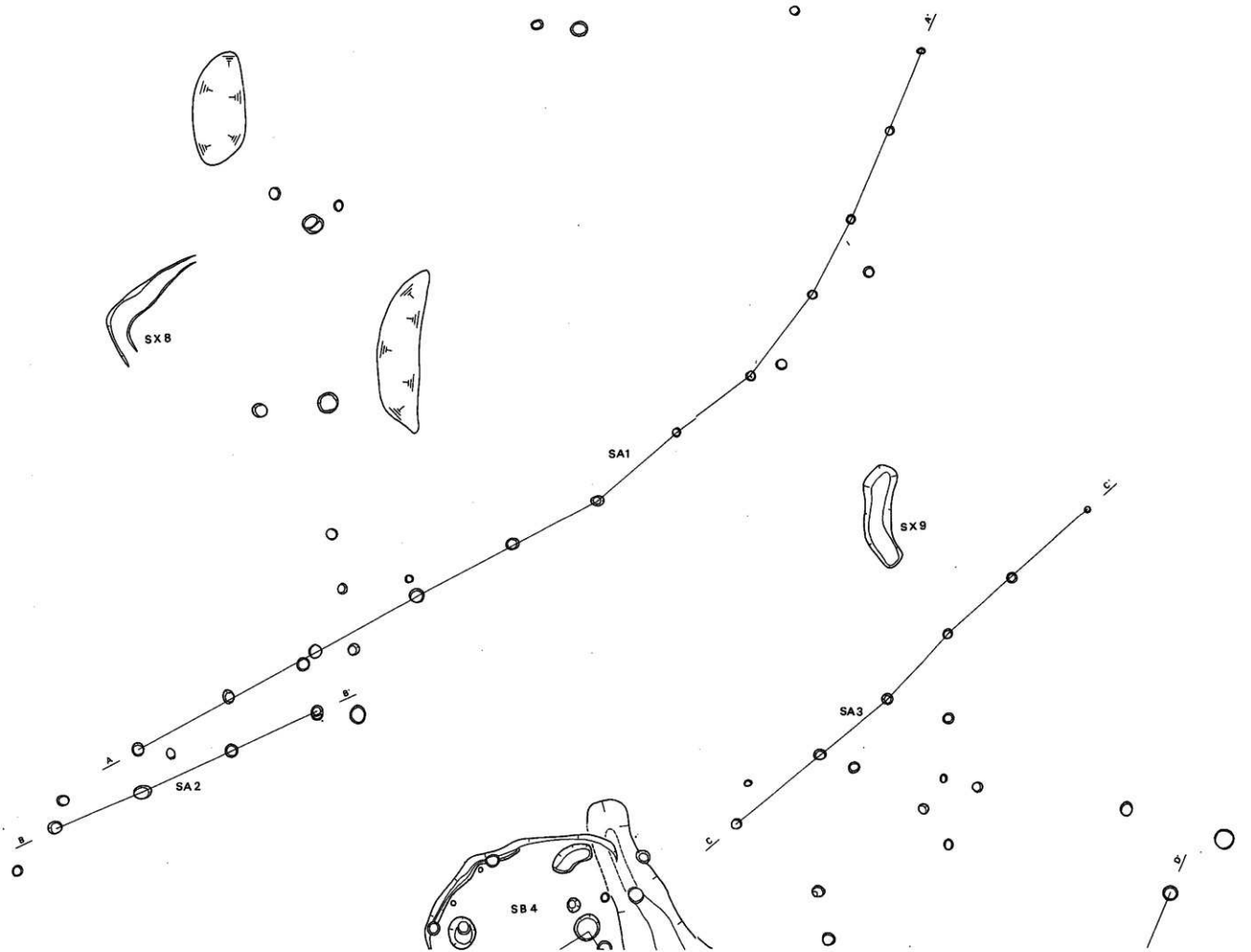
75

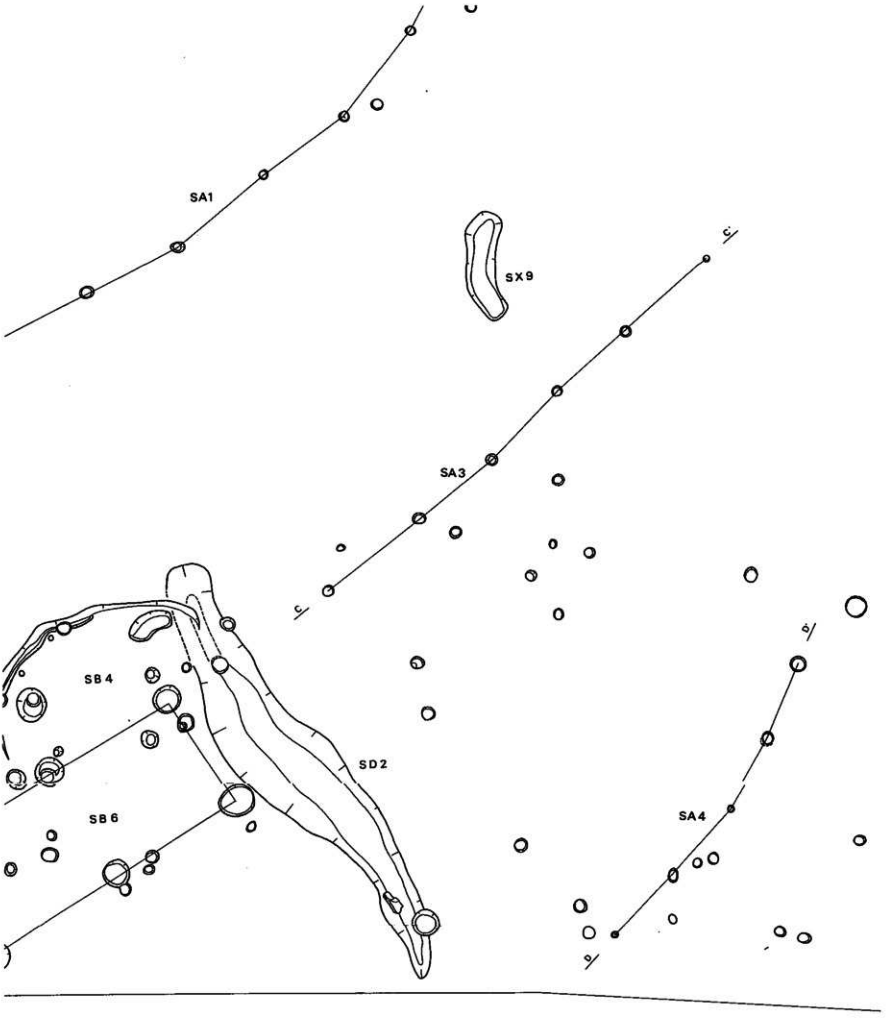
76

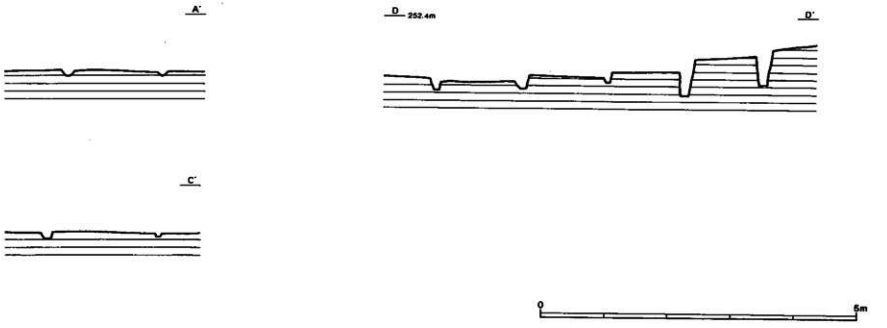
74

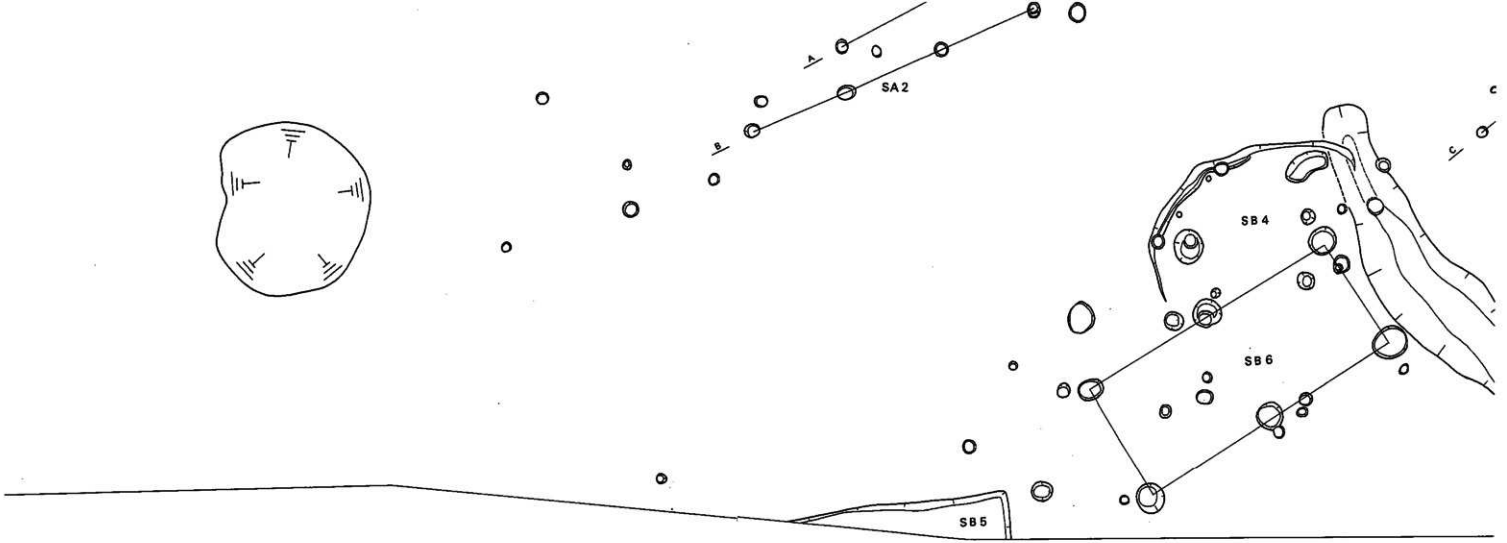
72

出土遺物XI

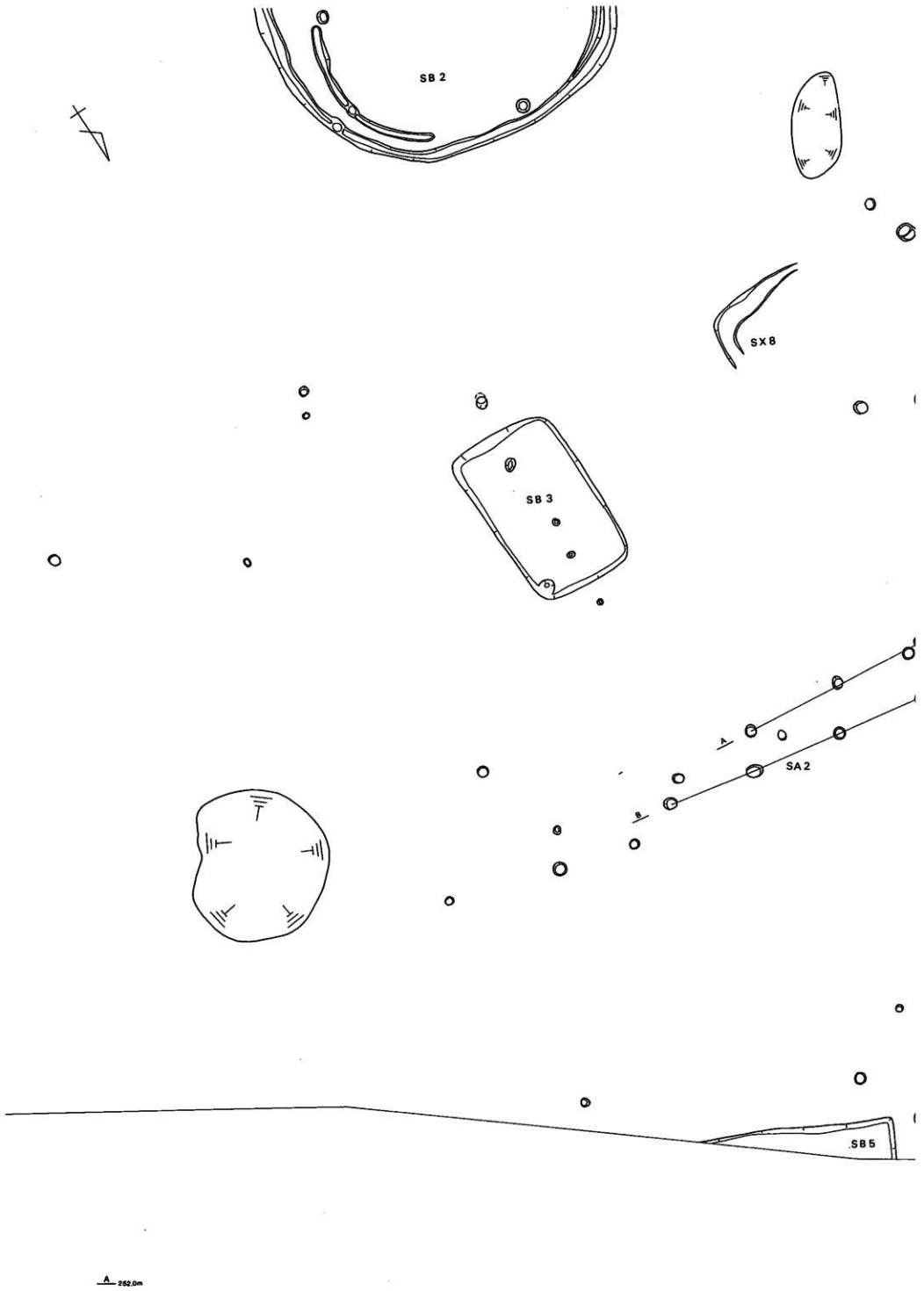

SX8
SA1
SX9
SA3
SA2
SB4


SA1
SX9
SA3
SB4
SD2
SB6
SA4


A'
D
252.4m
D'
C'
0
5m



付図　宮領1号遺跡掘列実測図（1：60）


SB 2
SX 8
SB 3
A
B
SA 2
SB 5
A 252.0m

文献データシート

書　　名	山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（IX） （広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第115集）
編 集 者	鍛治益生
執 筆 者	鍛治益生　大上裕士　沢元史代
発 行 所	財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
発行年月	1993年3月
遺 跡 名	①才が迫遺跡　②宮領1号遺跡　③柳原遺跡
読　　み	①さいがさこ　②みやりょう　③やなぎはら
所 在 地	①②広島県東広島市大字宮領　③小谷
種　　別	①古墳・集落・墓　②③集落
時　　代	①古墳・弥生・中世　②弥生　③古墳

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第115集

山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（IX）

発 行 日　平成5（1993）年3月
編集・発行　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
〒733 広島市西区観音新町4丁目8－49
TEL(082)295-5751
印 刷 所　西日本印刷株式会社
〒731-01 広島市安佐南区長束1丁目1-18
TEL(082)238-2112㈹